

海に生くる人々

葉山嘉樹

青空文庫

室蘭港むろらんこうが奥深く入り込んだ、その太平洋への湾口わんこうに、大黒島だいこくとうが栓せんをしている。雪は、北海道の全土をおおうて地面から、雲までの厚さで横に降りまくった。

汽船まんじゆまる万寿丸は、その腹の中へ三千トンの石炭を詰め込んで、風雪の中を横浜へと進んだ。船は今大黒島をかわろうとしている。その島のかなたには大きな浪なみが打っている。万寿丸はデツキまで沈んだその船体を、太平洋の怒濤どとうの中へこわごわのぞけて見た。そして思い切つて、乗り出したのであつた。彼女がその臨月のからだで走れる限りの速力が、ブリッジからエンジンへ命じられた。

冬期における北海航路の天候は、いつでも非常に陰悪であつた。安全な航海、愉快な航海は冬期においては北部海岸では不可能なことであつた。

万寿丸甲板部かんぽんぶの水夫たちは、デツキに打ち上げる、ダイナマイトのような威力を持つた波浪の飛沫ひまつと戦つて、甲板を洗つていた。ホースの尖端せんたんからは、沸騰点に近い熱湯がほとぼしり出たが、それがデツキを五尺流れるうちには凍るのであつた。五人の水夫は熱

湯の凍らぬうちに、その渾身こんしんの精力を集めて、石炭塊を掃きやった。

万寿丸は右手に北海道の山や、高原をながめて走った。雪は船と陸とをヴェールをもつてさえぎった。悲壮な北海道の吹雪ふぶきは、マストに悲痛な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危難の前に裸体となつて、地下数千尺で掘られた石炭は、数万の炭坑労働者を踏み台にして地上に上がつて来た。そして、今、海上では同じく生命の赤裸々な危険に、その全身を船体と共に暴露しつつある、船員の労働によつて運送されるのであった。藤原六雄ふじわらろくおは、ランプ部屋べやへはいつて、ランプの掃除そうじをしていた。彼は、今年二十八歳のひどくだまりやの、気むずかしやであった。そして、一体彼は何か仕事をしているのか、どうか疑わしいほど、労働がきらいな性しやうのように見えた。彼の職務は倉庫番であった。

ランプ部屋はブリッジに向かい合つて、水夫室と火夫室の間に、みじめに、小さくこしらえられてあつた。藤原はそこでランプのホヤをふきながら、水夫たちが、デッキを掃除しているのを見ていた。彼はこのごろボースンにも、一等運転士にも見込みが悪いことを知っていた。「ストキ（倉庫番）にもワシデッキの時には手伝つてもらわなきやならん。一万トンも八千トンもある船とはちがうんだからな」と、いつか水夫たち全部がそろつて飯を食つてる時にボースンにいわれたことがあつた。

「ふん、ストキとは倉庫番てことだ。倉庫番は倉庫の番さえしてりや、それで沢山だろう」と、彼は答えた。

——それ以来、どうも、おれは水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、さびしそうに、ストキは考えた。

二

船のエンジンはフルスピードをかけていたが、風と浪とで速力がまるで出なかった。未明に出帆しゅっぱんしたのに、夕方になつてもまだ津軽海峡沖つがるを抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかえそうかとの相談も行なわれたが、それは実行されるには至らなかつた。

水夫たちは、暴風雪がだんだん猛烈になつて来るにつれて、その作業も平常とは趣ことにし初めた。船体は保険マーク以上に沈んでいるので、充分に抵抗的であつて、波浪は一つも残らずデッキへと打ち上げた。そしてデッキは一面の海になつてしまった。すくい込む水はなかなか小さな排水口から急には出て行かなかつた。デッキには、ハッチの上を通

るように、ライフライン（命綱）が張られた。いつデッキを通ろうと試みても、そこは外海と何ら異なるところはないからであつた。

浪はその山と山との間に船をはさんでしまう。その谷になつた部分が船のヘッドから胴体へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ちあたる。鉄製のわが万寿丸も、この苦悶くもんには堪たえかねて、断末魔の叫びをあげる。ミリミリ、ドタンというなる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中でから回りをする。推進器は、飛行機のプロペラーのように空中で回転する。凶暴なその船の太さほどの猛獣のようにほえる。特別装置のないどの棚たなからも、いろんなものが落ちる。ランプのカップからランプが踊り出る、舵機だきは非常にその効力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空転の危険から、ほとんど三マイルぐらいに減じられて、ただ船首を風の方向から転換しないようにのみすべての努力を尽くしていた。

機関室の方も汽罐きかん室しつの方も、非常な困難があつた。油差しは、動揺のために、機械との狭い部分に入り込むのに、神秘的な注意を払つた。火夫はその汽罐の前で、シヨベルを持つて、よろけまいとして骨を折つた。

汽罐室のま上のコック場では、コックが、いつも一度で炊たく飯を五度ぐらいに分けて炊かねばならなかつたし、お菜も同様な方法にしてなお、汗物は作るわけに行かなかつた。

コロツパス（石炭運び）は、石炭庫の中で、頭じゆうをこぶだらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかつた。

水夫らは、デッキを洗う波浪からダンブル内への浸水を護るために、ハッチカバー（船せ艙んそうのおおい）や、それを押えた金具や、またその上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危険な作業であつた。そしてこの危険な作業なしには、この船全体が危険から免れうる方法がなかつた。あだかも意地の悪い馬がなれぬ乗り手にするように、船体は猛烈にその背を振つた。そしてそのたびに柄杓ひしゃくが水をすくうように、デッキは波浪をすくい込んだ。ロープはぬれて、固くなつて操作に非常な困難と遲滞とを招いた。しかしそれは成し遂げなければならぬ仕事であつた。ハッチが水を飲むということは、文句なしに、簡單明瞭めいりょうに船体の沈没を意味するものであつた。五人の水夫と、ボースンと、ストキと、大工との八人が総動員で、この仕事を遂げた。

彼らはそのからだが、そのまま凍るような風の下に、メスのように光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、あまり動かない部分をカンカンに凍らせた。

船体の危険と、船体と共にする自分自身の危険と、そして、てきめん(か)に自分の凍えんとする肉体に対する危険とは、火事が中風ちゆうふうの婆ばあさんに、石臼いしうすを屋外まで抱かかえさせた

ほどの目ざましい、超人間的な活動を、水夫たちに与えた。そして、船首のハッチ二つは完全にその防備ができ上がった。

まだ二つのハッチが船尾の方に残っていた。そして、時間は今夕食に迫っていた。水夫たちは、飢えを感じた。けれども、海も飢えを感じて、わが万寿丸をのもうとしているのであった。

船は絶えずもがき、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決闘するように打ち合った。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる知恵とをもって戦闘した。

三

船を一郭として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戦っている時に、船員たちは、自分たちが、船ふなのりであることを、この時以上に癢しやくにさわり、心細くなり、哀れに気の滅め入いることはなかった。そして彼らは、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意ともかかわら

ず、自分の運命を哀れむのであった。彼らは、まっ暗な闇やみの中を電光が一時に、全く鮮明にパツと明るく照らすように、この困難な労働の間に、感ずるところの彼らの地位は、全くハッキリした賃銀労働者の正体であった。しかし、それは電光と全く同じであった。彼らは、すぐ、その仕事の方へと一切の注意を向けねばならなかった。

水夫らは、船首の方を済まして、船尾のハツチへ行くために、サロンデツキに上のぼった時であつた。ブリッジにいたコーターマスターの小倉おくらが、何かわからぬことを、からだじゅうで怒鳴りながら、物すごい勢いでブリッジから飛びおりて来て、サロンデツキを艦との方へかけて行つて、そのタラップをまた飛びおりた。

セーラーたちは、ビクリとした。のみならず、コック場のコックやボーイや交替で休んでいた機関長や、ブリッジの上の船長やは、全部が小倉の飛んでつた行方ゆくえを見守つた。

小倉は、船尾へ駆けつけた。そこには、ブリッジからあやつるステイムギア（蒸気舵機だき）の鎖と、そのカバーとの間に、わざとのように、水夫見習いが、右半身をうつ伏しにもぐり込ませていたのであつた。

小倉は、水夫見習いが楽に出るようになつたのであつたが、しかし舵機は同位に船首を保つために、一刻も放擲ほうてきしては置けなかつた。

そこへ水夫らは全部かけつけた。あるものは、カバ^かーの金^{かね}板^{いた}をバ^バーで動かそうと試みた。この間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三、四^た度^び、ここを洗った。

水夫全体の力と小倉との力は水夫見習いを、鎖とカバ^かーの間から引っぱり出すことができた。けれども見習いは、引きずり上げられた溺^で死^{きた}体のようになりとして、目ばかりを宙につつていた。彼は直ちに、水夫二人^{ふたり}にかつがれて、最も震動と、轟^{ごう}音^{おん}のはなはだしい船首の、彼の南京虫^{なんきんむし}だらけの巣へ連れ込まれた。

仕事着を彼から脱がせることは最大の急務であった。が同時に最大の困難でもあった。まるで帆布作りの仕事着でもあるように、それは凍りついていたのである。ついて来た藤原は、その腰のメスを抜いて見習いの仕事着^{じょうず}を上手に切り裂いた。そして、彼の寝間着が、上にかけられた。

ボーイ長の右手と右の肺の部分に紫暗色の打撲傷ができていた。そして左足の拇^ぼ指^しが砕けていた。

ストーブがないために、水夫らははなはだしく寒かった。見習いは、傷と、凍えのためにも、もしこのままにして置かならば、必ず、始末は早くつくということを皆知っていた。そこでついて来たストキと、水夫二人は各水夫の巣から、ありったけの毛布を集めて、そ

れをかけてやった。

そして、そのまま、全部彼らは船尾ハッチのカバー作業に駆けて行った。

船尾のハッチは船首のそれと同様の危険と困難さをもって、作業された。手の届きそうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪雲は、マストに引っかかってそれを抜いてでも行くかのように、はげしくマストを揺すぶった。水平線は、頭上はるかにのぼるかと思うと、足あしもと下深く沈んだ。（船の動揺は、同時に水平線を動かすものだ）ボーイ長（水夫見習いをいう）の運命は、全甲板労働者の現在のすぐ背後に鱻ふかのように迫っているのであった。

船尾部分のハッチはこの上もなく厳密に密閉された。そして、次のは、機関室と、その上部にある士官室、サロンデッキとの陰になっていたために、以前の三つに比べて、作業は楽であった。そこで、藤原は、ランプをともし準備をするために、再び「おもて」（船首部分）へ帰って行った。

ランプ部屋へはいる前に、彼はまず水夫室へはいった。まだ十七歳の少年、水夫見習いは、痛さに堪たえかねて、「おかあ様、おとうさん」と、両親を叫び求めては、泣いていた。そして、しばらく息を詰めて、死のような沈黙の中へ落ちて行くのだった。藤原は、ボ

ボーイ長の寝床の端板にもたれかかつて、ボーイ長の顔をのぞき込んだ。けれども、見えなかった。一つの窓もあけられていない水夫室は、出入り口から星の夜のような光がかりうじてはい込み得ただけであった。ことにボーイ長のは二層床どいこの下部に当たり、光の方を背にしていたので、最も暗かった。藤原は、自分の床から蠟燭ろうそくをとって、ボーイ長の枕まくらもとに立てた。彼は白ペンキのように青ざめて、そしてくらげのように衰えていた。

まだ、チーフメートは、何らの手当てもしには来なかった。

彼は、ボーイ長を慰めた。そしてすぐにチーフメートが「膏藥こうやく」を持って、のろのろ来やがるだろう、やつらには、労働者よりも、ブロックの方が比較にならぬほど重大なんだ、しかし、心配しないがいい、皆がついているからといって、ランプ部屋へしたくに行つた。

万寿丸は尻屋岬燈台沖にかかった。暴化しけはその勢いを少しも収めなかった。

水夫らはボートやサンパンを吹き飛ばされないように、それを、より一層ほとんど、吹き出したいくらいに、頑丈がんじょうに、これでは沈没した時に決して間に合わない、証拠立しんこたててられるほど、それほど頑丈に、くどくどとデッキや煙突にまで、綱を引っぱった。そして、この仕事は、波浪の恐れは全然なかったが、動揺と、風と、おまけに「てすり」がな

いので、海へ落ちるといふ危険を伴った。ボートデッキは、船中で一番高い部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねていた。

水夫たちは、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向けにもぐり込んだり、ボートの外側——そこはデッキ板一枚の幅しかなくて、海面まで一直線にサイドなのだ——に、今縛りつける、そのボートにつかまつて綱をからげるために、サイドへ足を踏んばつて、海の方へからだを傾けたりした。

ボースンは、すぐ前のブリッジから、船長が作業を見ていたために、その禿げた頭を、章魚のように赤くしてあわてたり、怒鳴つたり、あせつたりした。

四

陰鬱な薄暗がり、海上にはい出たために、右舷に尻屋岬の燈台が感傷的にまたたき初めた。荒れに荒れる海上に、燈台の光をながむるほど、人の心を感傷的にするものはない。この海の上は、今にもわれわれの命を奪おうとするほど暴れ、わめいている。そして、われわれの家は宙天から地底へまで揺れころぶ。そこには火もなく、灯さえもない。

だのに、あそこには燈台が光る。その燈台は、しっかりと地上に立っていて、そこには家族がある。団欒だんらんがある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。そこには火鉢ひばちがあるだろう。鉄瓶てつびんがかかっているだろう。正月の用意の餅もちが搗つけてあるだろう。子供がそれをねだっているであろう。「もうねんねするんです。ね、夜食食べると、ポンポンいたいたですよ。サ、ねんね」と、母は今年三つになった子供を膝ひざの上に抱き上げるだろう。そうして、かわいくてたまらぬといったふうに、子供の頬ほほにキッスするだろう。そうして、夫おつとと顔を見合わせてほほえむだろう。そして、「明日あすはまた随分沢山鳥あざまきが落ちてることでしょうね。こんなにしけるんだもの。鳥だつて船だつてかないませんわね」と、いって、火鉢から鉄瓶をおろして、茶でも入れるだろう。そして、子供に隠して、その父から一枚の煎餅せんべいを出してもらつて「坊やはいいい子ね、サ、お菓子」といって出し抜けに子供にそれを与えるだろう。

だのに、おれたちは、凍えるような風と、メスのような浪なみと、雪のように冷たい資本家や、氷のように冷酷な船長せんちょうの下で、労働もとをしているんだ。おれは何だつて船員になんぞなつたんだろう。

ことに家持ちの下級船員はそうであつた。彼らは、そうでなくてさえも、その家庭にた

まらなくひきつけられているのに、暴化しけのときには、その心持ちは長い刑を言い渡された囚人が、その家族のことを身も心もやせ砕けるように恋い慕い、気づかうのと異なるところがなかった。全く、今では、両舷げんから、鯨油を流してさえいるくらいであったから。鯨油を流すことは、暴化しけもはなはだしくならないとやらないことであつた。

尻屋の燈台はセンチメンタルにまたたく。日は暮れかけて、闇やみは、波と波との谷間から煙のように忍び出しては、白い波浪の飛沫ひまつに、け飛ばされていた。

舵手だしゆの小倉は、船首を風位から変えないように、そのあらゆる努力を傾注していた。彼の目はコンパスと、船の行方ゆくえとを、機械的に注視していた。

と、本船の前左舷さげんはるかな沖合に、一艘そうの汽船が見えた。「あ、汽船が！」と、小倉は無意識に叫んだ。

船長もチーフメートもだれもがブリッジの左舷へ集まって、望遠鏡のレンズを向けた。

この少し前から、ボートデッキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事していた、水夫の波田芳夫はだよしおというのも、今小倉が見つけたのを見つけて、一人ひとりでサンパンの下からながめていたのであつた。

ブリッジでは望遠鏡があるために、その汽船は救助信号を掲げて、難破漂流しつつある

ものであることがわかった。

ブリッジからは、直ちにエンジンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけようというのであった。

全乗組員は難破船が見えると、その救助に向かうことを直ちに知ってしまった。そして、全員はボートデッキへスタンバイした。

わが勇敢な、しかも自分も腹半分水を飲んだ半溺^{できしにん}死人のような、万寿丸は、その臨月のからだで、目的の難破船に、わずかに船首を向けた。きわめて、それはわずかの程度であった。が、本船はグーツと傾いた。そして見る見るうちに、その舵^{かじ}が向いてもいないにかかわらず、グングンその頭を振り初めた。そして、同時に物すごい怒濤^{どとう}が、船首、船尾の全部をのもうとするように打ち上げて来た。

船長は、今いったばかりであったにもかかわらず、方位を元へ返した。本船はきわめて短い五分とかからぬ間^まに、ほとんどコースを半回転しようとしたのであった。

難破船のやや近くへ近づくことはできたが、本船はその船首を非常な努力の下^{もと}に従前どおりの位置に返してしまった。

難破船を救うということは、本船と一緒に沈める計画になるといっているので、船首はもうそ

の向きを換えなかつた。けれども哀れな兄弟きょうだいたちの乗り込んでいる妹の難破船は、だんだんわれわれの視野に大きく明瞭めいりょうにはいるようになった。われわれは、今のコースをもつて進むならば、四マイルぐらいのそばを通過するであろう。

波田はだは、サンパンの下からはい出してなおも一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、つかみどころを同時に得ながら見入っていた。狂犬の口をおおう泡あわのようなおそろしい波浪と、この夕暗ゆうやみとに、あの船はのまれてしまうんだ。彼は自分が二度も沈没に際会した時の事を思い浮かべては、その難破船に射込むような目を投げていた。

その小さな五百トンぐらいの小蒸汽船は、北海道沿岸回りの船らしかった。今やその煙筒からは燃え残りの煙草たばこほどの煙も出ていなかった。汽罐きかんに浸水したのはもうずっと早いことだったろう。そのマストの下の方には、棧橋に流れかかったぼろ布のように帆布が、まといついていた。汽罐に浸水してから、どこかのカバーでもはずしてマストに縛りつけたものであろう。わずかにデッキの上でバタバタと、その切れつ端はじが洗濯せんたくしたおしめのように振れていた。

それにしても船員は、ブリッジにも、マストにも、デッキにも、どこにも見えなかつた。津軽海峡を越す時に命を捨てて、ボートでも本船を捨てたのであつたのかもしれない、

または、その各おのおのの室に凍えたからだを、動揺のままに、お互いに打ぶつけ合ったり、追っかけ合ったりして、楽しみのなかつた生前の労働者の運命をのろい悲しんでいるのかもしれない。しかし、この暴化しげはそれほど長く続いたわけでもなかつた。本船出帆の前日がその最高潮であつたのだからまだ二昼夜しかたっていない。船員は、あるいは、一室に集まつて、別れのための最後の貧しい食事でもしているのかもしれない。

「ああ、おれは二度まで沈没船に乗っていた。一度は胴っ腹を乗り切られ、一度は衝突だつた。が、どちらも瀬戸内海で、一度は春の末、一度は真夏であつた。そして、そのどちらの時も救われた。けれども、北海道の冬の海ではとても助かりっこはあるまい。おれは、瀬戸内海で沈められた時に、海の中に飛び込みざま『助けてくれ』と怒鳴つた悲鳴を今でも思い出せる。その叫びをあげる刹せつな那は全く、ありとあらゆる記憶、あらゆる感じ、それらのものが、一度に総勘定でもするように頭に浮かんで来た。そして、『十八ではまだ死ぬのに、二年早すぎる』と、おれは思った。何で二年早すぎたのか自分でもわからない。けれどもハッキリ自分は二年早すぎると思つた。おお！もし、あの船の人たちが、死んだとすれば、皆おれと同じ感じを、抱いだいて死んだことだろう。死ぬのには、人間は何歳になつても二年早すぎるのだと、自分はこのごろ考えるようになったが、全く、どのくらい

多くの人が二年ずつ早く死んで行くことだろう。それにしても、この船長は何という冷酷、残忍なやつだろう。わずかに四マイルや五マイルより離れていないのに、その最後を見届けようともしないとは。自分の悦えつらく樂のためにはこの船長はおれたちの生命を、いつでも鱻つかの前に投げてやるだろうに。おれは、その沈没船に代わってでも、また、この船員たちのためにも、船長とたたかう時が必ず来ると信ずる」と、波田は考えにふけた。

難破船はますます近づいた。日は暮れたけれども、まだ夕明りである。船は、今ならば、もつと難破船へ近づくことができるのであった。が、わが、勇敢な万寿丸は船員全体の希望にもかかわらず、船長の一言によつて、冷ややかに姉妹の死を見捨てて去ることになった。そして、本船には、救助不能の信号が揚げられた。相手へ知らすためのなく、乗組船員をごまかし、同時に海事日誌をごまかすための。

実際、この時暴化しけはだんだんな風いで来たのであった。船員は一時間前の勇敢なる船長の行動を不審に思うのであった。

そのかわい小柄な船は四十五度以上五十度近く傾いて、今にもそのまま、沈み行きそうに見えた。そして人はどこにも見えなかった。甲板の上は見事に掃除そうじされて、その掃除手の怒濤どとうは、わずかに甲板のすみに凍りついて残っているのみであった。マストのカンバ

ス（帆布）は、ハッチの上部カバーであった。それは全くきびしい姿であった。火のない船であった。人のいない船であった。生命のない捨てられた世界であった。われわれは皆サロンデッキに並んで、浪と運命を共にするであろう、その船に別れを告げた。だれの心にも黒い、寒い寂寥^{せきりよう}が虫食った。

これは、やがて、わが万寿丸の運命でもあった。われらが、船底に飢えと寒さとに倒れて漂流する時に、もう少し大きな船がまた、われらの傍^{かたわら}を通るであろう。われらは信号を掲げねばならぬことを知っているだろう。またわれらは、人間がその船室に凍えかけていることを、知らせる必要のあることを知っているであろう。それにもかかわらず、だれも甲板に出ないであろう。出られないのだ。途中でたおれてしまうのだ。

そして、ようやく、最後の一人がデッキへはい出た時には、今汽笛を鳴らして通った船は、浮かべる一大不夜城の壮観を見せて、三マイルも行き過ぎているであろう。

このようにして、わが万寿丸は汽笛を鳴らして通過した。その汽笛をかすかに聞いて、今立ち上がるうとして、その凍えたからだに最後の努力ともがきとを試みている兄弟が、その船の中にいないだろうか、そのたよりない捨てられた犬の子のように哀れな形をした船の中に。

鐘が鳴った。夕食である。水夫は水夫室に、火夫は火夫室に、各おのは行って行った。

難破船は、薄やみの中に、暴れ狂う怒濤どとうの中に、伝奇小説の中で語られた悲しき運命の船のごとくに、とり残された。

藤原は、船尾にランプをつり上げながら、残された船を見送って、堪たえられない寂しさと、憤いりとに心を燃やした。

「あの船には、少なくとも二十人の乗組員はあっただろう。それが養っている、同じ数くらの家族もあつただろう。あの中で二十人は凍死したか、ボートで溺死できししたか、どちらにしてもあの船の乗組員が助かるということは考えられないことだ。二十人はとうとう、その家族を残して、妻子はその主人に残されて逝いってしまったんだ。そして、その船によつて、最も重大な利害を感じるはずの船主は、今その宅で雪見酒を飲んでいるのである。その二十人の不払い労働から、蓄ためて経営している会社の株のことを、電報がはいるとすぐに気にするだろう。遺族には、香典が二十円ずつぐらいは行くであろう。そして、船主は、二十人の人間のことよりも、その沈没するのが当然なほど腐朽し切った、ぼろ船の運命に対して、高利貸式の執拗しつようさでくやしがつてるだろう」

「人間が生きて行くためには、どうしても人間の生命を失わねば生きて行けないのか、人ひ

とほしら
柱！ おれたちは皆人柱なんだ！」

五

水夫室では、水夫たちが、犬ころがうなり合いながら食べると同じように、騒ぎながら、夕飯を食っていた。

負傷したボーイ長のそばには、藤原と、波田とがいた。波田のベッドは、ボーイ長のとL字形に隣り合っているの、自分のベッドで、頭をかがめながら、うまい夕食を摂った。全く、字義どおりに「のどから手が出る」ほどであった。胃の腑へ届く食物は、そのまま直ちに消化されて、血管を少女のような元気さと華やかさで駆け回るように感じられた。彼は飯を口一杯に頬ばりながら、ボーイ長の足もとに波田と並んで、これを頬ばっている藤原に話しかけた。

「チーフメートは来たかい」

「まだまだよ」藤原は、まるでそれが波田のせいでありでもするかのよう、ふくれっ面をもって、答えた。

「随分無責任じゃないか。三時間も打ちやらかしくななんて」

「距離が遠いんだよ。距離が、やつらのはね」藤原はなぞのようにいった。

「ハハハハ、なるほどね、サロンから、おもてまでじゃ三時間じゃ来られねえや」波田は、冗談だと思つて笑つた。

「五感と、神経中枢との距離がさ。鼻と口との距離と同じほどなんだよ」

ストキはひどく憤慨しているように見えた。「それに、こういうことになれて、無神経になるつてことは、それが仲間のことであると、なおさらよくないね」

藤原は、話がむずかしいので、有名であつた。彼は漢語みたいなもの——仲間の間でそういうつた——を使ったがる癖が骨にしみ込んでいたのであつた。

まだ食事が、始められて間もなく、チーフメートは、ボーイに「救急箱」を持たせて、「大急ぎ」で駆け込んで来た。

水夫たちは食事を中止した。そして、水夫見習いのベッドを、チーフメートと一緒にとり巻いた。

「ボースン！　こんなに暗くちや何もわからんじやないか、蠟燭ろうそくをつけて来い。五、六本！」と、チーフメートは一発放した。

かくて、蠟燭はつけられた。ボーイ長がそこへ寝始めてから、三時間目に初めて、彼の室は燈ともしびで照らされた。彼が船へ持つて来たものは、そのからだど、その切り捨てられた仕事着と、初期の禿頭病とくとうびょうとだけであつた。

彼は、陸上でひどく苦しんだ。彼の家はひどく貧乏の上に、兄弟が十一人もあつた。彼は、小さい時分から、自分を養うのは自分でなければならぬことを感じさせられて来たのであつた。

彼は、訴えるような目つきで、また、彼のそのような負傷にもかかわらず、チーフメートに直接物を言うことを恐れて、遠慮がちに「痛あーい」とうめいた。

チーフメートは何でもかまわず、ボーイ長の左半身全体に、イヒチオールを塗りまくつた。彼は一分間でも早く彼の義務が終わればいいのであつた。医者 of やるようなことが、彼の義務であることも癩しやくにさわることであつたが、それは、彼がそれでパンを得ている以上、仕方のない災難なのであつた。彼は、彼もパンのために、そのいやな仕事を持っていることを知ると同時に、もつと悪い条件の下もとにパンを求めているものがあり、それが「おもてのならずもの」どもであることを知らねばならないはずであつた。ところが、彼は、ブルジョアが、彼と自分を区別してるとすっかり同じように、彼とセーラーらとを区別

していた。「おれは紳士だが、やつらは労働者だ」あるいはもつと正確には「おれは人間だが、やつらはセーラーだ」と。

チーフメートは、限りなき嫌悪けんおの情を含みながら、ボーイ長をめちやくちやに、イヒチオールで塗りまくることを、（面倒臭いあまりに、そうするのではない）というふうにして、セーラーたちに見せたかった。彼はなさなければならぬことの形式だけをやって、しかも感謝の念をセーラーたちから盗もうとさえたくらんだのであった。

黒川鉄男くろかわてつお、これがチーフメートであった。黒川は、イヒチオールを塗りまくる間に、口をきくことは、それほど仕事の能率を妨げないし、また、それ以上仕事を、きたなくも困難にもしないと考えた。そして、彼がどんなに、この「虫けら」のようなボーイ長に対してさえ、人道的であるかを見せてやることはいい。と彼は考えた。

「おもては全く、寒いね、そしてまるでまっ暗じやないか」と黒川は口を切った。彼はボーイ長の胸部にイヒチオールを塗布しながらいった。

「満船の時はどうも仕方がありません」と、ボースンは鞠躬きつぎゆうじよ如として答えた。まるで、まるで、寒くて、暗くて、きたなくて、狭いのは、ボースン自身の罪でもあるように。

「これじゃいくらお前らでもたまらないなあ」

「なあに、メートさん、新造船だから、いい方ですよ」とボースンは答えた。

「暗くて寒いことあ今始まったこつちやないや、おまけに風呂ふろだってありやしな、これでもおれらは、人間並みは、人間並みなのかい」と藤原が後ろから、燃えるような毒舌を打ぶつつけた。

チーフメートは早速さつそく方向転換の必要を痛感した。

「ボーイ長の傷は存外軽くてすんだね。おれはもうとてもだめだと思っていたんだよ、命拾ひいしたわけだね」

「そうさ、すぐくたばりやもつと傷が軽いわけさ、手がかからねえからな」また藤原が口を出した。

セーラーたちは、何か起こりはしないかと内心好奇心に駆られて「事」の起こるのを待っていた。

「黙ってる！ よけいな口をたたくな！」チーフメートはどうとう爆発した。

「黙ってる？ 黙るさ、だが、手てめえ前らにや手前らの命は大切でも、人間の命が、どのくらい大切かっことはわかる時はあるまいよ。へッ」藤原はそのまま自分の巢たばこへ上がつて、煙草たばこに火をつけた。彼は明白にチーフメートに挑戦した。

戦争はすぐ開かれるか、あとで開かれるか、どんな形において開かれるか、それは水夫ら全体を興奮の極に追い上げた。

黒川一等運転手は彼の策戦が失敗したことを承認した。そして、多分この事はこれだけで片がつかないだろうと、いうこともわかった。長びくような事件にならねばよいがと彼は心配していた。特にそれは、この場合では、彼にとって絶対に都合のわるいことであった。彼は、黙つて、早く手当てを済ますに限ると思つたので、その手当てを急いだ。

かくして、イヒチオールはそれが、その本来塗らるべきところであろうと、または、傷をなして赤い肉の出たところであろうと、出血しているところであろうと、おかまいなしに塗りたくられた。また、いかなることが起きても、起こらなくても、ボーイ長の左半身全体をまっ黒くするということは、彼の三時間にわたる熟慮の結果であつた。

そしてチーフメート黒川鉄男は、そのプログラムに従つて他意なくやってのけた。何ら親味な情からでもなく人間的な気持ちからでもなく、安井やすい——水夫見習い——は、その全身にただ気やすめだけのイヒチオールを塗布された。それは義務を果たすための一つの対象にすぎなかつた。

安井はうめいた。「おかあさん、おかあさん」と叫んで救いを求めた。そして目を開い

ては、絶望のどん底にまつ暗になつて落ち込んでしまった。

彼は、からだの傷いたみと共に、堪たえ得ぬ渴と飢えとに迫られていたのだった。

六

安井の手当てがすむと、水夫たちは、改めて、食卓についた。そして、いつでもは安井がボーイ長の職務として、食事の準備、あと片づけ等はするのであったが、今日きょうは、波田はだが引き受けた。

「安井君、何か食べたくはないかい」と、波田はボーイ長にきいた。

「のどがかわいて、腹がすいて、たまらない」と、彼はかろうじて答えた。

「そいじや今持つて来るから待つてくれよ」

波田は、コックに、卵をくれるように頼んだ。

「卵なんぞぜいたくなものが、おもてに使えるかい、ぼけなすめ！」波田は一撃もとの下に、卵なんぞ「おもて」の者の口に入りはいかねることを教えられた。しかし、もし、卵がなければ、流動物を与えるのに困るのであった。

「どうだろう、ボーイ長が固い物は食べられないだろうと思うんだが、何か寝てて食べるようなものはないだろうか、とも（高級海員の事）のコーヒーへ入れるミルクを一罐かんだけ分けてもらえないだろうかなあ」波田は食餌しよくじのことは、チーフメートが医者ついでにやるべきものだと考えた。けれどもまた「やるべきこと」はおれたちだけにあるんだ。と思いかえした。

「それじゃシチャードステューワード（司 厨 司）へ話して見ろよ！ 一両ぐらい出しや分けられねえこともねえかな、ぐれえなどだろうぜ」このコックはおもての食費をごまかすために、とものコックから、給料を下げても、おもてへ一つ船で鞍くらがえした、途轍とつもない「悪わる」であつた。

「この野郎、鼻持ちのならねえ野郎だ」と思いながら、波田は、シチャードへ、ミルク一罐と、卵十個分けてもらえないかと交渉した。

「ボーイ長にやるんだつて、ああ、いいとも、持つて行きな、そうかい、じゃあパンを一斤ばかり持つてつて、牛乳と卵とで湿してやるといいや、ほら、ここに砂糖と、……それだけでいいかい、そしてどうだね、ボーイ長の容態は」シチャードは親切に倉庫から、それらのものを箆ざるへ出してくれた。

「どうもありがとう。金はあとでおもてから払うからね、当分済まないが借しててくれな
いか」波田は全くうれしかった。

「いいよ、そんなこたあ、気をつけてやりな、若いもんだ。先のあるもんだからな」

「ああ、せいじや、ありがとうよ」

波田は、ともかくそれらのものを持って来て、ボーイ長に与えた。

彼は飢えた狼おおかみのようにむさぼり飲んだ。ボーイ長が食欲を失っていないことが、波田に
は大層心強く思われた。

彼が安井のために、食事のしたくをする間にだれもが食事を終わっていた。そして、茶ち
碗やわんや、徳利しよくゆ（醤油）はころばないように、各おのその始末さるべきところへとしまわれて
あつた。彼は、それから、また、自分の分を継続しなければならなかつた。船の動揺はは
なはだしかつたが、満船している関係上、動揺以上に浪の打ち込みがはなはだしく、その
ため、水夫室の頭上では、錨いかりが浪と衝突して少しでもゆるみが来ると、今にもサイドを押
し割りそうに、メリメリツと鳴つた。

波田は、それらのことには、ほかのだれもと同じくなれ切っているので、二度目の夕食
をうまく食うことができた。

彼は、腹には詰め込みながら、耳には、セーラーたちの「煙草」の話を聞いた。しけたあとでは、きつと話がしんみりするのであった。いつでもふざけるにきまつている三上みかみさえも、一、二度極端な、女郎に関するその話題を提供してみたが、反響がないので、それ以外に話すことを全然持たない彼は黙りこくつて、すぐにその寢床にもぐりこんで、三十分間をぐつすりと寝ることに決めたらしかった。

畳敷きにはできない形ではあるが、それをその面積に換えれば六畳ぐらゐは敷けるだろうと思われる「おもて」には、上下二段にベッドを作りつけて、水夫長、大工、舵取りかじとを除いた、水夫五人と、おもてのコックひとりが一人と、ストキとが寝るようにできていて、その中央に、テーブルと、ベンチとが作りつけてあった。で、おもてでは、一切合切がっさいがギリ一杯であった。食卓は、用事が済むと、室のまん中に立っている柱に添うて上につり上げられるにしても、やはり一杯一杯であった。そして道具置き場は、その食卓の下をくぐつて、船首のところがつたところが、そうであった。

わが万寿丸ははなはだしく団扇うちわに似てるといふ定評があつてさえ、やはり船の船首の部分は、いくらかとがつていることが、これで見てもわかるのであった。

そして、窓はすべて、二重に厳密に閉ざされ、デッキへの鉄の扉しびらまでが厳重に閉ざされ

たから、空気は全く動かなく通わなくなってしまった。そして、この、太鼓の内部のような船室は、皮であるべきサイドの鉄板が、波濤はとうにたたかれてたまらなくとどろくのであった。

その間にボーイ長は、その負傷の疼痛とうつうを、陸上の父と母とに訴えた。摺子木すりこぎのようにまる円い神経の持ち主であるセーラーたちも、環境がかくのごとくであるために、ひとりでしんみりしてしまうのであった。そして、彼らは、いつでも、しんみりするのを好まなかった。それは、彼らを、この世の中で一番詰まらない役割に引っぱり込んでしまうからであつた。というのは、いつでも彼らは最も詰まらない役割であるのだが、それをほんとうに彼らに手きびしくさとらせるからである。だれでも、自分が踏みつけられ、ばかにされることを喜ぶものはない。わがセーラーたちも、しんみりする時必ず、そうであることがわかるようにひとりでに考えるのであつた。そして、船乗りの気質として、そんなに自分たちを「コミヤル」（余剰労働を搾取するという意が含まれている船乗り言葉）やつは容赦しないはずであるのだが、それができ得ないところに、彼らが、しんみりしたたびにしよげ込み、次いで自暴自棄になるという結果が生まれるのであつた。

彼らは、自分たちが人間であることを知っていた。そして、人間らしからぬ生活に追い

まくられていることを知っていた。そして、彼らはどうすれば、これらの不都合な生活から人間らしい生活へはいれるかを、絶えず考え、その機会をうかがっていた。そして彼らはその考えをまとめることも、機会を捕えることもできないで「小資本を貯めるための、きわめて短い時間だけ、この危険な仕事によって金もうけをしよう」とした最初の考えは、そのまま彼らを怒濤どとうの上で老年にしてしまい、磨滅まめつした心棒にしてしまうのであった。

その夕、ボーイ長のベッドのそばに集まった藤原、波田、小倉の三人は、皆ひどくしんみりしていた。

七

「おれたちは何だつてこんなに泥棒猫ねこ扱いに、いじめられるんだろなあ」と、藤原がため息と一緒に吐き出すようにいった。一時の興奮から、夕方ボーイ長のことで来たチーフメートとの事を思い出して、きつとよからぬ予感に襲われたのだろう。

「それや君、泥棒猫だからさ」と小倉がひょうきんに答えた。彼は人に落胆させまいとして、いつでも骨を折る気のいい正直者であった。

「どうしてなんだろう」藤原はおとなしくきいた。

「十匹の猫の中の二匹が泥棒猫であつても、その全体が泥棒猫と思われるんだからな。まして君、十匹のうち八匹がそうだったら、もちろん泥棒猫団だろうよ」

小倉は答えた。

「それじゃ、僕らは一体、生まれつき泥棒猫だつたらうかね」

「多くはそうだね。つまり僕らが泥棒猫であつたにしても、それは僕らの知つたことじゃないことになるわけだ」

「という」と藤原は小倉にききかえした。

「つまりさ。僕らは、その飼い主から見れば役に立たない泥棒猫なんだ。ね、いつ主人のものをかっぱらうか油断もすきもありやしない、とこう、見られているんだ。だから、主人の方じゃ僕らを泥棒猫扱いするんだ。扱いだけじゃないんだ、僕らを真物ほんものの泥棒猫か、もっと適切に言えば、去勢した馬車馬と考へてるんだ。だから、主人、つまり、資本家からいえばさね、僕らは、彼らが僕らをしようと思ふままにされていることが、唯一の方法なんだ。だから、船主が『水夫らは昼飯を食わない方が労働能率を上げるだろう』と思へば、僕らから昼飯をとり上げてしまふし、室蘭、横浜間は三日で航海すべきだから、糧食

はカツキリ三日分でよろしい。難破したり、遅航したりすれば、それはやつらの例の怠惰から来たもので、おれの方の損害の方が大きいから、それ以上の積み込みは相ならぬ、ということになれば、それも正しいのだ」小倉はきわめてまじめに、説法でもするように静かにいった。

「フーン、して見ると、僕らもその考えに適應しなければならぬのかい」藤原は、小倉にきいた。

「適應する必要はもろくないさ。しかしただ適應する者のあることだけは事実なんだ。僕は資本家が自分自身の肉体の構成と、労働者の肉体構成とが、全然、異なるものであると考えているだろうと思う」

「それで、そうなら僕らはどうだつてんだね」と藤原はきいた。

「それで、僕らは、僕らとしての『意識』を持つ必要が生じて来るんだ。資本家や、資本家の傀儡かいらいどもが、商品を濫造らんぞうするように、濫造した、出来合いの御用思想だけが、思想だと思ふことをやめて、僕らにや僕らの考え方、行ない方があることをハツキリ知らなきやならないんだ」小倉は頭の中で、辞書のページでも繰ってするようにしていった。

「どうして、それを考え、どうしてそれを知ればいいんだ」藤原は問いをやめなかった。

「それは、あまり困難な問題だ。僕はそれで悩んでるんだ」と小倉は答えた。

「小倉君『人間は万物の霊長なり』という人間の造った言葉があるだろう。そこでね。僕は、昔から、一番苦しい、貧しい、不幸な階級の中で、またことに貧しい不幸なろわれた人々でも、万物の霊長だったんだらうか？ と考えることがあるんだよ。『おれはあの犬になりたい』と奴隷は主人の犬を見て思わなかったらうか。『おれは燕つばめになりたい』と、だれかが残酷な牢獄ろうごくの窓にすがって思わなかったらうか。『おれは猿さるになりたい』と、詰まらぬ因襲と制度とから、切腹を命じられた武士は思わなかったらうか。『おれは豚になりたい』と乞食こしきの子は思ったことはないだらうか。小倉君。僕は、行く行くはそうなることを信じているが、今では、人間は万物の霊長でもなんでもないと思ってるよ」

藤原は煙草たばこに火をつけた。

「それや僕もそう思うなあ。僕だって鱻ふかになりたい、と思ったことがあるもんなあ」と、波田は初めて、その突拍子とつぴょうしもない口をきった。

「人間は万物の霊長であるにかかわらず、人間だつてことは僕は信じるよ。だが、人間が万物の霊長だつてことは、僕も、もつとも僕は今まで、そのことをそんなふうの問題にしたことがなかったがね、人間は、ともかく賢い動物だとは思っていたよ。賢いくせに、

詰まらぬところに力こぶを入れたり、どんな劣等動物でもしないような詰まらないことを、人間の特徴と誇りながらしたりする動物だろう、人間つてもものは。ハハハハハハ」これが小倉の人間観であった。

「人間が万物の霊長だなんて問題に、コビリつくことはもうよそう。が、全く人間も他の動物と同様に食うため、生殖するために、地上で蠢動しゅんどうしてるんだね」藤原は人間であることを悲しむようにこういった。

「食うことと、生殖することだけで活動してるから、それで蠢動してるというのかい」今度是小倉が皮肉な聞き手になった。

「まあそうだね」と藤原はちよつと苦笑した。

「ところが君、ブルジョアはそれ以上の高利貸的官能のために、あるいはまた倒錯症的欲望のために、食わせないこと、と、生殖させないこととで蠢動してるんじゃないのかい」といって小倉は大声立てて笑ったが、フト気がついたように、ボーイ長の方を見やって口をつぐんだ。

「安井君、痛むだらうね」と、波田はボーイ長にきいた。

「ええ、痛くて、痛くて、他の人の痛くないのが不思議で……」と答えた。

「困ったね。航海中だから、まあ、できないだろうけれど仕方がないから、我慢するんだね。横浜へついたら病院へ入院ができるさ」と波田が慰めた。

「ところが、できないんだ。ボーイ長はまだ雇い入れがしてないんだ。これは確かに船長の失敗なんだ。この点から攻撃すれば、解雇手当や負傷手当などはもちろん、取りうると思うんだ」藤原はこういった。

「雇い入れがしてなかったって、入院はできるさ。この重傷を入院ささんてことはないさ。それに、雇い入れと、負傷とは、どんな関係がありようもないじゃないかね」波田は、藤原が入院を拒みでもするように食ってかかった。

セーラーの三上みかみや西沢にしざわ、水夫長、大工、コックなどは、もうその寢床でグーグーいびきをかいていた。全く、何か特に興奮することでもない時は、食後は非常に眠いのであった。全く目があかないほど眠いのであった。幼子おきなごが夕食を食べながら居眠るように、幾日か続いた強行軍で、兵士が歩きながら眠るように、それと同じく眠いのであった。けれども、この三人は、今食後十分か二十分の熟眠どころではないのだった。今や、彼らはボーイ長が雇い入れなしに使役されていたという事実について、彼らの意見を発表し合う必要が生じたのであった。

「そんなことは、海員手帳にチャンと書いてあるこつた。議論の余地なんぞありやしないさ」と、ストキの藤原はいつた。（事実それは海員手帳に記入されてあることであつた。そして、いかなる場合でも船長はこれを怠つてはならないのであつた。法文の上でも、実際から行つてもそれはそうでなければならず、またそうあるべきであるのだつたが、さて、それがそうされなかつた場合は問題はどうかということ、ほぼ、そうあるべき通りに、行かないのであつた。要するに、理論からも、実際からも、人間は、平等に、幸福でなければ困るが、一部の人間は、平等は困る。おれたちだけのぜいたくがいいんだ。搾取の痛快味こそ生活の意義だといふので、わかり切つたことがわからなくなるように、ボーイ長の場合においても、明白に、ボーイ長が有利な立場にあるにもかかわらず、その全体の利益と権利とをフィにするところの一要素である「労働者」で、ボーイ長があつた。だから、これは、それほど簡単に、数学的結果を見ることは困難であろう。その代わりに、法律のないしは、商業会議所式の結果を見るであろう」と、三人が話し合いの末、そこまです落ち着いたのであつた。

「だから、おれたちは、これに対してはたたかわなけりやならん」と藤原はいつた。

この時、ブリッジからコーターマスターが降りて来た。そしてポーソンの室の入り口か

ら怒鳴った。

「今から、ディープシーレット（深海測定器）を入れろツ」と、それから水夫室へ来てそのまん中で大声に「スタンバイ」と怒鳴った。

八

皆は、今日^{きょう}昼中の労働がはげしかったので、夜は休みになるものだと考えていた。暴化^{しげ}はややその勢いを静めはしたが、しかも、船首甲板などは一浪^{なみ}ごとに怒濤^{どとう}が打ち上げて来た。そして、水夫室の出入り口は、波の打ち上げるごとに、すばらしく水量の多い滝になつて、上のデッキから落ちて来るので、一々その重い鉄の扉^{とびら}を閉ざさねばならぬほどであった。それに、けさからのワシデッキとハッチの密閉とで水夫たちは、その着物の大部分をぬらしてしまった。（波田、三上のごときは、その全部を二重にぬらした、つまり一そろいの服を二度ぬらした。）それで、今、だれの仕事着も洗いすすがれて、汽罐場^{きかんば}の手すりに、かわかされてあつた。

水夫たちは起きるとすぐ、猿股^{さるまた}一つでか、あるいは素裸でか、寝間着かで、汽罐場ま

で、仕事着をとりに行かねばならなかった。けれども裸で、その寒さに道中はならなかった。

波田は、自分の仕事着がまだ、今かわかさされたばかりであるので、いくら汽罐場の上でもまだ生がわきであることを知っていた。従って彼は、猿股一つの上に合羽かつばを着て作業しようとした。ところが仕事着は小倉が彼に一つくれることにしようとして申し込んだ。それで、彼は、油絵のカンバスのような、オーバーオールを一つ手に入れることができた。それにはペンキで未来派の絵のような模様が、ベタ一面にいろどられて、ゴワゴワしていた。

「それでも、ロンドンで買ったんだぜ」小倉はいった。

「舶来こしぎの乞食こしぎが着てたんだらう。こいつあ具合がいいや」と彼はいった。

水夫たちは皆各スタンバイした。そして、ともへと出かけた。

暗黒は海を横にも縦にも包んでいた。闇やみは、その見えない力であらゆる物を縛り、締めつけ、引きずり、ころばしているように思えた。それはすべての物をまとめて引つくるみ、その中の部分をも締めつけた。風が波に打ぶつたり、マストに突き当たり、リギンに切られて、泣きわめいた。海はその知らぬ底で大きく低く、長く唾いがんでいた。

わが万寿丸は、その一本の手をもって、相変わらず虚空をつかんで行き悩んでいた。船尾の速度計は三マイルを示していた。

水夫たちは、倉庫からグリズを取り出して、ウエスにつけてその手に握った。

そして、ボースンが、ランプを持って、レットの機械を照らした。

ともからは、波田が以前から、その後頭の左寄りのところにインチ丸ぐらいで深さ二寸ぐらいの穴を「ブチあけ」てやりたい、とつねづねねがっていたセキメーツ（二等運転手）が来た。

ガラス管は沈錘の中へ収められた。そして、バネがはずされた。風の緒のようなワイアを引っぱってレットは、ガラガラツと船尾から、逆巻く、まっ黒な中に、かみつかんばかりに白い泡を吐く、波くずの中へと突進した。デッキの最高部はきわめて狭かった。従って、後部のハッチデッキを浪でおおう時は、われわれは、本船と切り離された板片の上になすがつているような心細さを感じた。凍寒はナイフのように鋭く痛くわれらの薄着の肌をついた。飛沫は絶えず、全部の者を縮み上がらせた。

レットが、その緒を引っぱる速度がゆるむと、それは、ハンドルによって止められる、そしてそのワイアの長さが、そこで読まれる。それを読み終わると、二つのハンドルでそ

の沈ちんすい錘づゑを巻き上げねばならない。それが水夫の仕事であった。深海測定器であるから、おまけに進行中であるから、錘は斜めに流れつつ海底に到達するのである。百メートル、二百メートルなどのワイアの長さを読み上げられた時、われわれは、海の深さより、それを巻き上げることの困難さに縮み上がる。

それはきわめて、それそのものとしては軽いものであった。けれども船の進行と、浪の抵抗とは、釣った魚がいよいよ陸上に上がるまでは、その幾倍もの大きさのように思われる、より以上に、その小さな沈錘を重くした。そして、その手巻きウインチは、きわめて小さくできていたために、ワイアを、一回転に、きわめて小距離、最初は二インチ後に三インチぐらいより巻き取ることができなかつた。そして、それが車軸へ来るまでに、二人ふたりの水夫は、グリスをもつて、ワイアに塗らねばならなかつた。これは、一々塗ることが不可能であるために、二人のセーラーはワイアをグリスのついたウエスで握つてるといふ形になつて現われるのであつた。

巻き方は骨が折れた。と同時にグリスの塗工とこうも寒かつた。そして、その全体の者にとつて最も苦痛な点は、凍寒と、眠いということであつた。

寒さは全く著しかつた。合羽かっぱをバリバリに凍らせた。皮膚が方々痛かつた。歯が合わな

かった。からだがしびれて来るのだった。そして、眠りは、もつと強く、水夫たちを襲った。賃銀労働のあらゆる刹那せつなが必要労働と、余剰労働とに分割されうるように、あらゆる刹那に、寒さと、眠さとが、まるで相反した刺激を彼らに与えた。

寒さに対しては、彼らには必要以上に、からだを揺り動かした。眠さに対しては、彼らは膝関節ひざが、グラグラして、作業が空くうになるのであった。そして、それが、お互いに、いちごっこをしているのであった。それはまるで、冗談半分にやっているとより思えない格好であった。

セキメーツは絶えず、怒鳴り散らした。実際セキメーツにとっては、水夫らがそんな格好をすることは、仕事の能率の妨げになり、ことに「おれをばかにして」いるのであった。水夫らは、セキメーツの怒鳴るのと、波浪のほえるのと、スクールの轟ごう音と、リギンの裂くような音とをゴツチャゴツチャに聞いてしまった。そして、依然として、彼らは、彼らの必然に従って、二つの反射運動を繰り返した。

セキメーツは自分の怒鳴ることに、わざと、一度ずつ余分に入れるようにしてやろうと計画した。「こいつらをあくる朝まで巻かせてやるぞ！」と彼は決めたほど怒おこってしまった。

沈鍾は長い間反抗して、とうとう上がって来た。鍾の中からガラス管を取り出して、それに代わりを入れて、入り口を、 그리스 でしっかり塗るのである。そのガラス管が鍾の内へ収まるやいなや、セキメーツは「レッコ」と怒鳴る。ボースンはバネをとる。沈鍾と、ワイヤとは投げられた石のように飛んで行く。

この作業を水夫らは繰り返さねばならなかった。それは我慢のならぬことであつた。けれども我慢せねば、またならないことであつた。

水夫らは、八度、それを繰り返した。それは、八日、航海するよりも、八日拘留されるよりも長かつた。その間に四時間半を費やした。彼らはぬれた麩ふのように疲れ衰えてしまつた。

セキメーツは徹夜の決心を、自分のために撤回した。彼も今はぬれた麩であつた。

水夫がその南京虫なんきんむしの待ちくたびれている巢へもぐり込んだのは、午前一時前十五分であつた。そこには眠りが眠つた。

一切を夢の中に抱擁して、夜はふけた。夜、そのものは、それでいいのであるが、おもての船室は、一八六〇年代の英国におけるレース仕上げの家内労働者が、各一人ひとりに対して六十七ないし百立方フィートしか空気を与えられていなかった——マルクス——のとくらべて、もつとはなはだしかった。われわれは、夜の明け方まで、死のような眠りにつく、そしてその死のような眠りからさめて、「罐詰かんづめの蓋ふた」をあけて、外気を室内に吹き入れしめるときに「ああ、目がさめた」と思う代わりに「よくおれは蘇生そせいしたものだ」と思うのであった。

われわれはしけの場合は、ことにオゾンが多いにもかかわらず、ほとんど窒息死の瀬戸ぎわまで眠る。そのために、われわれのからだじゅうは、一晩じゅうに鈍く重くなっていく。そして、睡眠が与える元気回復ということは思いもよらないことであつた。

われわれは、水夫室なる罐詰とびらの、扉ふたなる蓋ふたをあけて、初めて、人心地ひとこちがつくのであつた。——これは、本文と関係のないことであるが、この時乗り組んでいた人間のうち、藤原、波田、小倉、西沢、大工だいく、安井は皆肺結核患者であつた——そして、この空気混濁は、そのことに起因して、肺患者を海上において生産する矛盾をあえてした。

罐詰の内部に、生きたものがあるという結果は、どんなものであるかは、明らかにだれ

にでも想像のつくことであつた。ただそれは、その蓋ふたをあけた時に、蓋の外の清浄さによつて、非常に救われた。

彼らが五時間眠っている間に、海は凧ないだ。アルプスのように骨ばっていた海面は、山や梨まなし高原のようになつていた。マストに、引っかけ打ぶつつかつた雲は、今は高く上方へのぼつて行つた。

発作の静まつたあとのように、彼女はおとなしく、静かに進んだ。

室蘭出帆の日は日曜であつて、作業、それも並み並みならぬ難作業だったので、今日きょうの日曜は日曜繰り延べで休みにするように、「とも」へ頼みに行くことにしようではないかと「ならずもの」どもは、歯みがき楊子ようじをくわえながら相談した。

「それは願うまでもなく至当の事じやないか。黙つて休みやいいさ」と藤原は鬪争的に主張した。

「これは、一々その都度都度、頼んだり願つたりしちや、面倒だし、そのたびにかけ合ひに行く者が悪者になるようだから、一つ永久的の取りきめにしたら、『日曜日、出帆入港にて休日フイとなりたる節は、翌日を公休日となすこと』とか何とか、四角ばつて、約束しといたら、そんなに、毎々まごつかないでも済むだろうじやないか」波田は提案した。

「そんなにしなくなつて、そういつもあることじゃないんだから、今日だけ願つといたらいいじゃないか」とボースンはなだめた。

哀れなボースンよ！ 年は寄つてるし、子供は多いし、暮らしは苦しいし、かかあは病氣だし、この憶病な禿げのお爺さんじいに従うことに皆決めた。

ボースンは、顔をあわてて洗うとそのまま、チーフメーツのところへ頼みに行つた。

船は大うねりに乗つて、心持ちよく泳いで行く。右手にははるかに本州北部の山々が、その海岸まで突出して、豪壮なる姿をまっ白く見せた。寂しい山河さんかである。そこにはわれらの寄るべき港とてはほとんどないのであつた。人煙まれなる森林地帯でもあるように、原始的な草原でもあるように感じさせる景色けしきであつた。ボースンの返事のあるまで、水夫たちは、デツキへ上がつて、なつかしき陸をながめ、昨日きのう困らされた海を見入るのであつた。

風は、今日は昨日ほど寒くなかつた。黒潮の影響を受けているので、デツキへ上がつて、メスで頬ほほの肉を裂かれるような痛さを感じることはなかつた。

水夫たちは皆、それぞれの嗜好しこうに従つて、横浜へ着いてからの行動や、食物について空想に浸つていた。デツキの上では、彼らは陸にさえ上がれば、あらゆる快樂がある、それ

が待つていると思う。自分たちが縛られ、奴隷扱いにされ、自由を略奪され、労働力を搾取されていることは、陸と、デツキとの間に海が横たわるからであると、無意識のうちに考えていた。それはちようど牢獄ろうじやくに監禁された囚人が、赤い高い煉瓦れんが塀べいのかなたには、絶対の自由がある。自分はそこでは自分の好む通りにすることができ。そこは、そのまま天国だと、考えるようなものであった。ところが監獄の塀べいの外にも、彼の考えたような自由はその影もなかつたように、また甲板の上で考えたような自由と幸福とは、決して陸上にもありはしなかつた。彼らは、それを、彼らが上陸するたびに味わつた。そして、陸上で自分の財布を地面へたたきつけ、自分の着ているその無格好な汚れた着物を引き裂き、労働で荒れた、足の踵かかとのような手の皮を引んむいてやりたく思うのであった。それらが、彼らがせつかくあこがれ切つた陸に上がったにかかわらず、彼らから自由と幸福とを追つぱらつた。

労働者は、自由や幸福や、人間性が、賃銀を得つつある間に自分に与えられ、あるいは自分からそれを得ようとするのが、全然不可能なことであることを知るようになる。人間が牛肉を食うと同じように、人間が人間を食う時代の存続する限り、労働者は、その生命が軛くびきの下にあることを自覚しなければならぬ。水夫らは、そんなふうなことを感じた。

と思うと、そのすぐ次には「おれ一人ひとりでいくらあせって見ても始まらない話だ、坊主でも女郎買いをするではないか、おれらは人間の中のくず扱いにされているんだ」と、社会が自分に強制するところの職分及び生活範囲を、自分から容認してしまうのであった。

彼らは、陸でも、これより月給がいいのに、おれは海の上でなぜこんなに少ないのだろう。おれも陸に上がって働けないだろうか、とても働けまい。口があるまい。と、彼らは法則どおりに思い込んでいたのであった。

ボースンが「とも」から帰って来た。そして「特に今日は休暇を与える」といったことを伝えた。

この報告は、何らの批評もなく皆に受け入れられ、喜ばれた。

「ばかにしてやがらあ『特に』だとよ」と、うれしそうに叫びながら、だれもが、何をすするためにもわからずに、そのベッドへと駆け込んで行った。

そしてこの貴重なる、出し渡られた休日を彼らは大抵眠ってしまふのであった。全く、いつもの例のごとく、この時も、一人残らず、その巢へもぐるが早いのか、眠ってしまったのであった。

唯一の切実なる欲求を睡眠に置いているセーラーたちは、そのことから見ただけでも、

どのくらい彼らが過労し、酷使されているかがわかる。

一〇

朝食は八時である。波田は、ボーイ長が負傷したため、仕事の間に炊事の方をやらねばならなかった。二時間ばかり間があるので、彼はその時間を、自分のベッドへともぐり込んだ。彼は、八時になると、コックから起こされた。彼は、おもての人たちが食べるように、大きなみそ汁鍋なべと、お鉢はちとを、コック場ばから抱いて来て、柱に添うてつり下げた、テーブルの上へそれを載せた。それから彼はあらゆる準備を終えて「飯だ！」と怒鳴った。ボーイ長には、昨夜どおりに、みそ汁を添えて与えて、彼は第一番に朝食についた。それは、全くうまい飯であった。みそ汁もうまかった。沢庵たくあんも、……

波田が食っているうちに皆も眠い目をこすりこすり起きて、飯にとりかかった。

船の飯はうまかった。それは、全く沢山食われた。それは味としては実にまずきこの上もないものであった。みそ汁にしろ、沢庵にしろ、味という点から味わう時にそれは零ぜろであった。けれども、これがセーラーたちにはこの上もなくうまかった。彼らはよくそれほ

ど多量に食べると思うほどむさぼり食った。

ストキは波田に、セーラーたちが、まずいものを多く食べることには、心理的な部分も非常に手伝っているといったことがあった。ストキに従えばこうであった。

セーラーは食物を定期に与えられる。彼らは、どの食事の前にも少なくとも、四時間の労働を課せられている。彼らは十分空腹である。時間が来ると、彼らは食卓へかけつける。食卓には、盛り切りの惣菜そうざいが一皿ざらずつ置かれてある。やや充分に食べるためには、沢庵だけしかない。彼らは、いつでも、次の食事がはなはだしく待ち遠い。それは、空腹が待たせるよりも、も一つの重要な理由は、次の食事が来るということが、その日の労働をそれだけ成し終えたという、一つの安心を彼らに与えることと、その食事のあとにいくらかの時間が、彼らに与えられていることとである。彼らはこれらの心理作用によって、待ち兼ねた食事が済むと、すぐに次の食事を、ゲーゲーおくびを出しながら待つのである。彼らはまた食事と食事との間に、間食することができない。彼らは食事に際して、そこに盛られた量以上の菜は絶対に食い得ない。また、それ以外の菜も海上において求むべき方法がない。ちようど彼らは囚人が、その胃腸を少食のためにそこないつつ、堪たえられない飢えを訴え、次の食事に対して焦燥を感じつつ待つのと、同様である。

セーラーたちが、食事をそれほど待ち、むさぼるのは、それが自分自身のためにする（これは資本家のために、再生産することにもなる）唯一の生活手段であるからだ。自分のためにする何らの仕事のない時、ただ一つの自分自身の事があるならば、それはだれにでも、重大に取り扱われねばならないことだ。ことにそれがパンの問題に関する時は、なおさらそうでなければならぬ。

実際彼らは、その食事を、実際より以上に、想像をもつて調理して食うのである。じやがいものうでたのが塩で味をつけて盛られてあると、彼らは、それをキントンと呼ぶのである。そして、それは全くきんとんのようにうまいのである。

外国航路における船では、決してこんな状態ではないが、それにしても心理的には、やはりそうである。けれども、万寿丸は、これがはなはだしい。万寿丸では、船主は甲板部に豚を飼っているつもりでもあるらしい。

「こんな状態では、だれでも、心細さからだけでも、のどまで詰め込みたくなることは事実である」と。これがストキのプロレタリア哲学であった。

事実、ストキは質^{たち}が悪い、第三者のつもりで、自分があらかじめ腹を作って置いて、その状態をながめる時に、ストキの観察及び批評は当たっていると、思わずにはいられない

のである。

食事は、藤原の皮肉なる観察のごとくにして終わった。終わるやいなやまた元のごとく寢床へ犬のようにもぐり込んだのが、三上であった。西沢は煙草たばこに火をつけて、彼が最も得意とする、信州岡谷わかや付近の紡績工場へ勤めていたころのローマンズの一くさりを語り始めた。彼の話は実にうまかった。講談師でもあれほどには話さないであろうと思われるほど、一切を創作的に述べるのであった。そして、その話がうまければうまいほど、初めの人には感心し、古顔は、にげ出してしまふのであった。

今は、藤原も、波田も、にげ出すわけに行かなかつた。ほかにだれも西沢のローマンズを引き受けてくれるものがないからであつた。藤原は辛抱する気でこれもむやみに、煙草をふかした。

西沢の話が、その巧妙なる山にはいつて、今まさに落ちようとする時、藤原がいった。「君の話は大変うまい。そして大層おもしろい。ただ、一度だけ純粋なほんとの話をして聞かしてもらつたら、なおおもしろいだろうと思うよ」

「アハハハハ、君の皮肉の方が上じょうず手だよ。僕も一度ほんとうな話をしたいと思うんだが、どれがほんとだか、どこからがこしらえたんだか、今では自分にもわからなくなつてしま

つたんだ。ハハハハハ」と氣のよさそうに笑った。

「君は全く、無産階級芸術家の宝玉だ。全くだよ」と藤原は、全くまじめにいった。

「小銃だと受けこたえができるが、藤原君がタンクを使用し始めると、僕も退却以外に応戦の法がねえや。ハツハハハハ」

西沢も、そのベッドへ上がって、ころがってしまった。

「どうだい、だれもかも皆寝ちやったね。『寝るほど楽はなかりけり、浮世のぼかが起きて働く』って歌があるじゃないか、皆賢くなっちゃったね」といいながら波田は、自分の巣から本を持ち出して来て、それを、かんづめ 罐詰の蓋のふたのところへ行つて読み始めた。

藤原はしばらく、暗い室の中で、煙草の火だけを、時々明るくさせては一人、ひとり何か考えているのであった。が、やがて彼は煙草を捨てて立ち上がった。

「波田君、君は感心に本を読むね、それは何て本だい。航海学かい」

「ナアニ、友人から借りて来たんだが、とてもむずかしくて、わからねえんだ」

「ちよつと見せたまえ、へへー、マルクス全集、第一巻Ⅱか、資本論か、それや君、社会主義の本じゃないかい」

藤原は、自分もその本を非常に読みたく思っていたが、あまり高価なので今まで買うこ

とができなかつた。彼は中をめくつて見ながら「おもしろいかい」ときいた。

「おもしろいか、おもしろくないか、ためになるか、ならぬか、まるでわからぬよ。意味がわからないんだ。とどこどころサーチライトで照らし出したほど部分的にわかるところがあるんだ。そこはね、本文の論旨を説明するために引例したところさ。その例だけはわかる。そしてすてきにももしろい。おもしろいというより、何だか、僕たちのことが、僕たちの知つてるより以上にくわしく書かれているよ。だけど、その例以外はまるでわからないんだよ」波田は正直に答えた。

「僕にも読ましてくれ、ね」藤原は頼んだ。

「ああ、いいとも、読んでくれたまえ、まだ続きが三冊あるからね」

「僕も本を読むことは好きだったよ。随分よく読んだものだよ」といつて彼は、波田と並んで木のベンチへ腰をおろした。彼は、人を人とも思わないような、ブツキラ棒な男であった。そして必要以上は口をきくことがきらいなように見えた。

「全く君は読書家だね」と波田は藤原に同意した。「そして、どんな本を君は好んで読んだかい」

「僕はね。ありとあらゆる詰まらない本を読みあさったよ。珠算^{ひと}独り学びなどという本まで、

珠算なんてする気もなく読んだし、ドンキホーテも、渡辺華山も、占易の本から、小学地理、歴史、修身、全く何でもかでも活字の並んでいるものは手当たり次第に読んだよ」と、藤原は、何だか、河の堤防が決壊しでもしたように渦を巻いて彼の話を話し出した。

一一

藤原は、そのいつもの、無口な、無感情な、石のような性格から、一足飛びに、情熱的な、鉄火のような、雄弁家が変わって、その身の上を波田に向かって語り初めた。

「僕が身の上を、だれかに聞いてもらおうなんて野心を起したのは、全く詰まらない感傷主義からだ。こんなことは、話し手も、聞き手も、その話のあとで、きつと妙なさびしい気に落ち入るものだ。そして、話し手は、『こんなことを話すんじゃない。おれはなんてくだらない、泣き言屋だろう』と思うし、一方では、『ああ、あんなに興奮して、あの男に話さすんじゃないやなかった。この話はあとあとの生活の間に何かの、悪い障害になるかしかない』と、思うに決まってる。ところがそんな結果をもたらすような話だけが、何かのはずみで、どうしても話さずにはいられない衝動を人に与えるものなんだ。あとで何

でもないような話は、何かのはずみに、だれかを駆り立てて、話さずには置かないというような、興奮や衝動を与えはしないんだ。僕は、今日、僕が本をむやみに読んだという話から、僕は我慢できなくなつたんだ。それほど、僕は『本を読んだ』ことが、僕にばかげた気を与えたらしいんだ。『本を読んだ』ことは、僕が起きるのにも、眠るのにも、ものをいうのにも『本を読んでる』ような感じを人に与えるらしい。つまり僕は本の読んでならない乾燥したもののばかりを読んだんだ。

それで僕は見事に頭をこわしてしまった。今から考えると、そのころ、僕は何を読むかという大切な読書の要件がわかっていなかったんだ。時によると、図書館で、目録だけを半日かかって読んだ。そして結局、本を読むことは、僕に何も与えないことを知つたんだ。そして今になって考えると、そのころの僕には、生活がなかったんだ。生活が、このころの僕は煙みたいにフラフラして、地についていない、生意気な学生だったんだ。本を読むことのむだを知り、僕の頭の従つて、カラツポであることを自覚した僕は、生活を得ようと考えたんだ。生活は学校を出て、その免状で月給にありついて、その範囲外は家からの補助で送るのが、生活じゃないことを僕はさとつたんだ。生活とは、燃えるものだと僕は思つたんだ。焼け尽くすような、爆発するようなものが生活だと僕は考えたんだ。おれは

親の金で教育を受けている。それやおれが生きてるといふ事にはならないんだ。おれが生きてるためには、おれが自分を活いかさなきやならないんだ。おれは、おれの腕で食おう！と僕は決心したんだ。そこで、僕は毎朝、下宿を弁当を持って出て、友人の所へ書物を預けて置いて、工場を回り歩いた。そして、Aという工場に旋盤見習いではいった。

工場生活は、非常に苦しかった。学生の生活とくらべて、溝とぶのように悪かった。朝から夜まで、仲間の労働者さえも、見習いの僕を敵視するように思われた。単純に物事が運ばなかった。僕は、今ではあたり前だと思つていたので、自分でも驚くのだが、『伍ご長のところへ行つて、グレインを借りて持つて来い』などいわれて、どのくらいそのためか恥をかいたり、方々駆けずり回つたりしたかしのなかつた。僕は、ここにも生活はない、と思ひ初めていた。けれどもそこは、学生とちがつたところがあつた。真剣だつた。そして、だれもが、心の底になにか雪雲のように陰鬱いんうつなものをたくわえていた。どんな若い労働者でも、不平をいつていた。そして、彼らは、その生活が悪いと考えていた。僕もはなはだ悪いと思つていた。そこで、僕らは、いい生活を考えるのだつた。こんな生活はいけな

い。
こんな生活は、あそこがこういけない、ここがあアいけないとすっかりわかつてるんだ。

そこで、いい生活はここをああ、あそこをこうと、旋盤をにらみながら一日に十四時間も十六時間も考えるんだ。それを、やっぱり仲間たちも、多いか少ないかだけで、考えるには考えているんだ。

『いい生活を人類のために求める。そこにおれの生活があるんだ』と、こう僕は、フト旋盤に送りをかけて、腰をおろす途端に考えたんだ。それから僕は、本を読む代わりに、自分たちの生活を見つめるようになった。僕はまるで僕自身をきゆうてき仇敵のように白い目で見らんだんだ。工場へ五時に来てから、幾度も小便に行つた。そのうちほんとうにしたかつたのが幾度、あとは、とにかく場処を動きたかつたからだ。倉庫番（工場の）のところまで何歩あるか、何秒かかるか、それだけをゆつくり歩くことを、なぜ職長はとがめるか、職長は労働者か、それとも何か、とそんなふうなに愚の骨頂のようなことから、その他さまざまなことが、僕の頭を根限り追いまくつた。

そして僕には、僕が学生であつた時代が恥ずかしくなつた一時代が来た。僕はそれから、性格が一変したんだ。それまでは、僕は、ほとんどだれからも愛される質たちだつたんだ。そして近づきやすい青年だつた。ところが僕が、学生時代をのろい始めると共に、職工時代をものろい始めたんだ。つまり、その『恥ずべき学生のおれを、今の職工のおれたちが養

つていたし、これからも養つてやらなきやならないんだ』と、ちやうど僕が、この正体の知れない考えにとらわれた時に、一人の職工と知り合いになつたんだ。

『人間はなぜ働かねば食えないんだか知つてるか、お前』とそいつがいうんだ、僕はしばらく黙つていた。すると、

『人間はなぜ働かねえやつがぜいたくだか知つてるか、え』とそいつがまたいうんだ。

『人間は苦しんでるんだ』と僕がいったんだ。

『そうだ。一人のために千人が、十人のために一万人が』とそいつがいったんだ。僕はわかつた。その労働者は、白水はくすいという名前だつた。

それから僕はその男とつき合うようになったんだが、その白水という男は全く珍しく意志の強固な、感情を理知でたたき上げて、火のような革命的な思想を持ち、それを僕らが飯でも食うように、平気で、はた目からは習慣的に見えるほど、冷静に実行する男だつた。A工場では、だれもその男を尊敬していた。会社では、その男を馘首かくしゅしようとして、あらゆる手段をめぐらした。そして、それは白水も十分に感づいていたようだつた。彼は、目だけを光らして、ほとんど上役と口をきくようなことがなかつた。上役も彼を見ると、なるべく避けて歩いてるように見えた。彼は、朝から終業まで、熱心に旋盤にかじりつい

て、仕事をした。そして、不思議なことは、彼は、特に能率を上げたこともなく、下げたこともなかった。いつも一生懸命でやっていて、そして彼の能率は中ちよつと以下であった。彼の熟練には、職長も文句が出なかつたんだ。彼はA工場の技師長と同期で大学を出た、といううわさがあつたんだから。ところが白水は学校には、実際は行っていないらしいんだ。しかし、また驚くほど独学をやつたらしいんだ。彼は僕と違って、読むべきものを知っていたんだ。探^{さが}す目的を持っていたんだ。それに、白水は、前科が四犯あつたんだ。その各^{おのおの}の入獄時代に外国語も研究したらしいんだ。年は見たところ三十にも見えるんだが、実際は二十六だつた。彼は、資本家からも、労働者からも、別々な立場と意味とからで注目されていたんだ。それはきたない、暗い六畳の間だつた。それを白水は借りたんだ。そして彼はそこで自炊を始めたんだ。しばらく彼がそうしているうちにその六畳の間は、いつでも夜になると、労働者が五、六人集まつていないことはなくなつた」

一二

藤原は熱心に語つた。彼は、白水を目の前に置いて、話してでもいるように、感激し、

幸福そうに自分の話に酔っているのであった。彼は、ここまで話して来て、その好きな煙たばこに火をつけて、肺臓全体に煙の行きわたるように、深く鋭く、煙をすった。

波田は、熱心に聞いていた。そして、白水というのは、藤原の前名のことではあるまいか、と、藤原の話の合い間合い間には疑ったりしていた。それは、藤原によって語られ、表わされる白水ではあるにしても、あまりによく藤原に似すぎていた。けれどもそれはどうでもいいことであつた。

「フーム、鉄工業の労働者は頼もしいね」と、波田は詠嘆的にいった。

「労働者は、主人になるんだからね、労働者の手によって、平和と幸福とがあがなわれるんだからね」ストキは、ホツとしたようにしていった。

「それから、その男はどうしたんだね」と、波田は本をいじりながらきいた。

「白水は、自分の六畳の薄暗いというより、ほとんどまっ暗な間まを、夜間——昼間でもいいのだが、昼間は皆仕事に出るのであった。が、中には、昼間弁当を持って本を読みに来る者もあつた——開放したのであつた。そして、顔は変わっても、数はいつでも大抵五、六人、多い時は十五、六人も集まつた。そして、そこでいろんな話を取りかわされた。僕も、その集まりには毎晩出たものだった。

白水は、彼の室では、またはその集まりでは、まるで工場における彼とは別人のように柔和に、そして気軽になるのだった。最初の間は、だれでも不思議に思うのだった。だけれが『白水君は、工場と、家とに別々な全く異つた白水君を持つてるんだね』といった時、彼はこう答えた。

『それや僕に限つたこつちやないぜ。君だつてそうじゃないか、機械の付属品たる君と、妻君のための君と、奴隷としての君と、君の主人としての君と、だれだつて、労働者はこの二つの人格を持つていないものはないだろう。君だつて、機械の付属部分として働いてる時の顔つきや気持ちと、今の、それ、細君や、子供のための君としての顔つきや気分の方が、どのくらいなつかしい、親しい人間だかわからないよ。燈台下暗しだけ、ハツハツハハハ』と。そこに居合わせた者も、皆声をそろえて笑つた。彼の説明は按摩あんまのように人を柔らかにし、その疑いを解いたんだ。

そして、話はいつも、こういつたふうな冗談から口を切られて、なぜ労働者が機械の付属部分であるか、という質問が生じて来るのだった。それには白水君がだれも返答しない時に、ゆつくりと、よくわかるように、説明を加えるんだ。

こういうふうにして、そこに集まつて来る労働者は、必ず、一つずつか、二つずつか、

自分自身の身の上の解剖を会得して帰って行くようになった。

こうしている間にも、白水は、絶えず、警察から、尾行されたり、張り込みされたり、呼び出しを受けたりするんだった。そして、それが、毎晩そこに集まることが原因であることが、そこへ集まってくる人たちにもわかつて来るのだった。

そのうちに、そこへ絶えず集まる者には、たとえばぼくらなどにも、時々警察の目が光るようになって来たんだ。それがなぜだかわからなかつたんだ。しかし、若い者は警察からかれこれいわれることに対して、非常な反感と、従って、それを激成するような、立場になって行くのだった。彼らは今まで無邪氣に聞いていた。しかし、警察が彼らの私宅を訪問したり、その工場を訪ねたりするようになると、彼らは真剣に聞くようになって来た。そして、警察をだんだん恐れぬようになって行つた。

『おれたち自身は何であるかを、おれたち自身で研究することが、なぜ悪いんだ』と、若い労働者たちは、警察の刺激の洗礼を受けると、一種の無産階級信念——を抱くようになって来たんだ。

そして、ついに、警察によって刺激された若人どもは、立派な『無産階級軍の前衛隊』となり、なお加えらるる試煉によって、牢獄も、絞首台も、恐るるに足らずという、固

い信念の中に、生きるようになったんだ。そうして、そうなる、そこに待っていたものは、彼らの尻しりを引つたいた鞭むちが、こしらえて待っていた陥おとしあな穽あなであった。いよいよ彼らは、現実に牢獄の堀へいに打つ突ぶからねばならなくなったんだ。

ある年の秋だった。A工場のあるN市は、日本全国を襲った暴風雨の襲撃をこうむった。その程度は日本の諸都市中で最もじめな部分に属するほどであった。

風が強くて、雨が横から吹いて、傘かさがさせなかった。屋根瓦がわらが吹き飛ぶので、街まちに出られなかった。海岸部分は軒先まで浸水した。水がひくと同時に、壊崩くずれた家が無数だった。船が海岸へ打ち上げられて、おもちゃ屋の店先における船のようであった。目ぬきの方でも、小学校が崩壊した。民家が倒れた。市民は外にも出られなかった。内にもいられなかった。

A工場の労働者も、この天災から逃避し得なかった。のみならず、彼らはその住む地域の関係上、より一層はなほだしい程度に、その惨害を受けた。彼らは少し受け取って多く養うために、安い家賃を選んだ。そこは海岸の低地であつたんだ。

A工場の労働者で、白水と同じ部に出ている男が、十分にその浸水の塩の辛さをなめさされた。彼の家は床上二尺浸った。畳がまさに汚濁せる潮水のために浸ろうとする時、ま

さにその時期にかつきり達している彼の妻君は、生理上の法則に従って、赤ん坊を分娩した。その産褥の隣に、十二年以前からいかなる場所へでも横になつて行く、痛風の彼の老母が臥せていた。

太陽がだれをも待たないと同様な公平さと、正確さとで、その汚濁した潮水は、その水量を増して来た。叫喚があつた。失心があつた。泣き声が上がつた。

この労働者は、盥に赤ん坊を入れた。そして押入れの上段に、できるだけ深く老母を押し込んだ。次に彼の妻君を、その手前に押し込んだ。その上で、この男は、自分自身赤ん坊をぼろでふいて、父親の正当なる責任を果たした。きわめて簡単明瞭なる事実であつたが、その簡単であつても、その事のために入費がかかるといふことも明らかなことだつた。ところが、どうしてこの男が母の薬代や妻のあと始末、それから子供への手当て、産婆への報礼などをする事ができよう。それどころではなかつた。彼は今まで、家族を養つていたA工場にも、出るに出不るにありさまだつた。畳はビシヨビシヨにぬれていた。床の下は魚でも住んでいそうだつた。便所と井戸水とが同居したのに、まだそれが掃除されていない。

もし、この男が苦勞になれなかつたか、貧乏になれなかつたかで、ちよつと神経質で

もあつたのならば、僕らが考えても、首をくくつた方が気がきいていそうに思われるくらいなんだ。ところが、この男は我慢したんだ。あとで知る事だが、この男は我慢するんだ、何でも、癩しやくにさわるくらい我慢強しやういんだ。と僕らは、そう思つてたんだ。ところがどうだろう。まるつ切りやつは感じないんだ。

彼は、この惨さん憐たんたる事実に対して、何物をも感じなかつたようだった。ただ、金が少々あればいいのだった。それが万事を解決するだろう。君、長い間、人間はあまりみじめであると、感受性を全然失つてしまうものらしいんだ。この兄弟なんぞもやつぱりその一例だと見れる。人間がその苦痛に対して、ならされてしまう——何の必要もないのに——それが、どんなことだと君は思うんだ。馬が去勢されて生殖欲がなくなるように、人間が、縛りつけられて、型に押し込まれて、自由を奪われてしまった去勢された馬のように、感受性を失つてしまう。自分がどんな奴隷どれいだか知らずに、働けば楽になると思つて働く。労働者たちは、皆この感受性を麻痺まひさせられてしまったのだ。労働者は働けば働くほど、自分を搾しぼる資本に、それだけ多くの余剰労働は搾取され、資本を増大せしめるんだ。

この去勢された、馬のようになり切つた兄弟は、二、三日の後会社へ行つたんだ。『積善会の積立金をいただきとうございますが、こうこういうわけで』と事実のありのま

まを純客観的に——彼には、今では、彼自身のことが客観的にしか見えなくなつたようだった——くどくどと述べ立てたんだ。

この積善会つてのはね、労働者の賃銀の百分の五を毎月強制積み立てをさせるんだ。そして、その金を一定の額だけ、吉凶禍福にに応じて、会社からいくらかの補助金と共に『給与』してもらうんだ。そして毎年一回この金で運動会を開いて、一金一封（五十銭）を酒代として、いただくんだ。工場法の役目を、労働者の負担に転化した型が、すなわちその積善会なるものだったんだ。その積善会のお金の中で私の積立金をくださいと、この男は申し出たんだ。

もちろんそれは言下にはねつけられて、見舞料として、積善会から二円だけもらえたわけなんだ。ところが二円では何とも話が煮えんとその男はいうんだ。何とかならないでしょうかと、相談を白水に持つて行つたんだ。

『それは、積立金を取つたらいいだろう。積立金は職工の貯金だろう。それを取つたらいいだろう。積善会の方はまた話が何とかつくだろう』ということ、白水は事務所へ、その節くれ立つた木の切り株のような男と一緒に行つたんだ。

工務係の後明こうめいという妙な後光の差しそなつたような名前の男が、二人ふたりと相對して、

何の話だときいたんだ。

おふくろと、妻と赤ん坊とを、押入れへ押し上げた、この哀れな男は、くどくどと、なぜ波が敷居より上へ上がって来たか、とか、畳と畳の間から、まず汚れた水が、ブクブクと吹き出して来るものだとか、押入れへ、幸い、三人を入れましたので、とか、彼が、今そこで、そんな目に会ってでもいるように、細大もらさず、『客観的』に話し始めた。

彼の話は、決して腹の立つべき質のものではなかった。けれども、その長さと、それから、繰り返すと、切りのないのには、だれもが退屈をしなければならなかったし、それに、話の中に、いつのまにか、問題と、話の中心とが離れてしまうという困難な欠点があった。

『それで、どうだというのだね』と後明は、この男にきいた。

『へー、それで』と、この哀れな男はおうむ返しに答えた。そしてそれっ切りで先が出なくなってしまうのだ。彼はもう、自分の要件は今までの話の中で話した、それも繰り返し繰り返し話したような気がしていたのであった。もうこれ以上何を申し上げましようといった顔つきをしていた。

『そういう悲惨な事情であるから、自分の労働賃銀の一部を積み立ててある、積立金を払い戻していただきたいのです』白水が代わって話した。

『君は頼まれて来たのかね』後明は、その方が先決問題だというような顔つきできいた。
『そうです』

『そうかね』と、今度はその男にきいた。

『へー』と、どっちだかわからぬ返事をその男はした。

『その事が、その積立金払い戻しについて、それほど重大な先決問題じゃないではありませんか、問題はきわめて簡単でしょう。労働者がその売った労働力に対して支払った金額の一部を、会社が労働者のために積み立ててある、強制的に。その金額を、労働者が返してくれというのは、まるで一分の思考をも要しないことじゃありませんか』白水はまくし立てた。

『そりゃね、だれも払わんとはいわんのだが、どういう手続きで持って行こうってんだね』
『支払い伝票さえ書けばいいこつちやありませんか』

『つまり、退職しようというんだね』と、意地わるの後明人事係はいった。

『退職！ だれが、いつ退職なんていったんです』と白水は少しずつ興奮してやり始めた。『だが、会社の規則では、積立金は、退職の時に支払うということになってるもんだからね。従って、積立金を受け取る者は、同時に、賃銀の残額をも一緒に支給されることになるわけだね』と、その豚めは、いやに尻しりを落ちつけてやがった。

『もちろん』と、白水は口を切ったんだ。やつが、何か心に決することがある時の重々しい口調でね。

『労働者が退職して行く時に、積立金が賃銀と同時に支払われるのは、当然なんだ、それは工場法にも明記されてあることなんだ。しかし、それはいかなる事情があっても、会社に損害のかかった場合でも、それから差し引くことができない、性質の金なんだ。その金が本人退職後もなお会社に残っていたとすれば、明らかに委託金横領ではないか、その金が支払われるのが、いつも最後の例だからって、その金を受け取ることによって、辞職を意味するなんて、そんな詭弁きべんが、よくも人事係の君の口から吐けたもんだ。君のその論調と態度とが、今まで、労働者自身の金を、どんな必要があっても労働者へ返さなかった、という例を作ったまでのことだろう。君のその論調でやられたのならば、今まで、一時の

入用のために、自分の預金を引き出すために、どのくらい多くの労働者を、君は馘首かくしゅしたことになるだろう。この会社の積立金がもし、糸切り歯のように、それをとると、命に關するといふのであつたなら、僕はわれわれの武器に訴えても、または工場法によつて、法においても戦うつもりだ』

白水がその重々しい論調で、肋骨ろっこつの間から、心臓を目がけて、錐きりでも刺すように話している、相手の後明は、最初はいやに横柄おうへいぶつて、虚勢を張っていたんだが、しまいには、おそろしくなつたらしいんだ。

『しかし、私はまだ、馘首かくしゅするとも退職せよともいいはしないですよ。ただそれは例のないこつた、今まではこういう仕来たりであつたといつたままでですよ』と、その千枚張りの面つらの上に油をかけやがるんだ。

『悪い例なら破つたらどうだというんだ。旧来の陋習ろうしゅうを破つたらどうだというんだ。一切合切がっさいを前例に守っていたら、人間はいまだに、人間の肉を食つて、生活しなければならぬんだ。まだ人間が人間の肉を食っているんだが、それがなくなるためには、あらゆる旧来の陋習が破らるべきなんだ。ことに法律でさえ保障しているような範囲内にまで、労働者を搾取し、劫略ごうりやくすることは、明らかに人間嗜食ししよくの一形式だ』白水はますます彼

の錐きりをもみ込んで行つた。

『いや、君のように興奮しちや困りますよ。そういうお気の毒な事情ならお払いするようにしませうが、何しろ前例のないことですから、一度重役まで伺つて見なければなりません、今すぐでなければいけないのですかね』と白水にいつて、

『オイ、どうだい、すぐいるのかい』と、哀れな切り株にきいた。

『もちろんすぐです。今日はもう三日後きょうになつてるんだから、おくれてるんですぜ』と、白水は、その切り株があわてて、へまな返事をする事だろうと思つて、引き取つて答えた。

『それじゃお話しして来ますからしばらく待つてくれたまえ』といい残して、バリカンでいたずらに毛をきられたむく犬のような格好で、後明人事係は出て行つたんだ。

長いこと待たせて後明は歸つて来て、紙つ切れを渡して、

『それへ金額を書いてください、そして、その金額は向こう三か月間に分割して、収入から差し引いて積み立てますから、そのつもりでいてください』と抜かしやがつたんだ。

『何をこのむく犬め』と、白水はいきなり怒鳴りつけて、そこにあつた椅子いすを振り上げかけたが、切り株が止めた。

『へえ、ありがとうございます。今さえ助かりや、あとは三月で間違ひなくお返しいたしますから』と、一方で白水を引っぱりながら、一方で後明に、承知をした上、ご丁寧なお辞儀を一つしたんだ。

『へえ、何に、今の都合がつきやあとはまた、まっ黒になってかせぎますから』と白水にいったんだ。

その事件があつて後の白水は、会社側からはなほだしく忌みきらわれた。そして白水のかくしゅ 馘首が事務員から、重役の問題にまで進んだんだ。

この家屋浸水事件後、僕と白水その他の多数の兄弟たちが、A工場に対して、N市における最初の大規模な応戦を試みて、全部が、見事に陣頭に倒れ、おまけに僕と白水とほかに四人の兄弟が、その争議のため、ろうごく 牢獄の赤い煉瓦れんがべい 塀をくぐることになったんだ。それは九月の末ごろであつたろう。A工場の労働者たちは、切り株浸水事件の後に、白水が積善会の積立金の会計報告等が一切ないことを鳴らし、かつ工場の扶助規則や未成年労働者使用等、規則違反が多いことなどを表面の理由として、資本家階級の間、どんな策戦があるか探りを入れ始めたんだ。N市は地方的に利己的などころであつた。そのために争議も、一種の地方色を持つていたのだが、僕らは、最初の日の示威運動がすむとすぐに

警察へ引っぱられ、そのまま、未決監へ送られたので、争議の経過は、まるで知らなかったんだ。だが、僕らが警察へ検束された翌日、ドシャ降りの雨の中を、A工場の兄弟たち千人が、警察へ示威運動に来て、警察へ委員を送って検束の理由を聞く一方労働者軍は、雨の中でその響きと和して革命歌を合唱してくれた時は、僕ら五人は中で思わず革命歌に合唱したんだ。そして、その日の夕方、その日の示威運動をリードした鈴木君すずきが、はだしで引っぱって来られたんだ。

僕らは、警察から検事局、検事局から未決監、予審と、順を追うて進むべき道を進んだんだ。そして、そこへ送られた五人の初犯囚は、警察の恐るべきでないと知ったごとく、***なるべきでないことをまた知るに至ったのであった。その争議は、N市に永久に、無産者運動を据えつける基礎になった。

そして、その刑を終えると、同志はそれぞれ袂たもとを分かって、他の都会へ散って行ったんだ。そして、僕だけはこうして船乗りになっているんだ。白水は今はどこで活動してるだろうと、よく僕は思うんだ。船における戦闘は、陸上とは全然趣を異にすることが、このごろ僕にはわかって来始めた。僕らは、百人分の米を作って、自分は飢え、千人分の布を織って自分は凍えたり、大建築を建てて自分は行きだおれしたりするような労働者の地位

を全く改めうるまでは、不断の闘争が必要なんだ。そしてその時は必ず来るんだ。当然来るべきよきものを迎えないという法はない。われわれはそれの来るまで迎えるんだ」

ストキはポケットから煙草たばこをとり出して火をつけた。

「波田君、僕の話がいや味になりやしなかつたかい。うんざりしちやつたらうね」

「いいや、おもしろかつた。僕は、君らが経験した監獄の話を知りたいんだ」

「監獄の！ 監獄の話は単調なものだ。単調無為という苦痛だけさ。社会では、僕らの生命はそれを顧みる暇のないほど多忙に搾取され、その溝どぶだまりに投げ込まれるが、監獄では、ただじつとそれを見詰めるというだけのものだ」藤原は、静かにデツキへ出て行った。「さあ、それじゃ、僕は昼食のしたくをしなきゃ」といって、波田は、コック部屋へやへと出て行った。

デツキでは、藤原は、波よけにもたれて、荒涼たる本州北部の風光に見入っていた。

一四

わが万寿丸は、三日間の道を歩んで、その夜十一時ごろ横浜港外へ仮泊するはずだった。

船は勝浦沖を通つた。浦賀沖を通つた。やがて横浜港の明るい灯が見え初めるであろう。横浜は、水夫ら、火夫らの乳房であつた。それを待ちあぐむ船員の心は、放免の前日における囚人の心にも似ていた。

東京湾の波浪も、太平洋の余波と合して高かつた。梅雨上がりの、田舎道に墓の子が、踏みつづさねば歩けないほど出ると同じように、沢山出ているはずの帆船や漁船は一艘もいなくなつた。観音崎の燈台、浦賀、横須賀などの燈台や燈火が痛そうにまたたいているだけであつた。しけのにおいが暗の中を漂つていた。落伍した雲の一団が全速力で追つかけていた。

それでも、もう本船が、酔っぱらいのように動揺する。というようなことはなかつた。本牧の燈台をながめて、港口標光を前にながめながら、わが万寿丸は横浜港外に明朝検査までを仮泊した。三千トンの重さと大きさと、怪獣のうなりにも似た轟音と共に錨は投げられた。船はその動揺を止めた。

一時に一切が静かになつた。一切の興奮と緊張とが、一時に沈静した。

「一切は明日なんだ。明日は幸福と解放の一切なんだ」とだれもが安心したのだ。

水夫らは、船首上甲板に立つていたが、錨が投げられると共に、その各の巢へ飛び込み

始めた。先頭の波田がタラップをおり切らぬうちに、ボースンは怒鳴った。

「オーイ、これからサンパンをおろすんだぞ」

あたかも強い電波にでも打たれたように水夫たちはこの言葉に打たれた。

岩見武勇伝いわみに出て来る鎮守ちんじゆの神——その正体は狒々ひひである——の生贄いけにえとして、白羽しろは

の矢を立てられはせぬかと、戦々きようきよう競々きようきようたる娘、及び娘を持てる親たちのような恐れと、

哀れとを、水夫たちは一様に感じた。これは、夜横浜に着いたが最後まで必ず起こる現象であ

った。そしてまた、船長はいやでもおうでも夜横浜へつくように命令するのであった。朝

着きそうな予定のときだけが、その通りに入港した。その他は必ず夜着くように犬吠いぬぼう沖

か、勝浦沖かで彼女は散歩を強制せられるのであった。

古今共に狒々ひひが、出るためには、夜を選ぶのであった。そして、悲しむべきことは、わ

が万寿丸に岩見重太郎が乗り合わせていないことであつた。十一時、サンパンは、その非

常に危険な怒濤どしうの中におろされなければならなかつた。二人の漕ぎ手ふたりが、水夫の中からつ

かみ出されなければならなかつた。

この漕ぎ手に白羽の矢が立ったのは、鯉かつおぶね船で鍛え上げた三上と、舵取りかじとの小倉とで

あつた。三上は低能であつた。小倉はおとなしかつた。白羽の矢は、岩見武勇伝の場合と

違つて、大抵この二人に、恒例として当たるのであつた。

二人の漕ぎ手は、一里余の暗黒の海上を、サンパン止め——暴風雨にて港内通船危険につき港務課より一切の小舟通行を禁止する——の暴化を冒して、船長を日本波止場まで、「秘密」に送りつけねばならぬのであつた。

船長は、「秘密」で、上陸して、その家庭へ帰るのであつた。そして、その翌朝、「秘密」に、ランチで本船へ歸つて、それから、「公然」入港するという手順になつていたのである。

それらの面倒で危険な、一人ひとりのために何にも関係のない、もう二人の人間の生命を、危険に向かつて暴露する。この「秘密」の冒険で、船長は十時間、あるいはもっと少なく八時間だけ、家庭における人となりうるのであつた。

船長は、船長室でしたくをしていた。彼は、彼の家庭についてだけ抱いだきうる、彼の思想を、この船に対する他のあらゆる思想と、全然区別していた。彼は、「秘密」の彼の上陸の前には、対内的にのみ、船長から、人間に変わるものであつた。彼は何もかもが、一切合切、妻のこと、子供のこと、その他で持ち切つていた。ことに、妻のことでは、彼は、「やきもち」をやっていたのであつた。

彼はトランクに種々のものを押し込んだ。そしてはまた出した。そしてため息をついた。「サンパンの準備は何だつてこんなに手間取るんだ！ わかり切ったことじゃないか、一度や二度のことじゃあるまいし、チエツ！」だが、彼は、まだ催促については我慢していた。そして彼は自分の室を見回した。

船内において一番きれいな、広い、凝った、便利な室ではあつた。が、彼にとってそれは、ビール箱の内側であつた。それはすこしも愉快なものではなかつた。それはかわいた荒あらむしろ 蓆じふのように、彼の神経を埃ほこりつぽく、もやもやさせた。

ボーイがコーヒーを持って来た。

「まだ、したくはできないか、ボースンを呼べ！」と彼は、ボーイに命じた。そして、ボーイに対しても腹を立てた。「チョツ！ こんな気の抜けたコーヒーを持って来やがつて、コーヒーの保存法も知らないんだ、やつらは」彼は、煮えつくようなコーヒーにのどをうるおした。

「ソーツと、出し抜けに、おれは帰らなきやならん。自動車は家へ知れないくらいところで、帰してしまわなくちや、そして……」船長は、絶えず妻にやきもちを焼いた。そして、彼も、それほど妻を愛してはいないことを、誇示するつもりで寄港地ごとに遊郭に行

った。そこではよく、水夫と一つ女を買い当てたものだ！

それは、全くおもしろい、こっけいな、喜劇の一幕を演ずるのだが、今は、サンパンが用意されようとしている。

一五

水夫らは、ともに、三番のウインチに二人ふたりついた。ボートデッキに二人おののロープについた。そして波田は、サンパンに乗った。それをタラップまで回航するためであった。かわいそうなドンキーは、また機関室へはいつて、蒸気をウインチへ送らねばならなかった。火夫も火口に待つていねばならなかった。

綱は少しずつ繰り延べられた。それは板の上へおろされるのであるならば、サンパンにかかっている鉤かぎを、綱がゆるんだ時にはずしさえすれば、サンパンはそこに立派にすわっているのだが、それが波——ことにその夜のごとく、大きく鼓動している時——に向かつておろされる場合は、非常に困難であった。波の絶頂に上がった時に、一方の鉤だけをはずすならば次の瞬間には、そのサンパンは鮭さけのようにつるさされているだろう。それが、波

の最低部にまでおろされることは、不可能であった。鉤がはずれるであろう。もし鉤がはずれなければ、本船のどてつ腹へその頭か、またはひよわいその腹を打つつけて、砕けてしまふだろう。

ボートデツキで綱の操作をしている二人の水夫も、伝馬てんまの中にあつて、しつかり、鉤のはずれないように握つた、波田も字義どおりに「一生懸命」であつた。波は、本船の船腹を蛇へびの泳ぐように、最高と最低との差を三間ぐらいに、うねりくねつていた。

今、伝馬は波の斜面に乗つた。波田はともかぎの鉤をはずした。とその時に「スライキ、スライキ、レツコ」と怒鳴つた。「延ばせ、延ばせ、打つちやれ」という意味である。伝馬への本船からの臍へその緒おのごとき役を努めていた綱は今一方はずされ、どちらも延ばされた。波田はすぐに、船首の方の綱をも、うまくはずすことができた。そして、伝馬は、今や、本船と完全に独立した小舟になつた。と同時に、伝馬は、すでに十間余りを押し流されていた。そしてそれは、盆の中で選り分けられる小豆あずきのように、ころころした。

波田は、櫓ろを入れた。船は、まっ黒い岩か何かのように、そこにどっしりしていた。そして、波の小舟は忙せわしくころんだ。寂しい気持ちであつた。彼は全身の力をこめて、櫓ろを押しした。船のともを回ろうとした時、伝馬はなかなかその頭を、どちらへも振り向けよう

としなかつた。一目散に逃げて行く犬の子のように、むやみに風に流されようとして、波田に反抗した。けれども彼の総身の努力は、そのからだに一杯の汗となつてにじみ出たように、伝馬の頭をようやく風かざかみ上かみに向けることができた。が、ともすればそれは横に吹き流されそうであつた。

彼が伝馬をタラップにつけた時は、そのからだじゆうは洗つたように汗になつていた。波を削る風はナイフのように鋭かつたが、それが、快く彼の頬ほほを吹いた。彼はすぐおもてへはいつて汗をふいた。

おもてへは、みな帰つて、船長が帰ることについて、ものうさそうに、一言か二言ずつの批評を加えていた。

三上と小倉とは、からだじゆうを合羽かっぱでくるんですつかりしたくができていた。

「オーイ、行くぞーつ」と、当番のコーターマスターがブリッジから怒鳴つた。

「ジャ頼みます。ご苦労様、願います」と残る者は二人ふたりにいいながら、タラップまで見送つた。

二人の船頭さんは、船長の私用のために、船長の二倍だけの冒険をしなければならなかつた。

船長はボーイに導かれてタラップ口へ出て来た。

彼が何かを入れたり、出して見たりしていたトランクを、ボーイはさながら貴重品でもあるかのように、もったいらしく持っていた。

船長は、やきもちをやきながら、ローマの凱旋將軍シーザーのごとくにサンパンに乗り移った。

船長以外のすべての者は、鉛のように重い鈍い心に押えつけられた。伝馬の纜ともづなは解かれた。とすぐに、それは、流された。まっ暗な闇やみの中に、小さなカンテラが一つボンヤリ見えた。そのそばから、小倉と三上との声で、エンヤヨイヤ、エンヤヨイヤ、と聞こえて来るのだった。

水夫たちは、おもてへ帰った。そして船長を送り届けてサンパンの帰るまでは、眠つてもよいのであった。けれども、だれも黙つて、ベンチへ並んで腰をおろして、狐きつねにつままれでもしたようにボンヤリしていた。

過度労働のために、水夫たちは、無抵抗的に催眠かいせんされていた。そしてそこには死のような倦怠けんたい以外に何もなかった。一切の望みを失った無期囚徒のように、習慣的であり、機械的であった。いわばへし折られた腕か何ぞのようにならりとしていた。

時々だれかの神経が少しさめると、そこにはその神経を待っていた多くの不快な刺激が、それをムズムズとくすぐるのだった。それは虱しらみの食うような、または蚊がうるさく耳のそばで泣くような、そんなけちな、そのくせどうにもいやでたまらない、くだらない事柄ばかりが待ち構えているのだった。そして、この船室全体の構造と、彼らが一様に抱いだかされる共通な基本的な感じとは、倦怠けんたいに虫ばまれ切った囚人が、やはり、ボンヤリ高い窓をみつめて、そのなれ切った倦怠と無感覚とを、鈍く感じてるのとよく似ていた。

船員たちは、こんなことが「労働」だとは思っていなかった。彼らは、自分が寝るも起きるも賃銀労働者であることは知っていた。けれども、それを絶えず意識の中にしつかり、握り詰めているわけには行かなかつた。ことにその労働場が船であったために、彼らは一軒の家に住んでいるように心得がちになるのであった。彼らは、えて、自分に課せられる不当な労働、支払われない労働を、ついうっかり、「つとめ」だと思い込んでしまうことが多かった。

「一つ釜かまの飯を食ってるんだから」と水夫たちは思って、我慢しているのだった。そして、それは、ともの連中、メーツたちをして、最上、最強の鞭むちにしてしまわせた。彼らはほかのどんな手段ででも、その「やせ馬」どもが、すねてがんばる時は、そのとつときの鞭を

一つ食らわせれば、それで万事はいいのだった。

そのうちに、一人ひとりずつ、その寢箱の中へはまりに行った。どうしても、船長を送った伝馬は、二時半か三時、でなければ、早くても帰らないんだ。このしけでは、いつまでも帰らないかもしれないのだ。大体あまり、船長も家を恋しがりすぎるのだ！

「あああ、人間がいやになったわい」と西沢は、一番奥の彼の巢からうなった。

「どうだ、種馬になったら」と、波田が混ぜつかえして、そのまま、死のような倦けんたい怠へと、一切は吸い込まれてしまった。船長は、その家へ帰ったが、負傷にうめいているボーイ長は箱の中に、荷造りされたように寝ていた。

一六

本船を離れた伝馬は、その航海に本船が経験した、より以上の難航であった。港口は、すぐそのように見えた。けれども、小倉と三上との腕のさえにもかかわらず、まるで港口に近づこうとはしなかった。船長はじれ切っていた。

「あの灯のあたりがおれの家だ」と、乗って二十分ぐらいの間は、思っていた。ところが、

いつまでたつても港口が近づかなかつた。しかし、まつ暗やみであつたが、櫓ろの音も、二人たりの鼻息もすさまじい風の音を破つて彼にまでも聞こえるのであつた。

伝馬は、仙せん台だい沖おほの鰹かつお舟ふねで鍛え上げた三上がともを押しして、小倉が日本海おき隠岐で鍛えた腕で、わきを押しした。

しかし、彼らは二人とも、本船を離れるが早いのか、これはむずかしいと直感したのであつた。櫓は、振り回す鞭むちのようにしわつても、伝馬は、港口から、流れ出る潮流に押し流されて、すこしも進まないのであつた。で、彼らは、港口までは、逆流を利用しようと決心した。そこで、船首を本ほん牧もくの方へ向けた。伝馬は進んだ。しかし、それは激流を横ぎするような作用と共に進んだのであつた。彼らは、本船を離れて三十分もたつたころ、どこに本船があるかを、片方の手で額の汗をぬぐいながらさがして見た。

本船は、黒く、小さく、港口の方に見えた。

彼らは流されつつあることを知つた。しかし、彼らは、彼らの持っている最大の力以上は出せなかつた。その上彼らは三十分全力を尽くしたのだ。彼らは、その潮流と、その風とに到底打ち克かつことができないということをとると、ぐっとその能率を引き下げた。そして、流れない程度にだけ押しして、再び船首を横には向けなかつた。

一切の物がその息を潜め、その目をつぶっている。その時に、その何物も見得ない暗^{やみ}の中で、懸命に波浪と潮流とに対抗することは、その運命を、牢^{ろうごく}獄内に朽ちしめるように決定された、無期徒刑囚のような神経になりおおせた彼らであつても、なし得ない辛抱であつた。

ことにそれは、この闇^{やみ}の中に、ボンヤリすわつて時々、「シツカリしないか」とだけ怒鳴る船長の、利己心からのみ起こつた一切だ、という感じが、いつのまにか、闇が産みつけでもしたように、二人の胸の中に食い入つていたのであつた。

今は、二人の漕^こぎ手は、その櫓^こに対しての意識の集中を断念して、船長と称する不可解な、そのあいまいな、暗黒な形相をしていて、サンパンの中にすわつている、この生物に對して、「なぜおれたちは、こんなに苦しまねばならないのだ」という考えの周囲をさまよい始めたのであつた。

それは、だれもみてもいないし、聞いてもいないし、感^あずることもできない、全く暗黒な闇の中であつた。そこには、どんな叫び声をも一のみにする嵐^{あらし}と潮の叫喚があつた。そこには、何物をも洗い流すところの急流があつた。そこには人間を骨^こごと食つてしまう鱻^{ぶか}がいるのであつた。

「そして、あいつは、たった一人だ。ひとりおまけに、あいつの腕の五本ぶり、おれの腕はある、あいつを五人さげることが、おれは平気だ！ だのに……」

獲物えもののまわりにわざと遊びたわむれて、なかなか飛びつこうとせぬ狼おおかみのように三上は、その考えのまわりをウロウロしていた。

小倉は同じような考えを別な方から嗅かいでいた。飢餓がある。疾病がある。不具がある。負傷がある。そしてそれらのすべてが死へ行く道になっている。彼はこの道をブルジョアによつて、他の無数の労働者と一緒に追われている。それを追つて来るのは少数だ。追われているのはそれらの幾千倍も幾万倍もあるのに、その多くの労働者の群れには、牙きばをむいて自分のあとを振り向こうとする、たった一人の仲間さえもないのだ。労働者は、塩にあつたなめくじだ。それはわけなく溶けてしまうんだ。ただ一人の労働者、それが十人に一人、十万人に一人もないのだ。それで、それでこそ、人間は、大量生産的に**されうるのだ。人間は自分のためには死ねないんだ。人間は、命令を好むものだ。命令の下にはすべての人間が死にうるが、自分からは一人の人間も、よく自分を殺し得ないものだ。一人の人間が、生きていたために、何十万の死んだ例がなかつただろうか。全世界の歴史が、このありがたからぬ、あるいはありがたいところの人間性の弱点によつて、血で染め上げ

られ、肉で書かれたのではなからうか。奴隷どれいの歴史を読んで、その主人の暴虐に憤る前に、人は、その奴隷の無知と、無活気なるを慨なげかないだらうか。われら、賃銀労働者も、奴隷のように、農奴のように、われらの子孫をして拳こぶしを握らしめないであらうか。それは、人間の力をもつては、意思の力をもつてしては、いかんともなし難いところのものであるか。おれが、人類の歴史を見て泣くように、おれはまた泣かねばならぬ歴史を、書き足しつつあるんだ。おれは、そういう汚よごれた歴史に邪魔者としてはいることは、今までできたのだ。また今でもできるのだ。だが、それができないところに人類の歴史が汚されるような大きな結果が持ち上がるのだ。だが、血と肉とで積み上げられた歴史は、その生いけにえ贄えがはなはだしかつただけ、それだけ美しい花が咲くんだ。歴史が行く道をおれはついて行き、その歴史の櫓ろを押せばいいのだ。

「おい！ 伝馬てんまはどんどん流れつちまうじやないか、どうしたんだい」

「船長！ 引き潮だから、いくら押ししてもだめだ。港口に行きやあ、また流れつちまうだけのもんだ。それよりや上げ潮を待った方がいいや」三上はまだ獲物のそばにでもいるように薄気味わるく、ぞんざいな言葉を使った。

「ばかなことをいうな！ 夜が明けちまうじやないか、しつかり押せ！」

「自分でやって見るといいや、これ以上おれたちの腕にや合わねえんだから」三上はいよいよ打ぶつつけるようにいい切った。

「何だ！ やらないというのか！ よし！ 覚えておれ！」船長も仕方がなかった。こんなまつ暗がりの海の上でけんかをすれば自分が負けにきまつているのだった。彼は明日あすを待つことにした。

「何だと！ 覚えておれ？ この野郎！ 手前てまえは何だつて……今日の暴化きょううがサンパン止めになつてゐる事ぐらいを知らないか、この野郎、手前を海の中にたたき落とすのは造作ねえんだぞ、どこひよつとこめ！」三上は漕こぐ手を止めてしまった。

三上は、低能だといわれていた。彼にはいろんな発作的の行動があるのだ。船長は、それを知っていた。それでいじけ込んでしまった。ばかに相手になつてこの暗い海へほんとなたき込まれたら、全くそれ切りだつてことは、十分に船長も知っていた。

「三上、そう怒おこるものじゃない。え、浜につけば、気に入るようにしてやるから怒らずに、一生懸命やつてくれ、え」

「着けば『わかる』んだね。よし来た」仙台はまた、ぼつぼつと櫓ろを押し始めた。

小倉は、おかしかった。「着けばわかる！」三上の野郎首を切られるのがわかるだろう、

ばか野郎め！　せつかくおもしろいところまで筋が運んだと思ったら「わかる」で済ましちまやがった。フ、これが「労働者」なんだ。だれにでも、たった一言できれいにだまされちまうんだ。これだから、人間の歴史がいつまでも、歯がゆくて癩しやくにさわってたまらないんだ。あ、わかる、わかる、全く一切がよくわかる。

しかし全く、心細い「航海」ではあった。海はすぐその足の下でうなっていた。唯いがんでいた。そしてそのからだをやけに揺すぶっていた。

三上と、小倉とは、その生活の大部分がそうであると同じに、今もただ機械的に働いているに過ぎなかった。けれども、彼らは、恐ろしく磨滅まめつして来た。いわゆる「焼けて」来たのであった。彼らは十分に栄養を採っているわけではなかったもので、機械の油が切れてすぐ焼けて来るように、彼らの肉体も焼け始めたのであった。彼らは、ことに小倉は三上よりも体力が非常に劣っていたので、肩から背へかけた部分、大腿骨だいたいこつの部分などに、熱を感じて来たのであった。それと共に、二人とも、非常な「だるさ」と、力の衰えることを感じた。彼らは「ままよ、なるようになれ！」と覚悟を決めてしまった。

船長も、今は強圧的に、頭ごなしにやつつけるわけに行かなかった。もちろん、その精銳なるピストルは本船に置いて来たのであった。このために彼は、幾分かその憶病さの度

が募つたのもあつたが、何しろ、彼は、ただ一人であつた。その権力——与えられたる——を保証し、それを暴力化せしめるところの背景が、全然、今、彼に与えられていなくなつたのだ。

「力が一切を決定するのだ。民衆は、今恐ろしい勢いで力を得つつあるのだ。力が正しく働くか、力が悪く働くか、力が搾取的に働くか、力が共存的に働くか、によって、人類が幸福であるか、不幸であるか、惨虐であるか、平和であるかに分かれるんだ」

小倉は、船内において最大、最高の、公、私、いずれにもわたる権力の所有者である船長が、その一切の暴力的背景を置き忘れて来たために、この短時間の間に、五倍の太さの腕を有する三上の一喝かつもとの下に、縮み上がらねばならぬという喜劇を見た。そして、そこに暴露されたる権力の正体を見た。

「おれたちが力を個々には持つていても、それが組織されていない、訓練されていない、というところに一切の敗因が巢食つているのだ！」小倉は、それが個々に露頭の突き合つたおもしろさから、あとから、あとからと、それについての考えが、わき出て来るのだつた。

「だが、おれたちは、今、この万寿丸の状態で、労働者の個々の力を組織することができ

るだろうか、発作的な、衝動的な、同志打ち的な暴力の発動は、おれたちの仲間にある。

(以下八字不明)はおれたちの上にあるのだ。おれたちは、十分に組織された暴力をもつて傷つけられる上に、まだ足りないで、自分自身の暴力まで用いて、自分を傷つけるんだ」

小さな伝馬は、その危険なる海上を、その暗黒の中に、船長の地位も権力をも完全に蹂躪ゆうりん

して、まるで冗談のように、クルリクルリと揺れて、一つところにかろうじて漂い得ていた。

船長は、亀かめの子のように首を縮めていた。そして、質においても量においても、小倉と三上との二人分よりも沢山着込んでいるのに、寒さにふるえていた。そして、三上の一言に、まだその顔をほてらせながら、ギクギクしていた。そして今日の潮の長さを、しきりに癩しやくにさわっていた。

彼にとっては、三上が一秒間でも彼を侮辱したことは、三上の生涯を通じて所罰さるべきであり、そのそばに黙って櫓ろを押していた小倉も、その侮辱を聞いたという廉かどによって、同罪であるべきであった。そして、彼は、横浜碇てい泊中はくには、やつらが「何であるか」を思い知らせてやらねばならないと決心した。

「それにしても身のほどを知らない、ゴロツキだ。一体このごろの労働者は生意気だった

り、小癩こしやくだったり、そうでなければ、仕方のないナラズ者のゴロツキだ。従順な性格を持ったやつは一人もありやしない。やつらを一人ずつ所罰するのは手間であまらないことだ。労働者が、これほど生意気になるのは、法律があまり甘やかしすぎるからだ。十五世紀から十九世紀までも英国で行なわれたような、労働立法を制定して、額らくいんに烙印おを捺すのが一等だ。鞭むちで打つのだ、耳を半分切り取ることだ。終身奴隸どれいとすることだ、首に鉄の環わをはめることだ」

船長は、三上が癩にさわってたまらなかつた。それはありうべからざることだ。想像だもつかないことなのだ。奴隸に等しいものが「どうも、これははなはだおもしろくない現象だ。そういうことは、根絶しなければならぬ。いや、全く法律が不完全だ」

船長は、変わった解雇方法で三上をいじめてやろうと決心した。

一七

潮は今、引き潮の最頂点に達した。

万寿丸の伝馬てんまも、三上と、小倉との経済速力をもって、港口へ近づき始めた。

十一時におろされた伝馬は、今、十二時半まで、まっ黒やみの中に、吸いつかれでもしたように一つとところに止まっていたのだった。

日本波止場まで一時間はかかるのであった。

小倉は勘定していた。「一時半について、それから三時に船に帰って、三時半に伝馬を巻き上げて、四時から、おれはワツチだ。チエツ！ 畜生！ ここでこのままへたばって眠った方が気がきいてらあ、畜生！」

三上は、この時すこぶるおめでたい、がしかし実際的な、そして架空的な、とつぴな計画を立てていた。そして、その計画は、船長が「わかる」ようにしてくれれば、やらずに済むのであったが、もし、おれをだましでもしたら、かまわないから、やってやろうとした、復讐的な意味をも含んだところのものであった。

三上はこう考えた。船長はおれをきつと女郎買いにやってくれるつもりに相異なる。船長だっておれが上陸ごとに女郎買いに行くのは、知ってるんだから、それに今夜は、あんなふうについてたんだから、きつと「サンパンは纜もやつといて、泊まって明朝帰ればいい、サア」といって十円は出すだろう。そこで、小倉は女郎買いには行かないに違いないから、やつを宿屋か何かにほうり込んで置いて、それから……と彼はうっかり笑った。

「もし、万が一、そのままうちやらかしてでも行きやがったら、その時はきつとやってやるから」と、すごい目つきを、闇やみに向かって光らせて「見せた」。

三上は、変態性欲的というか、あるいは不飽性性欲的というか、または、彼の肉体が立派なように、従つてその性欲も、船員のような性的に不都合きわまる条件の下もとに置かれては、あらゆる機会を血眼ちまなこでさがし、それをおぼれる者が、藁わらをつかむように、しっかりとつかむのであつた。彼は、その原始的教養の持ち主として、また、その性欲に関する奇行の創造者として、船内における人気者であつた。

彼が、もしその執拗しつようさを今少し制御することができたならば、彼の人氣は、も少し深い意味におけるものになり得たはずであつたが、何をいうにも、そのしつこさにはだれでも参つてしまった。そして、彼のこの特徴は、彼が遊郭に行く時に、最もよく発揮された。西沢は、三上と一緒によく遊びに上がったものだが、それは、いくら西沢が逃げても隠れても、三上があとから、付いて行くことに原因したことだつた。そして、三上は、西沢の室の前に、腹ばいになつて、西沢の寝物語をすっかり聞いたりなどするのであつた。それは、何のためであるかはだれにもわからない。ただ、西沢は、「おれと一緒に上がった晩」こういったというのだ。つまり「西沢が相手の女に向かつて、『お前は どうしてお女

郎になるような身になったんだ。いずれ、深い事情があるだろう』と、きいたところが、その女郎め『わしのうちは、おとうさんが百姓で貧乏だったところへ、不作が三年続いて、地主に掟おきてまい米まいが納められずに、苦しみ抜いたあげく、ついに私が身売りをして、地主に義理を立てることになったの』といったんだ。そして、その女め鼻声になって、『世の中に義理ほどつらいものはないわ』といったんだ」

この話は三上の直接の、彼自身だけに關する露骨な淫いんわい猥わいな話よりも、聴衆に受けがよかった。で水夫たちは、西沢が全力をあげて混ぜつかえすにもかかわらず、三上をおだて上げて、その睦むつじと言ごの全部を繰り返させた。

「そうすると、西沢のど助平め、何というかと思つたら『や、義理ほどつらいものは全くない。そして、そのつらい義理を守るのは貧乏人ばかりだ。義理を守るから貧乏にもなるんだ。私の家も貧乏で、ちようどお前さんくらいの妹がある。その妹も、やはりお前さんのように、このつらい商売をして、私と一緒に信州の親たちに仕送っているんだ。私は妹からのたよりで、お前さんたちが、どんなにつらい境きやうがい界がいを送っているかよく知つていゝ。ま、年ねんの明けるまで辛抱しなさいね。決して短気を起こしたりなんかしないでね』つてやがるんだ。畜生！ ばかにしてやがらあ、そしたら女のやつしくしく泣きながら、

『あなたのようによく物のわかった、親切な人はありやしない。私は、あなたが私の兄にいさんのような気がする』といいながら、何かしていてあとは聞こえなかったが、今度は、西沢め、『おれもお前が、私の妹のように思えてならない』ってやがるんだ。それからもうほんのゴソゴソ話になってわからんから、おれは障子に、指に唾つばをつけて、穴をあけてのぞいてやったんだ。そうしたらお前」と、三上一流の頭脳に映じた、その場の情景を、全くおおうところなく、すっかり、さすがの西沢もいたたまれないほどの、描写をもって、そこに再現してしまった。そして最後に、「よくよくこいつには妹が沢山あって、方々で女郎をしてやがるんだ。そしてまた、妹のように感じる女とどうして、やつはああいうことがでるんだらう。ど助平めだよ、あいつは」とつけ加えたのであった。そして、この点に関しては三上のいうことは真実であった。

わが兄弟たちは、船乗りになるまでに非常に多くの苦しい経験をなめて来ている。そして、小倉などは、一村の運命をになつて志を立てようとしていた。地理的にいっても、社会的にいっても、海は最も低いところで、そこへ流れて来た「人間のくず」どもは、現社会の一切ののろいを引き受けて来ているように見えた。

女郎買いをすることは、船員の常習であるといわれていた。ことに下級船員は、そのた

めに、全収入を蕩^{とうじん}尽するのだと、社会は例外なく考えている。そして、それは、多くの場合事実である。が、それがどうしたというのだ。

彼らも女郎買いをしたくはないのだ。愛人が必要なのだ。だが、今の社会で口のあいた靴^{くつ}をはいて、油だらけの菜つ葉服を着て、足の踵^{かかと}のように堅い手の皮を持った、金をそのくせ持つていない、「海坊主」を、だれが一体相手になってくれるんだ！ いつ海の藻屑^{もくず}と消えるか、いつ片手をもぎ取られるか、いつ、遠洋航路につくかわからない、無細工な「海坊主」どもを、どこの「娘」が相手になるか。

ブルジョアどもは、その娘をダンスホールへ陳列し、プロレタリアの娘を、監獄のよりも高い煉瓦^{れんが}塀^{べい}の取りめぐらされた、工場の中に吸い込んでしまつて、その中の上出来なのを、自分らの玩弄^{がんろう}物^{ぶつ}なる「妾^{めかけ}」にしてしまふんだ。

ブルジョアどもは、人間を、自分たちを除いた一切の人間たちを、字義どおりの「馬車馬^ば」的賃銀^{とれい}奴隷^{どれい}にしたという、本能的な欲求を持つているんだ。

そして、労働者は、生きたまま、何万馬力の電動機によって運転^ひされている「挽^ひき肉器」の中へと、スクルーコンベアーで運び込まれるのだ。

こうして、賃銀奴隷は最後まで、人間でありたいという希望と努力を挽き砕かれて、無

機物か何そのように、ブルジョア文化の路傍へほうり出されるんだ。そして、それは、ブルジョア道路を永久的にするためのコンクリート中の一石塊となって、永久に、道路の一部をなすように、計画されてあるのだ。

だが、今はもうその計画どおりには行かないだろう！ われらに教育がないということは、われらから、教育の機会を掠奪りやくだつしたやつらに責任はあるが、やつらに責任を負わせたってそれで労働階級がどうなるんだ。今、われら自身でわれらを教育するんだ。今、われらは、すべてを自分の手でやって見せようと意気込んでいるんだ。われらを教えわれらを導き、われらの理想を作り、われらの戦術を考え、われらの道徳を定め、人類共同の社会を建設する。それらは皆、われら自身でやるんだ。そしてわれらとは、すべて額に汗して働くものことだ！

一八

伝馬てんまはすべった。そして船長は寒くて、二人ふたりは汗まみれになって、日本波止場へついた。船長は、飛び上がった。トランクも投げ上げられた。

小倉は、纜ともづな綱を波止場に纜もやった。そして二人ともその浮波止場に飛び上がった。

船長は、まだ十分その権力が裏づけられていなかった。船長は、ポケットから、その金時計を出して、機械マツチで今が一時四十分であることを知った。彼は自動車で十五分、二時には家へ帰りつける。で早く、「この油断のならないナラズ者」どもを、本船へ帰してやらねばならなかった。

彼はポケットから、五十銭銀貨を二枚つかみ出して、それが確かに二枚であることを知って、それを、小倉に渡した。

「蕎麦そばでも食つたらすぐ帰れよ！ おそくならんように」そういうと彼は、そのままトランクを持ってスタスタ歩き始めた。

「船長！」と、三上は、思わず叫んだ。

船長はビックリした。危うくトランクを取り落とそうとしたほどビックリした。そして何も考える間もなく、三上は船長の前に立ちふさがった。

「どうしたんだ。わからねえや」三上は唾かむように怒鳴った。

小倉は、静かに、黙って、成り行きを見ていた。「おれはこの場合すべき事を知っているんだ。ものは始まってからでなければ済むものではない。だが、それはまだ始まっているんだ。」

ないんだ！」

「小倉に金を渡しといたから、あれで何か食べて帰れ！」船長は、自分の立っているところが、まだ波止場であることは、非常に形勢を不利にすると、考えていた。——逃げるには逃げられぬわい——

三上は、黙って、船長の前に突っ立っていたが、やがて、身を引いた。

船長はホツとしながら歩きかけた。三上はまた突然その前へ行って立ちふさがった。

——今度は何か起こる——と、船長も、小倉もとつきに感じた。

三上は万寿丸で、一番強力だった。横痂よこねのはじけそうな時でも、二人分の力持ちを、平気でやった男だ。

「忘れちゃいないね」と、三上はうなつた。

「あ、そうか、そうか」と、船長はいつて、またポケットへ手を突っ込んだ。そしてガサガサあわてながら、また五十銭銀貨を二枚つかみ出した。「スツカリ忘れてた」

「まだ忘れてるよ」三上は押つかぶせるようにいった。

船長は、五十銭玉を二つつかんだまま、ブルブル震えながら、そこへ突っ立っていた。早く帰りたいのになあ。チエツ！

「いくらいるんだね」とうとう船長はごまかし切れなくなってきた。

「十円」三上は答えた。

「十円！」船長は、すっかり驚いた。二円出したことが彼にとつては、とても思い切った奮発だったのに。三上は十円を要求するのである。

「それや明日あすでよかないか」船長は明日は一切を解決することを知っていた。

「明日は明日だ」といったが、三上の心中には、今、口から出したくらいでは、とてもはげ切れない激怒の情が、その全身の中に爆発した。

「今夜帰れば途中で凍えるわい！」と、彼は、船長の頭の上から、ハンマーでも打ちおろしたように怒鳴りつけた。

「手前は帰てめえつてかかあと寝る！ おれたちや帰りに凍えるわい！ この汗を見ろ！」

暗やみに見えなかったが、二人は外は飛沫ひまつにかかってぬれ、内は汗でぬれ、かわいたところは、その衣類にも皮膚にもなかった。彼らはそのまま、帰るといふことが不可能であることは、最初から感じたところであつた。その合羽かっぱはもちろん、その仕事着さえもパリパリと凍っていたのである。

船長は十円に非常な執着を感じたが、それよりも彼はやつぱり、その命の方に団扇うちわを上

げた。彼は内ポケットから、十円札を出して三上に渡した。そして、何かいおうとしたが、ハツと口をつぐんだ。

そして、彼はそのまま、波止場を出て、俵の帳場くるまへ行つた。

彼はそのまま、警察へ電話をかけようとしてまたやめた。今夜かけると、おれは家で寝るわけには行かなくなる。それにおれは今夜は上陸してはならないはずなんだ。それはごまかしはついても、とにかく、今夜は家へ！

俵の帳場は、同時に自動車屋を兼ねていた。船長は自動車によって、その家へと宙を飛んで帰つた。そして、途中の計画をすっかり忘れて、自分の家の前まで自動車を乗りつけてしまった。

彼は、暖かい家庭の人となつた。妻は、彼がおそくなつた事情は、「水夫の一人ひとりで三上という悪党がワザとそうしたのであって、おまけに主人から十二円を強奪した。そのために主人は一時身が危険であつた。主人は、いつでも、家から出て行くと、まるで、強盗殺人の中へシヨンポリ置かれているようなものだ」と思い込んでしまった。そのくせ彼女は、いつも今まで主人の口から「おれは船中で一番えらい地位を持っていて、船員ならどんなやつでもフン縛ることまでできるんだ。それで船ではおれは、いわば陸でいう王様のよう

なものだ！ おれは自由に手足のように船員を使うんだ。そしておれがいないと、あの大きな汽船が、まるで動くことができないんだ。とまれ、万寿丸では王様だ」と聞いていたのだ。で、今は、そのどちらでもあるのだろう。「船の中には、まともな人間としては主人だけだろう。あとはナラズ者がそろっているのだろう」と、考えた。

二人は床の中で夜の明けるまで話した。

一九

三上と小倉は、水からはい上がった犬のような格好で、サンパン小屋の前へ行った。そこは、ルンペンプロレタリアがサンパン押しとして、虱しらみのように、ウヨウヨ小さな家の中に詰め込まれていた。そこは、昼も夜もなかった。そこに集まっている者はすべてが、永え劫いこうの昔から、無限の未来まで、そこで寝ころんででもいるというような感じを与えた。彼らは、あらゆる悪徳と、自暴自棄と、そうして飢餓との頂点から、いつでも、決して離れたことがなかった。

死にかけて犬にも蚤のみやだにがついているように、飢えたる彼らの周囲にも、飢えた小売

り商人が大福餅もちや巴焼きともえなどを、これもほとんど時なしに売っているのであった。

その夜は、それらの夜店も見えなかった。

三上と、小倉とは、その凍寒と、飢餓とから逃のがれるために、旅籠屋はたごやか、飲食店かをさがさねばならなかった。彼らは、それ以上、寒さにも飢えにも堪たえ切れないように感じた。彼らは、そのよく知った地理によつて、夜おそくまで、あるいは徹夜でも営業する飲食店が、どの辺にあるだろうとの見当はついていた。

それは彼らが今さまよつている海岸付近か、でなければ遊郭の付近であつた。

彼らは、大通りに出た。そして十五、六間も歩いた時、その横丁に港町独特の飲食店がまだ起きているのを見いだした。二人はすぐ、そこにはいった。二人の異様な風態も、その凍えたぬれたところなども港町の飲食店はなれていた。幸いに、二人は、その一室へ、そのズブぬれの靴を脱ぎ、その着物をかわかしうることになった。二十七、八になる女中がすぐに火鉢ひばちへ火を入れて持つて来た。

「どうしたの、ちよいと、今ごろ、今入港したの！ そうじゃない？ まあ！ 随分ぬれてね。若いからよ、ホホホホ。脱いでかわかしなさいな。ね、私、着物を持つて来て上げるわ、泊まってくんでしよう。もちろんだわね。ホホホホホ」

彼女は全くの親切からのようにそういった。そして、下へ降りて行った。どてらでも持つて来るのらしかった。

三上はもちろん喜んだ。そして彼はもちろん泊まる気でいた。小倉も一人ひとりで帰るわけには行かなかった。それに彼は三上の今夜の事件を、どういうふうに処置をつけるか、考えねばならなかった。——船長は明朝になったら、三上を懲戒下船命令を発して、一年間あゝるいは三年間ぐらゐは乗船不可能にしてしまふだろう。それだけでなく、それだけで済めばいいが、事によると、きょうかつ恐喝取財ぐらゐで告訴するだろう。これらについても自分としては何とか考えをまとめて置かなければならない。それにとにかく、こんなにズブぬれのガツガツの飢えではしようがない。そこで、二人は腹をこしらえることを考えた。

「ねえさん、おそくなつて済まないがね、もしできたらすきやきがやりたいんだがね。寒いんだから、すきやきでないとしても暖まらないからね」と小倉は注文した。

「ええ、できるわ、きつと、あなたの事だから。ホホホホ、お銚子ちょうしは？」と立ちながら、彼女は聞いた。

「酒を持つて来るんだ」三上が受けた。

「ホホホホ、一切合財皆もちろん、——だわね」と唄うたにしながら、下へ注文を通しにお

りて行つた。

二人は、どてらに着換えて、その着てたものの全部を、柱にかけた。

彼らは人が恋しかつた。ことに女が恋しかつた。どんな動機からであろうとも、彼らに優しい言葉をかけてくれる女性は、この地上に、もし生きていればその母か姉妹だけであつた。

けれども、彼らは、それらをまるで失つてしまつていたか、まるで知らなかつたか、または、それをはるかに遠くへ残して来ているのであつた。

優しい女性！ それは、彼らには、何物よりも貴いたつと宝玉であつた。一切の歴史からしいた虐げられて来た、哀れな弱い女性！ 彼らが反抗する必要のない、彼らによつてまでも愛護されなければならぬ、虐げられたる女性、それは、虐げられさいなまれて来た労働階級と、よく似た運命を持つていた。

彼らは女性を慕つた。そして、それが娼婦しょうふと淫売婦いんばいふとに限られてあつた。女の中でも最も弱い階級と、男の中で最も虐げられた階級との間には、ブルジョアがそれらに對する時と違つて、どこかに共通な打ち解けた点があつた。それは共同の敵を持つている味方同志であつた。

表面的の關係は買ひ、売つた、ことになつても、彼らにきわめてわずかに残された人間性が、それを、人間的に引き戻す機会もあり得た。そして彼らはどちらも、プロレタリアであつた。

荒みにすきんだ心に、落ちる一滴の涙は、どんなに悲しいものであるか。

女はやがて牛肉を鉢はちに並べて持つて来た。そしてそのあとから今一人若い二十二、三の女中がお爛かんのついた銚子しやうしを持つてはいつて来た。

女がいたり、酒があるということは三上を有頂天にした。彼は一人ひとりでしきりに飲んだ。女たちにもしいた。少しは彼女らも飲んだ。

「どうしてあなたは少しも飲まないの」と、若い方が、小倉にもたれかかりながらきいた。

「その代わり食つてるだろう」

「だって、私たちもいただいてるんですもの。少しは飲むものよ、男つてものは、ね」

彼女は小倉きが生まじめで、肉ばかり食つてるのを見て、少し陽気にしてやろうと考えたらしいのだった。

「ところが、僕は酒が飲めないんだ。船のりらしくもないだろう。でもやつぱり飲めない

んだ。虫がきらいというんだらうね」といいながら、小倉は肉や葱ねぎなどをつつきながら、頭は纜もやいっ放しの伝馬てんまのことと、三上対船長との未解決のままの問題との方へばかり向いていた。

で彼は、三上が、しきりに女をからかったり、例の変態的な性格でいやがらせたりしながらも、小倉の方に時々探るような目を注ぐのに気がつかないのだった。

三上は、やはり、船長との一件で小倉の意見が聞きたかったのであったが、それよりも、彼は、その場の喜び、形式だけであるかもしれない、事実それに違いないところのその浅い喜び、ほとんど通常の陸上の人から考えると嘔吐おうとを催すかもしれない、その女たちの風体、態度、その他一切の条件にもかかわらず、それを長い間そのため一切を捨て探ねたずあぐんだ冒険者が、金鉞でも発見したかのように、その喜び、その楽しみから、一步も足を踏みはずしたくなかった。実際三上は、もし、ほんとうに三上を愛する女があったら、彼はその女のためにどんなことでも虚心平氣にやってのけたに違いない。彼は、生まれてから、すぐにその生うみの母親に死に分かれて、それっ切り、人間に愛があるということはおろか、子供に乳があるということすらも知らずに育ったのであった。彼はきわめて幼い時から、海へ出て、漁夫の手伝いをした。そして自分の食う分は五つぐらいの時分から自

分でかせいだ。そして彼は小学校へ行く代わりにかつおぶね鯉船で太平洋に乗り出した。沖を通っている、山のような船の中に「洋服」を着た人間が働いているのを見て、「自分も洋服を着て働きたい」というので、鯉船を捨てて、汽船乗りになつたのであつた。彼は、だれからも、ほんとに愛されたことのない人間であつた。まただれもほんとに心から三上を愛する気にはなれないだろうと思えるほど、彼は異様にひねくれていた。そのくせ、彼は、「だれかがほんとおれに親切にしてくれたら」と、どんな時間にも思わぬことはないのであつた。従つて、彼は、西沢が女郎に愛されたという話を聞くと、きつと、彼はその女の名前をきき出して、次航海には、スーツと一人ひとりで、「愛」とはどんなものかを探りに行くのであつた。三上のこの心の秘密は、だれも知らなかつた。であるから、彼は変態性欲者と、その真実の「愛」を求める原始的巡礼の状態を名づけられたのであつた。で、彼は自分が、他にとつて、決して真摯しんしな愛に相当しないことをさとして、自らもジョーカーとなつたのである。

三上は小倉を盗み見しては飲み、かつ、その年増としまの女を捕えて悪ふざけしていた。が、小倉は黙つて食つていた。小倉の相手の女はとりつき端はがなくて、困つていた。三上が便所に立つて、相手の女も続いて案内に立つたあとで、小倉のそばにいた若い女は、「どう

してあんたはそんなに黙ってるの、何かおもしろくないことがあって？ も一人の人はあんなにはしゃいでるじゃないの、それとも、もうあんたは眠いの？」とその膝ひざにもたれながら小倉にきいた。

「あの男はね、かわいそうな男なんだよ。あの男の事を僕は心配してるんだ」と小倉は答えた。

「どうして、あの人がかわいそうなの。私ならあんたの方がかわいそうだわ」と女は、しんみりといった。

「陽気に見えたからって、その人間は何もかもが苦労がないわけじゃないだろう。あれはね、さびしくてたまらないからはしゃいでるんだよ。それにあの男にはね、苦労があるんだ。私もあの男のために一つの苦労を持つておるんだ」と小倉は女が、しいて彼のきげんをとるに及ばないことを暗示しようとした。

「まあ！ あんたは若いおじいさんね。あの人より若いんでしょう。だのに息子の事むすこでも気にするように、あの人のことを気にしてるわ、でも、あなたは、いい人ね」と、だんだんまじめになりながら、女はそれでも、「ひやかすのよ」といった調子を含めていった。「どうしたんだ。大変おそいね、便所が」と、小倉は女にきいた。

「あら！」と女はわざと驚いて見せて、「もうおやすみになったんだわ、あなたまだかわや廁まいらつしやらない」

「もう幾時ごろだろう」

「三時よ、もうじきに。やすみましようよ。ね」

「だけど、僕今夜じゆうに船にあの男と一緒に帰らなければならぬんだがなあ」小倉は困つたようにいつた。

「なぜ？ 私がいやなの。だったら私代わつてもいいわ。そんなこといわないでね。後ごしよ生うだわ」

女は、小倉が自分をきらつて駄だ々だをこねるんだと思つて、困り切つていた。

「ねえさん。間違つちやいけないよ。僕、ねえさんが、きらいでなんかありやしないんだよ。ただ、船長がね、今夜じゆうに船に帰れとつて、帰つちやつたんだよ。それにね、船じゃあ、みんなが、この暴化しけだろう、だから気づかつて待つてるだろうと思ふんだよ。船長のいうことは、僕はどうでもいいけれど、船にいる僕たちの仲間はね、寝ずにいちや気の毒だろう。だから、あの男と二人で夜の明けないうちに帰りたいと思つてるんだけどね」

「じゃ、あたし、そんなわけならあの人にきいて来て上げますわ。どうなさるかかってね。だけど、ずいぶんしけてなくなつて？ あぶないわね」といいながら障子を明けて出たが、それを締める時にちよつと振りかえつて、「ちよつと待つてらっしゃいね」といつて、三上の方へと行つた。

「無産階級には共通な感情がある」と小倉は思うと、急にセンチメンタルな気持ちになつて、その女が歸つて来たらしいいきなり熱いキッスを与えてやろうと思つた。

やがて女は歸つて来た。そして、小倉のそばに遠慮がちにすわりながら、

「ねえ、あの方、三上さんてえの、あなたが小倉さん、ね、小倉さん、三上さんはね、あなたを巻き添えにして済まないけれどね、とても今夜は歸れないんですつて、明日あすになつたつて、どうだかわからないんだなんていつてよ。そして、済まないがとにかく明日の朝まで待つてくれるようになっていつて、そのまま寝てしまいなすつたわ」

「ああ、いいよ。それじゃ僕も泊まらせてもらおうか。ねえさん。僕はね、ねえさんがきらいでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたいくらいだよ。だけど、僕にはね、僕が愛していると同じように僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、ねえさんは、帳場の具合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語に、

ねえさんのほんとの恋人の話でも聞こうよ」といって、さびしく気の毒そうに小倉は笑った。

「まあ！」と立って床を延べようとしていた女は、急に小倉の膝ひざの上につつ伏ぶした。そして泣き入るのだった。小倉はびっくりした。

「どうしたの。一体、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だって、ちっともかまわないから、泣くのはおよしよ。ね」

小倉は女を起こそうとした。女は起きなかつた。そしてなおも泣き続けるのだった。

「およし、ね。泣くのはもうおよし。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければわからない。泣くほどの事があるんだったら膝とも談合つてこともあるから、僕にでも話して気が紛れないこともないかもしれない。とても力にやなれまいけれど、もし役に立つことがあつたら、役に立つから、泣いてばかりいないで、話してごらんな。ね、僕明日の朝早く帰らなきやならないんだからね。また二、三日か四、五日は碇ていはく泊はくしてるから、毎日にも来るから、ね。サア床を敷いておくれ」といって、小倉は女をその膝の上から抱かかえ起こした。

「ええ、今、床を敷くわ、ちよつと待っててね、片づけるから」ハンケチで目を押えてさ

びしそうに彼女はそこらの食べ散らしを片づけ始めた。小倉も彼女に手伝って、七輪^{しちりん}などをかたわらへ寄せた。

二〇

寝床はそこへ敷かれた。それは一つであつた。枕^{まくら}も男枕が一つツ切りであつた。

「どうしたんだい、お前さんはなぜ泣いたりしたんだね」と小倉は、そのまま床の中へもぐり込みながら、気の毒そうに聞いた。

「私はね。この家へ来てから、あんた見たいな人に会つたのは初めてなの。初めの間は、私もあなたを『お客』だと思つたの」といいながら、彼女は枕^{ひばち}もとの火鉢^{ひばち}の前へ、生^{きむす}娘^めがするように、つつましくすわって、はにかみながら話した。

「だけど、だんだん話したり、聞いたり、見たりしたりしてうちに、あなたは船乗り見たいじゃないように思えて来たの。私ね、こう思つたのよ。この人はきつと間違えてここへはいつたんだ。そうでしょう。ほんとに牛肉のすきやきだけしか食べられないところだと思つて来たのでしよう。そういう人の前へ出ることは私たちには恥だとはあなたは思わ

ないの。相手が野獣であるときだけ、私たちだって野獣にもなれるのよ。私たちは、何でものろってやるわ、何でも、神様や仏様なんぞ、とつくの昔に、のろって、私はそばに寄せ付けないようにしてるわ。けどもね、私たちの家に、私たちの肉以外のものを、まるで坊っちゃん見たいな、素直な気持ちで求めに来たあなたには、私たちの気持ちはわからないでしょうね。

私たちはね、あなたのような人を見ることはないのよ。監獄にはいつてる女の人が、男の人を見ることよりも、もつともつと、ずっと、私たちがあなた見たいな人を見ることの方が少ないのよ。それはね、男の人は、皆獣けだものだからなのよ。

ええ、全く獣なのよ。私はそう断言できてよ。だけどね。それや男の人の罪でもないんだわ。それはね、神様や仏様の罪なんだわ。そうでしょう。ね、自分で人間を作って置いて、自分でこれはいいあれは悪いと決めて置いて、そして、自分の作った人間を、自分の作った罪悪の中へ、まるで 陥おとしあな 穽なわにでも落とすようにして、はめ込んでしまうのは、それや神仏の責任だわ。だから、私のこわいのは、神仏じゃないの」

「じゃ何がこわいんだね」小倉は眠くてたまらなかつたが、女の珍しい言葉について興奮させられて起きていたのだつた。

「私寒いから、あなたのそばへはいつてもいいでしょう。ね、ただはいるだけなのだから、ね、いいこと」

といいながら、女は帯も解かず小倉の寢床へはいつて来た。そして床のすみに小さく黄こ金虫がねむしのように固まりながら、

「私たちはね、ほんとに心から『愛そう』と思う人を見つけないのよ。」

私たちが、第一、選より好みする事がいけないって、あなたも考えて？ 私たちだって、何かを見分ける力を持つことが、悪いってことはないでしょうね、よし悪くしても、それはあるものなんだわ、だから私たちは、心から人を愛するということはできないのよ。だけれどもね、それは私たちの愛するだけの『価値』のある男が、この世の中になんかいないことじゃないのよ。そういう人もあるのよ。ええ、そういう人もあるのよ。そしてね、随分しやく癪やくにさわることはね、それは全く腹の立つ、癪やくにさわる生意気なことなのよ。そういう男はね、私たちが、ほんとにしんみりして、その人と愛し合いたいと思うような、そういう人はね、いつでもきつときまり切つてばかなのよ。ばかでのろまで、ぼうつとしてるの。でそういう男はね、私たちが、その男を愛してることことがわからないのよ。そしてまた、その男は随分ばかね。私たちが見たいな女は、男性を愛することは職業的以外にできないと

でもいったように、無関心なのよ。全く、ばかにつける薬つてもものは昔から、どこにもなかったのね」

彼女は、まるで夢遊病者か何かのように、天井を向いたつきり、その大きく開いた目を、自分の頭蓋骨すがいこつの内部でも凝視しているように、じつと据えて、熱に浮かされてるように、早口に、熱心に、そして、一人ひとりで小火ぼやを消しでもしてるようにあせって、あわてて話した。そのくせ、彼女のからだはそこへ鋸びようでねじつけられでもしたように、動かなかつた。

小倉は、よく話がわかつた。そして、自分が、気取り屋でばかであることを、十分にこつびどくやつつけられていることも知っていた。けれども、それにしても、「何うめいという聡そ明な女だろう」と、彼はもうすっかり眠けを奪われてしまつて、女の言葉の方向の動くがままに、その疲れ切つた意識を引きずり回され、血みどろにされるのであつた。

「そしてね、そんなばかげたことは、あるはずがないのだけれどね、私たちも、また、ばかなのよ。なぜだと思つて？ それはね、私たちはいつでもきまり切つてばかだけに惚ほれるのよ。そのばかはね、いつでもきまり切つて、戸惑すずめいた雀すずめのように、間違つて飛び込んで来るだけなのよ。ホホホホホ、ね、小倉さん、あなたはご自分が賢さとしくつて品行のいい、船のりには珍しい、堅い、善良な、そして一つあるのよ、人類のためになる人間だと思

つてるのね。ね、そうでしょう。そうよ、そうよ、私にはね、あなたが自分で知らないことまでわかるんだわ。だから、まあ聞いてらっしゃい。だけどね、小倉さん。あなたは、それだけじゃ三上さんよりも、まだだめな、役に立たない穀つぶしよ！ わかつて。世の中にはね、この汚れた世の中をすこしもよくしようとしなくて、ますます悪く、腐らせて行くためにだけ努力していて、それでいて自分は点の打ちどころのない善良な人間だと思ってる人が沢山あるのよ。帽子をキッチンとかぶって、几帳面な、ガキガキと歩いて、一銭も人から借り倒さないで、乞食には、きつと一銭——一銭より少なくも多くもないことよ——それっぱかしかだけやって、女といえ、おかみさんだけしか知らないで、それも、まるで家の雑ぞうきん中と同様に無趣味に乾かわかし上げて、ね、若いうちから、決して女郎買いなどしないで、その代わり、小倉さんは航海学を読んでるでしょう。そして、高等海員の免状を受けようともくろんでるわね。勉強してることね。あなたは。ね、いいの、あなた見たいに、勉強して、そして、階段を上がるうとして骨を折るのよ。だけどね、その階段はね、滅亡への階段つてのよ。わかつて。それをうまくのぼっても、その階段自身が滅亡する運命になつてるし、それがまたある間は、その階段をささえる土台の方で、無数の人間が失われる滅亡の階段つてのよ。その階段つてのよ、一切の原もとなのよ。ね小倉さん。実は、

ありもしない幻の階段のために、実在してる人間が、永劫えいこうに苦しむってことはいいことなの。あんたにはわかるはずだわ。あんたは、その階段からまるでその焼けつくような目を放したことがないんだもの。それは、あんたにはわからねばならないんだわ。あんたは、私や、その他ありとあらゆる不幸な、あんた自身も、その不幸者の第一人よ。よくって、その沢山の不幸な人間をもつと、もつとふやすために、あんたは、大骨折りで勉強して、そしてひとかど善人ぶってるのよ。ホホホホホ、とうとう、私、あんたを、大ばか者にしてしまったわね。ご免なさいね。だけど、それはほんとに、あなたは大ばかなのよ。ホホホホホ」女は全速力の船の、スクルーシャフトが回転してるようだった。

「ああ、それはほんとの事だ！」と、小倉は口走った。

「僕は、社会の、秩序という大きな看板に隠れて、自分の利欲のみを得ようとしていた。それは全くだ」

「ほうら、白状してしまつたわ。あなたはね。高々船長ぐらいになって、三上さん見たいな人をいじめて、ご自分はまた、自動車か何かに乗つたもうろくおやし耄碌もろく爺おやしからわけもわからないことをいっていじめられたいの。およしなさい。仰向つばいて唾を吐くのはやめるものよ。だけど、あんたが船長になると、今度は、ほんとに純粹な生娘が、あんたに惚ほれてよ。そし

て、船が着くたんびに、あんに、ダイヤモンドの指輪を『愛の表象』としてねだることよ、ホホホホ。それは、あんに幸福をもたらすわね。私みたいな、ええ、私は淫売いんばいよ、それが、どうしたつての、小倉さん、あなたは淫売よりも、一生涯を通じての娼妓しょうぎがお好きな一人ひとりでしょうね、ホホホホ。だけど、あなたは、さつき『僕が愛してると同じように僕を愛してる女がある』っていったわね。私、私、私だつてだれにも劣らない愛を持つてるんだわ、だけど、私は前科者なのよ。ホホホホ。世の中の人間は、自分を縛つてる鉄の鎖が、人をも縛つてると思うと、安心して自分の鎖が軽くでもなるんだと見えるわ。それはね、奴隷どれい道德の鎖よ。因襲の鎖つてのよ。だけどね、小倉さん。私には、そんなことはないのよ。

私そんなこと、夢にも思わないんだけど、たとえばね、もしか、私があんたを愛したくつても私が淫売ならその資格がないとでも、あなたはいいいたいだわね。いいえ、そうよ、ま、黙つてらっしゃい」彼女は、小倉が何もいおうとしてもいないのに、あわてて彼のいうのをさえぎつた。

「私があんに愛させてくれるように、頼む資格もないと思つてるのね。だけどね、小倉さん、私は幻の階段を追うような利己主義者は、私の方でいくら頼まれてもいやなのよ。

それは意気地なしの考える生き方なんだもの。それは私たちが、こんな恥ずかしい商売をするよりも、もつともつと恥ずかしい、墮落した、外道のやり口よ。

だけでもね、小倉さん、もしあんたが、そうでなかつたら、もしあんたが立派な人間で階段なんぞ認めない人だったら、私は、私は、あんた見たいな人に初めて会ったことを白状してよ。そして、私は、あんたを、世界じゅうで一番強い、弱い者の味方としてなら、私はあんたを愛したいの。だけでもね、何だつて私はばかなんだろう。あんたにはいい人があつたのね、私、私、私だつて、私はね、小倉さん。あんたが高等海員の試験を受けて、船長に立身するように、試験を受けてでも、願つてでもなく、この商売に、むりやりほり込まれたんだわ。私のいうことがわかつて、ホホホホホ。私のいうことはね、こんな商売しても、それは私の知ったことじゃないつてもりなのよ。あなたが船乗りをしてるのも、私がこんな汚らしいことをしてるのも、性質は同じなのよ。そしてね。私の方が、ほんとうは、もつと尊敬してもらわなければならぬほど苦痛な部分を引き受けるのよ。わかつて？ 人間が生きるためには、どんな苦痛でも忍ぶもんだわ。生きるためには、より早く死ぬ方法までに、飛びつくものよ。

私なんぞ死ぬまでに、ほんとに自分のしたいと思つたことの、反対のことばかりさせら

れてとうとう死んじやうんだ。自分の思う通りになることは一つだつてありやしないんだわ。私はね初めはね、あんたをただのお客と思つたの、そして次には坊っちゃんと思つたの、その次はほんとに物のわかつたおとなしい人だと思つたの、そしてね、今ではね、あなたは、そうね、何だろう、何といえはいだらう、私のおとうさんだわ。私を産んだ、私の知らない、ほんとの私のおとうさんだわ、ホホホホホホ……私おとうさんに……」

二一

その夜は全く悪魔につかれた夜であつた。人間の神経を鑊こてで焼くように重苦しい、悩ましい、魅惑的な夜であつた。極度の歓びよろこと、限りなき苦しみとの、どろどろに溶け合つたような一夜であつた。

三上にも、小倉にも、それは回視するに忍びないような、各おのおのの思い出を、その夜は焼きつけた。それは永劫えいごうにさめることのないほどの夜であるべきであると思われた。それほどその夜は二人ふたりにとつて大きな夜であつた。

人間の一生のうちに、その人の一切の事情を、一撃の下もとに転倒させるような重大な事件

があり、社会においては、全社会を聳動^{しょうどう}せしめるような大事件がある。そして、それらの事件が必ず夜か昼かに行なわれ、その事件とはまるで関係なしに、夜になったり、朝になったりするとは、個人として、社会として、その事件に直面したものに、ばかげた、不思議な感じをきつと起こさせるものだ。中には「ああ、おれにとって、あれほど重大なことがあったのに、どうだろう、夜が明けた」と思わせるのである。

三上と、小倉とは、各^{おのおの}が、そんなふうな感じをもつて、朝の六時に起きた。二人ともは、れぼつたい目をしていた。

一夜は明けた。そして、重大なる事件は未解決のままに、夜を持ち越して、明けたのであった。それは、一夜を持ち越したために、事実の形を千倍もの太さにしてしまった。一夜——五時間——伝馬^{てんま}繫留^{けいりゅう}——水夫睡眠——何でもないことであつた。それは全くきわめて平凡な詰まらないことであつた。

ところが、その舞台を、社会から、万寿丸にまで縮めると、問題が由々^{ゆゆ}しく大きくなるのだつた。

とまれ、小倉は「階段」のことは忘れたにしても、一応は、本船へ帰ってから、万事を解決した方がいいと考えた。ところが、三上は、それはばかなやり方だ、と考えた。そこ

に、三上と小倉との差違があつた。

二人はその家を出た。そして、海岸を伝馬のある方へ逆に歩きながら、その事件の締めくくりについて考え合つた。

「おらあ帰らんよ」と三上は、さつきからいい続けていた。

「でも帰らなきや様子がわからないじゃないか」これは小倉の言い草だった。

「様子はわからんでもいいよ。あの伝馬をたたき売るか、質に入れるかして、おれたちはどつかへ行つた方がいいよ」三上は自分の計画を初めて口に出した。

「でも、そいつあ困るなあ。僕は海員手帳が預けてあるし行李こくりもあるし、そいつあ弱るよ」小倉は全く困るのだつた。彼は船長免許を取る試験のために、二度も沈没したりして、それに必要な履歴が実地として取つてあつた。それは海員手帳に記入されてあつた。

「だから、さようならつて僕がさつきからいうのに、いつまでも君がぐずぐず、ついて来るからよ。君はサンパンを雇つて帰れ。そして、三上が伝馬を盗んだとでも、何とでもいつて、置けばいいじゃないか。僕はこれを売つて、どこかへ行くんだから。行李や、手帳なんぞほしくもないや。早く君は帰れ！」

三上はクルツと反対の方を向いて、棧橋の方へ歩を返した。小倉も無意識にそれに従つ

た。

「だって、すこしも君だけが悪いことはないじゃないか、大体船長が無理なんじゃないか、だから、帰ったって何ともないよ。帰った方がいいよ」小倉は、しきりに穏便な方法をとることを三上にすすめた。

「何でもかんでもいやだよ、おれは。もし帰る気になったら、出帆間ぎわに帰る。それまでおれは隠れてて船の様子を見ることにするよ」

彼はこういつてズンズン歩いて行った。

小倉は夢でも見続けているように、ボンヤリしながら、三上のあとから無意識に歩いた。三上は波止場に来て、昨夜つないだ船の伝馬にヒョイツと飛び乗った。小倉も乗ろうとすると、手を振って「みんなに、出帆間ぎわにこれ——といって伝馬を指さして——で帰るからと——といってくれよ。なあ」といいながら、グーツと波止場を押し、離れてしまった。

小倉は失心したようにたたずんでいた。

三上は、その五人前もあるような腕に力をこめて橋の下をくぐって見えなくなってしまう。

「なるほど、三上は帰れないはずだ。船長を脅かしたんだもんなあ、それを帰れといって、昨夜一晩泊まった、おれは何という白痴だったんだ。三上は、たとい理由があろうがあるまいが、どのみちやツつけられるに決まっていたんだ。三上は、伝馬を質に入れるなんて、やつ一流の計画を立てて行つちやつた。が、それがどんなこっけいなやり方であろうが、やつがのこのこ船へ帰るよりははるかにましなこつた。知つていて、おとしあな 陥穽に首を突っ込むにや当たらないもんなあ」小倉は行く先を忘れた田舎者のように当惑げにそこへ突つ立っていた。彼の役割は、この上もなく奇妙な、こっけいないいようのない不思議なものになつて来た。

「船の伝馬に乗つて来て、サンパンをやとつて帰る！ 一体どうしたんだ。そしてこの責任は、三上と僕とに、あるんだからなあ。どうなるんだ、一体。ままよ！ 帰つて見れやどうかなるだろう」

彼はサンパンをやとつて、万寿丸へ行くように頼んだ。

「万寿はいつはいつたんだい」と虱小屋しらみから、はい出した兄弟がきいた。

「昨夜おそくよ」彼は答えた。

「けさここへもや纜つてあつた伝馬は、万寿のじやなかつたかい」と、船頭はきいた。

「こいつらも知ってら。へ、知ってるはずだ。七時だもんなあ。だが、一体昨夜ゆうべのことは、ほんとにこのおれが経験したこつたろうか、それとも、……全く不思議だったなあ」小倉は昨夜の女のことを考えていた。彼女は賢いそして「純潔」な女だった。

二二

小倉は万寿丸へ帰った。当番のコーターマスターは、梯子はしごをのぼり切ると、すぐに、小倉を取っつかまえた。

「どうしたんだい。心配したぜ、昨夜は、流されやしなかつたかって。そして伝馬はどうしたんだ、やつぱりやられたのかい」

船に残った者は、なるほど一切の事情を知らないはずであった。そして、サンパン止めどくらいの荒れた夜中のことだから、伝馬をやられたために、夜帰れなかつたんだと、船員たちは勝手に想像して気をもんでいたのだった。「伝馬は、船長を上陸させて置いて帰りに、橋をくぐる時に、打ぶつつけて、こわれた——それほど古くも弱つてもいないんだが——といえ、船員たちには、どうにかこうにか、三上が帰って来ないで、サンパンの船頭

がしやべらない限りわかりはしないんだが、さてそれでは三上はどこへ行ったということになるし、何も隠し立てする必要もないから、すっかりぶちまけた方がいいだろう。それで悪かったら、またその時のことだ」と、小倉はとっさの間に考えた。

「ナアに、やられやしないんだよ。妙なことになっちまって困ったんだよ」小倉はほんとうに、今そのことについて、口を切つて「実際これはおれの考へてるように簡単に片のつく問題じゃない、全く困つたことだ」ということを痛切に感じた。

「どうしたんだ。一体、そして三上は？」

「三上が伝馬で、けさ帰つて来てるはずなんだよ」小倉は、三上が伝馬を売り飛ばすか質に入れるかするといった、その、とても実現できそうもない、彼の計画だけはいまいと決心した。

「冗談いっちゃいけない。だれも帰つて来やしないぜ」

「それじゃ、おもてでよく、すつかりその事情をくわしく話そう。ちよつと困つたことが起こつたんだ。船長と三上とがけんかしたんだ。それを、今おもてで話そう。皆いるかなあ」小倉はこういいながら、もうおもてへのタラップを降りて、駆けて行った。

おもてでは、ボースンから、大工、水夫たち、全部が、いつでも入港のできるように、

準備を整えて、船長の帰るのを待っていた。それよりももっと、三上と小倉との消息について待ち切っていた。

「どうも済まなかった。ただいま」と叫びながら小倉はそこへ駆け込んで来た。

「どうしたい三上は」

「さては女郎買いをしやがったな」

「伝馬で帰ったのかい」

「うまくやってやがらあ」

各人が考え、想像していたことの最初の言葉が、彼のまわりに、棧橋から船に落ちる石炭のように轟然と、同時に飛びかかった。

小倉は、かいつまんで昨夜の困難な航海から、船長の態度から、三上の行為から、宿屋へ——曖昧屋あいまいやとはいわなかった——泊まって、凍りついた服をかわかして、けさまでかわくのを待っていたこと、三上は、黙って、宿を先へ出て、宿の者へは一足先へ船の伝馬で帰るからといい置いて行ったこと。あわてて飛んで出て、波止場へ来たときには、もう三上は影も見えなかったこと。船長はどんな措置をとるか、打っちゃってはとも置かないだろうということなどを、簡単に、しかし要領を掴まんで話した。

セーラーたちは黙って聞いていた。そうして、三上が一足先へ出て、まだ帰って来ないということ、小倉ほどに心配しないのみならず、むしろそれをひどく痛快がった。

「いつそ本船へ乗って逃げたらおもしろかつたな」などと茶化しさえした。一向だれもその事に対して「こうしたらいいだろう」という意見を持ち出す者はなかった。だれもが、その単調でない、奇抜な話を聞いて、その話と、事件とに満足してしまった。

小倉はここでもまた彼が事柄をあまり簡単に見過ごしていたこと、今では彼一人^{ひとり}だけが、当の責任者に転化したことを痛感した。

小倉は、非常に善良ではあるが、意志の弱い、そしていわゆる冷静な、分別のある若者だった。それで従っていつでも「事なかれ主義」であった。その逃避的な彼が、旋風の事件の中心に巻き込まれたのだから、たまらなかつた。彼は何をどうしていいか、自分自身が何であるか、一体全体どうしたらいいんだか、さっぱり一切がわからなかつた。

だれもがそれまで打ち明けてもいないのに、いつでも、その人間の最も重大な秘密なところになって、自分の手で収まりがつかかねそうになると、だれもが、決して普段それほど親密でもないように見える、藤原へ、相談を持ちかけるのがきまり切った例になっていた。小倉も、この例によって、藤原へ意見を求めようと決心した。

藤原は、今まで自分が中心になっていた、その話から、避けて、一方のすみで、黙ってその事件の話を聞いていた。そして、煙草たばこを「尻しりからヤニの出る」ほどに、やけにふかしているのだった。

「藤原君。君はどうしたらいいと思うかい」と、小倉は藤原と向かい合って腰をおろしながらきいた。

「よくはまだわからないけれど、僕の知ってる範囲では、君にも、三上君にも何らの責任はないと思うよ」と彼は答えた。

「そうだろうか、だけど、三上は十円無理じい見たいにして借りたもんなあ。それに、昨夜うべは帰らないで、今日は伝馬きょうまをどつかへ持つてつちやつたしね。僕は今、一切が僕に責任がかかって来やしないかと思つて心配してるんだよ、そら僕には責任があるんだけどね。どうしたらいいだろうか、船長が帰ったら、すぐにあやまりに行ったらどうだろう、ね」

小倉は途方に暮れていた。彼はその事柄が帳消しになるためなら、今から裸になって、海へ飛び込めといわれれば、そうすることの方をはるかに喜んで、かつ安心したであろう。彼は「これほどの問題が、まだ片づかない」という、宙ぶらりんの状態であることを極度に恐れた。彼は、この問題が、「いつかは現われるが、まだいつかそれはわからない」よ

うな状態で、一、二か月も続くとすれば、彼は自分と三上との二つの行為をくるめて、道徳的にも、法律的にも——もしありとすれば——物質的にも、一切合切を自分で責任を背負った方がどのくらい楽だったかしれなかつた。

「おれはもう、これが三年越し引き続いた事柄のように考えられる」小倉は、ヒステリーの女のように伝馬の事以外から頭を持ち出すことができなかつた。

「船長にあやまりに行く？ それもいいだろう。だが、お前、何を一体あやまるつもりなんだい。雇い入れもしないボーイ長の負傷を打ちやらかशीて、自分だけは、夜中に上陸したことをかい。難破船のそばをスレスレに涼しい顔をして通過したことをかい。あやまる理由と、事柄とがあるなら進んであやまるがいいさ。だがあやまることのない時にあやまるのは、自分の正しさを誇示することになるか、または、単なるオベツカに止まるよ。そんなに君あわてることはないだろう。事の起こりから、終わりまで、冷静に考えて見たまえ。勝敗は別として、理由の正邪はどっちにあるか、すぐわかることじゃないか。港務の許可なしに夜陰に乗じてコツソリ上陸したり、検疫前に上陸したりすることは、よし、どんな風なぎの晩の宵の中であつても悪いことに相違はないだろう。だから順序として、その点からまずあやまるべきだろうよ」

藤原は、まるっ切りおれとは違った見方をしてる。だが、あれも一つの見方だ。随分乱暴な見方だが真実の見方だ。どうだろう。ほんとうに、ほんとうのことをやってもかまわないだろうか。と、小倉はまだ考えを決め得ずにいるのだった。

「藤原のいうことは、昨夜ゆうべの女のいったところと、どこか似てるところがあるぞ」と、小倉は、この時フト思った。「あの女は宝玉だ！　だが、今はそれどころじゃない、だが、あの女がおれのことを『三上さんよりも穀つぶしよ、あんたは』といったつけなあ、だがそれや全くだった。おれはどうだ、自分のことさえ自分で考えがまるつきりつかないじゃないか、三上は一人で立派にやって行つた。おれには、おれの頭にそむいて、尻尾しっぽを振るブルジョアの取引気分があるんだ。それが、すっかり、おれを台なしにするんだ、おれはなぜ藤原君のいうように、頭の命ずる通りに動かないのだろう。ああ、やつぱりおれはなめくじなんだ！　おれは、労働者階級の悲惨を、決断と勇氣と犠牲のないことに帰しているが、就なかんずく中、このおれがその中の最なるものだ。労働者階級を裏切る唯一の卑怯ひきよう者の典型を、おれはおれ自身の中に見いだした。おれは、思想として全体を憤慨する前に、おれ自身の恥さらしな、憶病者の、事大主義者の、裏切り者の、利己主義者の、資本主義の番頭のおれを、まず血祭りに上げねばならぬ。おれは、おれの村を、ブルジョアの

番頭になれば、救えるという 謬 見を捨て去るべきだ。おれの救わなければならぬのは、おれの村だけじゃなくて、この地上の一切だ」

小倉は元氣よく、まるで今にも、ブルジョアに出つくわしきえすれば飛びつきそうに、こう考えたが、それは彼には絶対に不可能な事であった。彼は、依然事大主義者だった。一切が腐ってしまった、円くさえあればそれで、「安心」なのだつた。

小倉はその性格が煮え切らないところから、この事件の進展に対し、何らの役目を勤めることのできない一の木偶の坊に過ぎなかつた。

三上が船長に与えた、侮辱は、下級船員全体への復讐の形を船長によって取られた。そして、この事が、ここに述べるところの、同盟罷業を惹起した。ブルジョアの番頭対、プロレタリア！ 船では、ブルジョアは決して傭い主としてのその姿を労働者の前へ現わさなかつた。

二三

三上は、伝馬を押しして、一度神奈川沖まで出たが、また引きかえして、堀川へはいつ

た。彼は神奈川沖へ出た時に、伝馬にペンキで書かれてあつた万寿丸を、シーナイフで削り取つてしまつた。

彼は、おきなまち翁町の、

彼が泊まりつけのボーレンの、サンパンのつなされる場所へ、その伝馬をつないだ。そして、小林という、そのボーレンへ、のこのこ上がつて行つた。

ボーレンのおやじは、ざる箆のような彼の唯一の財産なるサンパンに、チャンス取りに泊まつてる宿料なしの水夫を船頭にして、沖へとチャンスを取りに出かけた留守であつた。

おばさんはいた。へた下手ないなかしはい田舎芝居の女形を思わせる色の黒い、やせたヒヨロヒヨロの、

とうなす南瓜のしなびた花のような、女郎上がりのおばさんだつた。一口にいえば「サンマ」の

おばさんだつた。このおばさんはいた。

このおばさんはおやじのおかみさんではなかつた。おやじの世話で船に乗つて、今外国船に乗つて、ここ四年ほど前ハンブルグから、近いうちに帰るといふ手紙と、金二百円とを送つてよこした水夫の、おかみさんだつた。

そのおかみさんが、今帰るか、今帰るかど待てるうちに、二百円と一年どが消えてなくなつてしまつた。そこで、三年ばかり前から、やもめの、ここのおやじのところへ、飯たきに来て、亭主の帰るのを「網を張つて」待つてるのであつた。

「まあ、三上さんだったわね。どうしたの、いついらしたの？」

三上が、のっそりはいったのを見たお婆さんは、ながひばち長火鉢の前に吸いかかけのながぎせる長煙管を置いて、くるりと入り口の方を振りかえつて、そういった。

「おやじはチャンス取りか」三上はブツキラ棒にきいた。

「ええ、相変わらず、急いでのなの？ それともゆっくりできて？」とお婆さんはきいた。

「急がねえよ、上がらしてもらおう」といって、彼はもうそこへ上がってるんだったが、長火鉢の前の座ぶとんの上へ「上がらしてもらつて」お婆さんの長煙管で、スパスパと煙たばこ草を吸い始めた。

「随分ごぶさたね、三上さん。あつちにはこんなにごぶさたしやしないでしょうね。おこられるからね」

「まがねちよう真金町？ 毎航海さ、おやじはおそくなるだろうね。今幾人いる」

「十一人、暮れに迫つて、口はないし、はいるところはないし、おやじさん、困つててよ」と指で丸をこしらえて見せた。十一人の船員たちが今休んでいるのであつた。

「お婆さんのご亭、まだ帰らないかい？」三上はきいた。

「帰らないよ、まだ。向こうで髪の毛の赤い、青い目の女房でも持つてるだろうよ」

「そのつもりで浮気をしてると、えらいことになるぜ。ハツハハハハ」

「相手さえあればね。ホホホホホ」

「僕は下船したんだから、当分また厄介になるよ。頼むよ、いいかい。チョツと出かけて来るから、おやじが帰ったらそういつとのおくれよ」三上が靴くつをはいてると、

「そして荷物は？ 小屋？ おやじさんこのごろ工面がよくないんだから、十でも十五でも入れないと、だめだよ。わかっているね」と、おばさんは、だめを押した。前金を十円か十五円は入れなけりや、とても置かないというのであつた。

「大丈夫だよ。そんなこたあ、いうだけ野暮やぼさ。ヘツヘツヘヘヘヘ」三上は表へ出て行つた。

彼は近所の質屋へ行つた。それは彼の常取引の質店であつた。

「いらつしやい、しばらくで、お品物は？」主人はきいた。

「実はね。品物はここまで持つて来られないんだが、二日だけ、伝馬てんまで金を借りたんだがね。ボースンが、融通してもらつたところへ、現金を返すんだが、それが今足りないんだ。船は今ドックにはいつてる××丸だから、伝馬うかをうか泛うかしてあるんだ。それで、二日ばかり借りたいというんだがね。利息はいくら高くてもかまわないつてんだ。どうだろう。見

に行つてもらえんかね。そこにつないであるんだが」三上は、これを昨夜伝馬に乗る前から計画していたのであった。そして彼は、その計画を完全に信頼していたのであった。

「伝馬じゃちよつと困りますね。蔵くらにはいりませんからね。それに船の伝馬じゃなおさら、何とも仕方がありませんね。どうぞ、それはまあ、何かまた別な品でもございましたら」主人は一も二もなく断わつてしまった。

三上は、驚いた。彼は驚いたのである。彼は、まだ今度の事ほど綿密に、長い間かかつて、企てたことはなかつた。それは室蘭むろらんに碇泊ていはくしているところからの計画であつた。その計画は、サンパンを占領するという点までは、彼の計画どおりに進行したのである。であるのに、最後の点に至つて、これほど何でもない問題が拒まれるという、その事が彼を驚かした。「だが、この家は伝馬を扱うのになれていないと見える」と、すぐ、彼は思ひかえした。

「さよなら」彼はそこを飛び出した。そして今までより少し彼はあわてて歩いた。彼は歩きながら、これほどの船つき場でありながら、一軒もサンパン屋が店を出していないことを不便がった。「靴でさえ中古の夜店を出してるのに——」彼は全く残念であつた。

彼はその日一日、ありとあらゆる質屋で断わられ、貸舟屋で断わられ、全くみじめな気

持ちになつてしまった。

「伝馬は売れねえや、急にはだめだな、だが、おやじになら売れるだろう」小突きまわされた犬のように、身も心もヘトヘトになりながら、彼はボーレンのおやじを目標に持つて来た。彼には絶望がなかった。

彼は夜十一時ごろ、ボーレンの表戸をあけた。

おやじは起きていた。そして、彼が上がつて行くのをじろりとながめた。三上は、長火鉢の前へ、すわつて、煙草に火をつけた。そこは六畳の間であつた。すみの方には、船員が二人ふたり寝ていた。

おやじはしばらく黙つて、これも煙草を吸つていた。

「おやじさん。おらあ今日下船したぜ。また、しばらく頼むよ」三上は切り出した。

「下船した。で、また船に乗る気なのかい」おやじは妙なふうに返事をした。

船乗りが、下船してボーレンに休めば、次の船に乗るまでの間、そこに休んでその間に、口をさがすのが、その唯一の道であつた。

「ああ、万寿丸にやもうあきたからなあ、今度はほんとうの遠洋航路だ」どうも、だが、おやじめ様子が怪しいぞ、今日万寿に行つたんじゃないかな、と思つたが、できるまで空

つとぼけた方がいいと思いついた。

「そうか、遠洋航路もいいだろう。だが、遠洋航路は履歴が美しくないといけないな。おまえの手帳をちよつと見せな、預かつとこう」

手練の手裏剣見事に三上の胸元を刺した。

「あ！ 船員手帳！」と驚いて三上は膝ひざをたたいた。「船に忘れて来たぞ」

「冗談いっちゃいけない。三上、おれは今日万寿で、すっかり様子を聞いて来たんだぞ。

いい加減にしろ、伝馬まで乗り逃げやりやがって。どうしたい伝馬なんか」

「ええ！ こうなりや癩しやくだ、いっちまえ、畜生！ 伝馬はつないであるよ」

「どこにあるんだい」

「おやじのサンパンのつないであるところさ」

「何だつてあんな邪魔つけなものを、のろのろと漕こいで来たんだい」

「売り飛ばすつもりなんだ！」

「買い手はあるつもりかい」

「売り物だったら買い手もあるうじやないか」

おやじは、もう三上と「まじめ」な話をする事は「やめた」と決めた。が、それにし

ても、こんな野郎に「踏み止まれちや」商売が上がってしまうのだった。

「お前もう横浜じやとてもだめだから、神戸こうべへでも行つて見たらどうだね、そのサンパンに乗つてさ。え」

「おらあ、万寿が帰つて来るまで待つてるよ。浜で。船員手帳はおれのもんだからなあ」

「万寿の船長は、お前を監獄にほうり込んでやるといつてたそうだけ」

「船長が、しかしそうはしないだろうよ。おれが監獄へほうり込まれる前に、やつが海人中へたつ込まれるだろうよ」

「お前は、船長を、おどかしたつてえじやないか、『海人中へたつ込むぞつ』て。どえらいことをやつたもんだなあ、だが、おもてはみな大喜びだったぜ。『何だったつて三上はえらい、やる時になりやあのくらいやるやつあない』つてさ。だが、少し気をつけないといけないぜ、しばらくお前は横浜を離れてた方がいいんだがなあ。どうだい神戸か長崎へでも行つて見ちや」

「おやじが海員手帳を取つてくれるかい？」

「それや取つてやつてもいいが、渡さねえだろう。おれんところに、あれよりもよつぽどいい履歴があるから、それを持つて行けよ」

三上は、別人の手帳を持って、別人になって、神戸へ行つた。伝馬は、ボーレンのおやじが預かつて、万寿が入港したら返すことにした。

海員の雇い入れは、その手続きが全く面倒であつた。きわめて、厳格なる手続きの下もとに、きわめて厳格に取り締まられて、そして、彼らほど搾取される労働者は、多く他に例を見ないのであつた。たとえば、三上は五年間汽船に乗つていて、ようやく月給十八円になつたばかりであつた。話にならないのだ。全く！

しかも、それに対して、命はおおつぴらに投げ出してあるのだ！

二四

北海道万寿炭坑行きのボイラー三本を、万寿丸は、横浜から、室蘭への航海に、そのガラン洞どうの腹の中に吸い込んだ。それははなはだ手間の取れる厄介な積み込みであつた。だが横浜には、そんな種類の荷役にやくになれた仲仕なかしは沢山あつた。従つて、水夫たちも安心して、その作業を手伝つた。それに、チーフメーツもそれらのことを知っているから、それほど興奮もしなかつた。

珍しい荷物であつたので、退屈を紛らし、単調を破つて、その積み込みの終えた時は、何だか、愉快なことでもなし遂げたように、水夫らは感じたくらいであつた。

横浜から、室蘭へは、万寿丸は、その船体が室蘭から横浜への時の三倍の大きさに見え
た。というのは、荷がないから、まるでその赤い腹のほとんど全部をむき出して、スクル
ーで浪をなみけつ飛ばしながらおよいで行くのであつた。従つてデッキから水面までの距離が、
うんと遠くなつた。おもての海水ポンプは、まるで空気ポンプのように、シューシューい
うばかりになつてしまふのだつた。

こうなると、便所掃除人、波田は実に、その作業を百倍の困難さにされてしまふので
あつた。彼は一々ともまで、淡水ポンプをくみに行くか——それは見つかると大変やかま
しかつたから、その方法はあまり取れなかつた——または、石油罐かんにロープを結びつけて、
海からつり上げるのであつた。これは全くいやなことだつた。わずか石油罐一杯の水が、
それほど重く、それほどいつまでも途中で、ぐずぐずしていなくてもよさそうなものだと
思われるのだつた。これをつり上げるのが億劫おつくうさに、夕方一度便所に水を通すことを怠
けると、パイプに一杯の糞ふんが凍りついてしまふのだつた。それが凍りついた日には、波田
は字義どおりに「糞をつかむ」——船では詰まらない目に合うことを糞をつかむというの

であつた。

パイプ——直径一尺ぐらいの鉄管は——下水だめが、そのまま凍つたような形において凍るのであつた。それが凍つた際は、波田は、何よりもまず機関場へおりに行つて熱湯をもらつて来るのであつた。機関場から、おもてまでの距離の遠さよ——、第一、罐場までの上り下りが、大変であつた。ことに、熱湯の一杯はいつた石油罐をブラ下げて、それを一滴も漏らさないように、もらすと下で火夫がやけどするのだ。そのすべる鉄の油だらけの梯子をのぼらなければならなかつた。これは周到な注意と、万全の用意とでなされた。彼は、それだけの作業、バケツを持つておりに、すべらぬようにもらさぬように、のぼつて来る、それだけの作業を、夏の土用よりも熱い思いで汗をたらし、罐場を一足出るとすぐに、凍つた便所の作業に移らねばならなかつた。

彼は熱湯と竹の棒とで、化学的及び物理的作用を応用して、頑固に凍りついた兄弟たちのきたない物を排除する。

彼は熱湯を打つかける前に、竹箒の柄をもつて、猛烈に物理的操作を試みた。——物理的操作とはセコンドメートルの口吻を借りたのである——そして、糞の分子と分子とがやや空隙を生ずる時において熱湯を——この時決して物惜しみしてチビチビあけては

ならない、思い切つて——どつと一時に打ちあけるのである。

と、たちまちにして、はなはだしい臭氣が、発煙硝酸の蓋ふたでもあけたように、水蒸氣と共に立ちのぼる。そしてこの水蒸氣が発煙硝酸と同じく、その煙までも黄色であるように感じられる。そして、この濛々もうもうたる蒸氣と臭氣とに伍ごして、ドーツと音がすれば、それは、汚物が流れ出した証拠である。もし不幸にして音が伴わなかった場合は、波田はそれと同じことを、幾度か繰り返さなければならぬ。

波田は、その熱湯を汚物の壺つぼの中へ注ぐやいなや、彼は棒もバケツもそこへ打ち捨てて置いて、サイドから、汚物の飛び出すスカツパーの活動の状態をながめに行く。

それはきたない仕事であつた。そしていやな、困難な仕事であつた。それはちようどわれらが便所へかがむのと同様不愉快なことであつた。それはまた、勢いよく、一切が飛び出すことは、われわれが便所へかがんだ時と同様、腹の中がきれいになることを意味し、かつ快いことであつた。

波田はスカツパーから、太平洋の波濤はとうを目がけて、飛び散つて行く、汚物の滝をながめては、誠に、これは便所掃除人以外にだれも、味わえない痛快事であると思うのであつた。「これでおれも氣持ちがいいし、だれもがまた氣持ちがいいわい」波田は、その着物を洗

つて乾^ほすために、罐場へ行つた。

そして彼は、その汚^{よご}れた着物を洗う間に、「もし神があるなら、糞^{ふん}壺^{つぼ}にこそあるべきだ」と思つた。

「なぜならば、もし神や仏があるとしたならば、彼らが愛するところの人間が豚小屋に住み、あるいは寺院の床下に、神社の縁下に住む時に、どうして、自分だけが、そのただつ広い場所を独占することができ得よう？ もしそうしている神仏でもあるならば、それは岩見重太郎によつて退治されねばならない神仏であつて、決して真^{ほん}物^{もの}ではないのだ。今は、神仏よりも一段下であるべき人間でさえ、『万人がパンを得るまではだれもが菓子を持つてはならぬ』といつていてではないか、神はまさに糞壺にこそあるべきだ！」

波田によると神は恐ろしく、きたないところにもぐる必要があつた。

「おれは便所に神を見た。それ以外で見ることがない」と波田は、いつ、どこでも主張するのであつた。

「で、その神様は、おれのによく似た菜つ葉服を着て、おれより先にいつでも便所を掃除してる！ それは労働者だつた。賃銀をもらわない労働者の形をしていた！」と。

「で、もし、神様が、労働者でもなく、便所にもいなかったら、おれは、とても上陸して

寺院や社祠しゃしなどへ、のそのそさがしになんぞ出かけてはいられないんだ。人間から現実のパンを奪って精神的な食べられもしない腹もふくれない、パンなんぞやるといってごまかすのは神じゃないんだ。それやブルジョアか、その親類だ」

これが波田の宗教観であった。

「その神様が賃銀を月八円ずつさえ得てれば、そのまま波田君なんだがなあ。惜しいことには、たった一つ違うんで困ったね」藤原はそういつて笑ったものだ。

船には、宗教を信ずるものは一人ひとりもいないといつてよかった。ボースン、大工、この二人だけが、暴化しげとき時だけ寝台の下ひきだしの中から、金刀比羅こんびらだいみょうじん大明神を引っぱり出して、利用した。彼らはもし、それらがいくらかでも役に立つなら、利用しなけれや「損だ」と習慣的に考えたのであった。

板子いたこ一枚下は地獄じごくである。超人間的な「神か仏」のような「物」にたよりたい気は、人には、特に船員などにはあり得たのであるが、しかも彼らはあまりにばかばかしい、それらのものを信じる気にはならなかった。宗教は今では全くくだらないものであるか、または、その正体をごまかすための神学や経典で、あいまいに詭弁きべんてき的に職業化されていた。宗教は今や高利貸や、マードラーの手先になったり弁護士になったりすることによっての

みその生命をかるうじて保っているにすぎなかった。

話は飛んでもない傍路わきみちへそれたものだ。

二五

万寿丸は、室蘭の荷役を早く済まして、碇泊中ていはくそこで船のマストや何かをすっかり塗つて、横浜へ帰つて正月をする予定であった。そしてその予定は、一切のプログラムを最大速度でやって、順当に行けば、かるうじて大晦日おおみそかの晩横浜へ着くのであった。

そんなわけであったから、わが、団扇うちわのような万寿丸は、豚のようなからだを汗だくで、その全速力九ノットを出していた。そしてこの大速力のために、船体はパシフィックラインのエムロシアが、全速を出した時のような、自震動をブルブルと感じながら飛んで行くのであった。なぜ、たった九ノットの速度でゆれるかといえ、わが万寿丸は、なるべく多く石炭を頼たよるべく、デッキから、ボトムまで、どちらを向いてもガラしょうン洞で、支柱がないためなのだった。それはフットボールの内部のようなものだった。

冬期の北海道は霧がはなはだしかった。汽船で鳴らす霧笛、燈台で鳴らす号砲のような

霧信号。海へころがり込んだフットボールのような万寿丸は、霧のために、目隠しをされたものであるから、九マイルの速力をどうしても、もっと下げなければならぬはずであった。けれどもそれは、正月のことを考える時に、船長はこれから上速力を下げるわけには行かなかった。その代わり彼はむやみやたらに霧笛を鳴らした。

それは何かの事變の前兆を知らせるといふ、犬の遠ぼえに似ていた。それを聞くものに、きつと不安な予感に似たものを吹き込まねば置かぬ音色であった。同じ汽笛でも、出帆の汽笛は寂しく、入港の汽笛は、元氣よく勝ち誇つたように聞こえるものだ。霧笛の場合は同じ汽笛でも、不吉な、落ちつかない、何だかソワソワした気持ちに人を引き込んだ。自らその糸をひいている船長自身が、その音色に追つかけられるようにあとからあとからと、糸をひいた。霧笛は、ますます深く、人から景色けしきを奪う霧のように、その心から光と落ち着きとを奪うのであった。

精密なる海図と羅針盤らしんばんとがあるとはいへ、またそれが、めだかが湖に泳ぐような比例で海が広いとはいへ、とまれ先が見えないということとは、安心のならないことであつた。ことに水夫らにとつては、まるで盲人が杖つえをかついで、文字どおり盲滅法に走っているように思われるのであつた。

西沢と波田とは、ブリッジに上がって、小倉の舵取りを見学していた。

自動車の運転手がそのハンドルを絶えず、回しているように、汽船の舵機も、前のコンパスとにらめつくらをしながら、絶えず、回され調節されていた。

一時間九ノツトの速力も、この船全体をその権力の下に支配する、船長の心理に及ぼす影響は、このブリッジにのぼって、一望ただ海波であり、一船これわが配下である時に、決してのろい速力ではなかった。団扇うちわのようなこの小さな船も彼にとっては偉大であった。ことにかく霧の濃くかけた時は、船長は、二千トンのこの船を、二万トンに拡大して見ることができた。なぜかなれば、船全体が霧のために、漠然ばくぜんたる輪郭をもってぼかされ、それを想像をもつて拡大するからであった。

暗がり中で、だれも見えていないと知ると、急に二歩ばかり威張って、警察署長のような格好に歩いて見ることが、大抵だれにもあるように、万寿丸は、巨船のごとくに気取って航行しているように見えた。

が、それにしても不思議であった。室蘭港口に栓せんをしている大黒島は、もうそこに来ないなければならないはずの時間であり、コンパスであり、海図であった。にもかかわらず、事实は、大黒島の燈台も霧信号音も、見えも聞こえもしないのであった。

わが万寿丸は九ノツトのフルスピードをもって、船長自身ブリッジに立って、小倉の舵かじを命令していた。

波田と、西沢とは各熱心おのおのにいかにして汽船の舵を取り、その方向を保って行くか、ということをながめ、心で研究していた。

彼らは、何も見えない濃霧の中を、コンパスと海図とだけで、夢中になって飛んで行く船が不思議でたまらなかつた。

万寿丸は、その哀れな犬の遠ぼえを、絶えず吹き鳴らしながら、かくして進んで行つた。霧の上に、夜の闇やみが、その墨をまき始めた。一切のものが今にも失明しようとする者の、最後の視力のようにボンヤリしてしまつた。

と、突然、ブリッジに立つてる者は船長から、波田に至るまで急に飛び上がった。おそろしい速力を持った巨大な軍艦が、その主砲を打ぶつ放して、その轟ごうおん音と共に、この哀れな万寿丸の舳へそきを目がけて、突進して来たのであつた。それは全くとつさの場合であつた。「ハールポール」と船長は、舵機だきをあやつっている小倉の前へ来て、飛び上がりざま叫んだ。その声は絶望的にブリッジに響きわたつた。

機関室への信号機は「フルスピードゴースターン」全速後退を命令して、チンチンチン

チンとけたたましく鳴りわたった。

船長初め、小倉らブリッジにあるすべては「打ぶつつけた」と覚悟していた。

波田に西沢は、何だかまるでわけがわからなかった。

これらは息をつく間もない瞬間に一切が行なわれた。そして、本船はグツと回った。波田も西沢も、船長までもが、そのなれにかかわらずよろめいたほど急速に。そして、今にも衝突しそうに思えた、山のような怪物、（それは軍艦だと波田と西沢は思っていた）は全速力をもつて、まるで風のように左舷さげんの方へ消え去った。と、その怪物からは続けざまにドンドンドンと轟ごうぜん然たる砲声が放たれた。

哀れなる小犬のような、わが万寿丸は、今は立ちすくんでしまった。いわば、腰を抜かしたのである。むやみに非常汽笛を鳴らし、救いを求め、そこへ錨いかりをほうり込んだ。

今、それほど万寿丸を驚かした、軍艦のように速力の速い怪物は、百年一日のごとく動かない大黒島であり、大砲は霧信号であった。

わが万寿丸はその二十間けん手前まで九ノツトの速力で、大黒様のお尻しりの辺をねらってまっしぐらに突進して来たのだった。

あぶなかつた。錨いかりがはいると、皆は、期せずしてホツとした。

大黒島の燈台では、乱暴にも自分を目がけて勇敢に突進して来る船を認めただので、危険信号を乱発したのだった。幸いにして、この無法者は、間ぎわになつてその乱暴を思い止まつた。

万寿丸は「動いてはあぶない」とばかりに、立ちすくんだ盲人のように、そこに投とうびよ錨うして一夜を明かすことになつた。

奇妙きてれつなる一夜であつた。船も高級船員もソワソワしていた。おもてのものだけは、一夜を楽に寝ることができた。

二六

翌朝万寿丸は、雪に照り映はえた、透徹した四圍もとの下に、自分の所在を発見した。それはすこぶる危険なところへ、彼女は首を突つ込んでいた。

船員たちは、自分の目の前に、手の届きそうなところに、大黒島の雪におおわれた、驚わしの爪つめのような岩石に向き合つており、左手に一体に海を黒く、魔物の目のように染める暗あ礁んしょうを見いだした。

彼女は、その醜体を見られるのが恥ずかしそうに、抜き足さし足で早朝、何食わぬ顔をして、室蘭港へはいった。

すぐに石炭積み込み用の高架棧橋へ横付けになるべきであったが、ボイラーの荷役の済むまでは沖がかりになるので、室蘭湾のほとんどまん中へ、今抜いたばかりの錨を何食わぬ顔をして投げた。

万寿丸が属する北海炭山会社のランチは、すぐに勢いよくやって来た。

とも、おもてのサンパンも、赤毛布げつとで作られた厚司あつしを着た、囚人のような船頭さんによって、漕こぎつけられた。沖売ろうの娘も逸いちはや早く上がって来た。

水夫たちは、ボイラー揚陸の準備前に、朝食をするために、おもてへ帰って来た。

食卓には飯とみそ汁と沢庵たくあんとが準備されてある。一方の腰かけのすみには、沖売ろう——船へ菓子や日用品を売り込みに来る小売り商人——の娘が、果物くだものや駄菓子だがしなどのほいった箱を積み上げて、いつ開こうかと待っているのであった。

船員は、どんな酒好き男でも、同時に菓子好きであった。それは、監獄の囚人が、昼食の代わりに食べるアンパンを持って通る看守を見て、看守はアンパンが食べられるだけ、この世の中で一番幸福な人間だと思ふのと同じであった。監獄と、船中においては、甘い

ものは、ダイヤモンドよりも貴かつた。

波田は、その全収入をあげて、沖売ろうに奉公していた。彼は、船員としての因襲的な悪徳にはしめない性格であつたが、「菓子で身を持ちくずす」のであつた。彼はきわめて貧乏——月八円——であつた。それなのに、彼は金つばを三十ぐらいは、どうしても食べないではいられないのであつた。しかし、財政の方がそれほど食べることを許さないのであつた。彼は沖売ろうがいつそのこと来ねばいいにと、いつも思うのであつた。そのくせ沖売ろうの来ない日は、彼は元気がないのであつた。全く彼は「甘いものに身を持ちくずす」のであつた。

この場合においても彼は、スーツと、自分の棚たなから、状袋を出して、その中に五十錢玉が一つ光つていることを見ると、非常な誘惑を菓子箱に感じた。

「どうしてもおれは仕事着と、靴くつが一足いるんだがなあ」と考えはした。彼は、その全収入を菓子屋に奉公するために、仕事着は、二着つきり、靴はなく、どんな寒い時もゴム裏足袋たびの、バリバリ凍つたのをはいていた。そして、ボースンの、ゴム長靴のペケを利用して、その脛すねの部分だけを、ゲートル流にはいていたのであつた。も一つ、彼が菓子以外にいかにか金を出さないか——出せないかということを知るには、彼の頭を見ればよかつた。

まるでそれは「はたき」のように延びて汚れ切っていた。ボースンはそれを気にして、彼は、特に、一円を理髪代として貸した——菓子屋の来た時に彼は月二割の利子をむさぼるところのボースンの金を、一円借りたのである。ボースンも彼には菓子代は決して貸さなかつたが、波田は理髪代といった——彼はそれで、一度に金つばを食ってしまった。

彼は、神様を便所から見つけたが、菓子箱には貧乏神がいるとこぼしていた。「しかし、正月になれば、それも何とかなるだろうさ、くよくよしたもんでもないや」

彼は自分に言い訳をしながら、沖売ろうのねえさんの所有に属する、菓子箱へと近づいた。

「どうだね、うまい菓子があるかね」

「みんな、うまいかすだわね」菓子屋のねえさんは、東北弁まる出しで答えた。

波田は、うまそうな菓子を一種ずつ取って食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食いたかつたが、これは沖売ろうは持って来なかつた。

室蘭では、東洋軒という、室蘭一の菓子屋が作るだけであつた。彼はそのケーキホルへ、その格好で平気で押しかけるのであつた。

ろくに食べた気のしないうちに波田は五十銭の予定額だけを食い尽くした。それ以上は

借款によるよりほかに道がないので、彼はやむを得ず、小倉が帰って来るまで待つことにした。

波田にとつては、一切の欲望の最高なるものを菓子占めていた。

もし三上がいるとすれば、沖売ろうのねえさんは、ボースと、大工と、三上との共同戦線もとの下に、かわいそうにいじめられるのであった。彼女は、それを覚悟で、二重によびるま猿股たをはいて、本船へ、彼女のパンを得うべく沖売ろうに来るのであった。

彼女は、実に気の毒なほど醜かった。それは形容するのがさんたん惨憺さんたんなくらいに醜い女であった。年は二十三、四ぐらいに見えた。彼女は、女に生まれたことが全く不都合な事だった。彼女がその髪を延ばして置いて、鏡に向かつてその髪を結ぶ時に、きつと彼女は自然をのろうだろろうとおもわれた。彼女と一緒に本船の火夫室へ来る沖売ろうは、彼女とはまるで違っていた。年は同年ぐらいであったが、彼女は北国に見る美人型であった。

彼女は、水夫たちから、ことに、彼女を見るも気の毒なくらいに恥ずかしいめる、ボースンや大工らは、彼女が、「インド猿ざる」によく似てると、むきつけて、そうであることが、不都合きわまることのようにほんきに、彼女を罵倒ばとうし、そして恥ずかしい目にかかった。彼女は、それでも一緒になつて、キャツキャツとはしやぎながら、自分の商売の菓子箱

のくつがえるのも忘れて、抵抗したりふざけたりするのだった。

彼らは、薄暗いデツキの上を、小犬のようにころがり回ってふざけていた。

彼女が菓子のほかにも、彼女の肉をも売るといふことを、波田は耳にしたことがあったが、それは想像するだけでも不可能のように思えた。彼女は女性として男性に持たせうる、どんな魅力もないように見えた。きたない男よりも醜い彼女であった。

だのに、彼女は、やはり、うわさのように菓子以外のものも、提供することがズツとあつた。波田にもわかつた。それはボースンの部屋であつた。

これは、蜘蛛くもと蜘蛛くもとが、一つの瓶びんの中で互いに食い殺し合うのによく似てはいないだろうか。

だが、その日は、それらのことは一切起こらなかった。彼女の菓子は、食事の済んだ水夫らによつて一つ二つ摘まれた。

ボースンと大工とは、彼女を、波田の寝箱の中へ押し倒すことだけは、形式的に忘れなかつた。波田の寝箱の隣では、負傷のために、弱り、やせたボーイ長が、まだうめいていたのであつた。

波田は、ボーイ長に、朝鮮餡あめを二本買ってやつた。ボーイ長は涙を流して喜んだ。

疾病や負傷や死までが、生活に疲れ、苦痛になれた人たちにとっては軽視されるものだ。生活に疲れた人々は、その健全な状態においてさえ、疾病や負傷の時とあまり違わない苦痛にみたされているのだ。人間がそれほどあることは何のためか、だれのためか、なぜそれほどに人間は苦しまねばならないのか、それはここで論ずべきことじゃない。

おもしろいことは、この沖売ろうの娘は、おもてのコックと後になって、——四年もこれの書かれた後——二週間だけ一緒になって世帯を持った。二週間の後彼女はコックのために酌婦に売り飛ばされて、夕張炭田ゆうばりに行き、コックは世帯道具を売って、ある寡婦やもめの家へ入り婿となって、彼自身沖売ろうになり、日用品や、菓子などを舟に積んで、本船へ持つて来るようになったことだ、が、これはズツと後の事だ。

水夫たちの食事が終わると、ボースンは、チーフメーツのところへ仕事の順序をききに行った。

チーフメーツは、クレインが来るから、それまでのあいだに、ボイラーの方を用意して置けと命じた。ボースンはおもてへ帰つて来て「今からハッチの蓋ふたをとるぞ」
そこで水夫らはデツキへと出て行った。

二七

おもてはストキから、ボースン、大工まで、全部出て行ったので、あとは傷を負って、むなしく一週間余りを暗室——それはほとんど暗室であった——の、寢箱の中でもだえ苦しんだ、ボーイ長の安井と、おもての通い船のおやじと、それから、沖売ろうのその娘とだけになった。

沖売ろうの娘は、波田の寢箱の縁へ腰かけていた。サンパンの船頭は、ストーヴの前へ腰をおろして、皆黙々としていた。

おもての、デツキでは、ビームがデツキへ打つ突^ぶかる音や、ウインチの回る音などで、まるで船全体が太鼓でもあるように響きわたった。

ボーイ長は、自分では大して自由にならないからだを持ち扱って退屈し切っていた。

「ねえさん、わしに少し菓子をくれないか」ボーイ長は勞^{つか}れ切った声でささやくようにいった。

「アア、びつくらしたよう。だれかおるだがよ、ここに」と彼女は飛び上がって、ボーイ長の暗室をのぞいた。そこにはボーイ長が確かに寝ているのであった。

「あ、見習いさんでねえか、びっくりしただがよ」彼女は菓子箱を持って来て、ボーイ長の前へひろげて見せた。

ボーイ長はそれを三十銭買った。そうして、うまそうに、むさぼり食べるのであった。

「船頭さん！ おれ今日陸きょうへ上がりたいが連れてつておくれよ」ボーイ長は船頭へ声をかけた。

「ああ、いいとも、お女郎買いかい？」船頭はすばらしく大きいからだの、気のいい五十格好のじいさんだった。

「うんにや。わしやけがしたので、病院へ行くんだ」彼は今度こそ病院へ行けると思った。ボーイ長は思うのであった。「わしのけがをしたということは、もうだれも彼もみな忘れてしまっているのだろう。わしのけがをしたことは、全く他の人たちにとっては些細ささいなことなんだろう。だが、それやあまり不人情だろうと思われる。ことに、私の足は膿うんでしまつて、痛くてたまらないんだ。わしは今日は、何としても船長さんに願つて、病院へ入院させてもらわにやならん。私のからだは、私が大切にしないでだれが大切にしてくれ手があるうか、私は船頭さんに病院まで負おぶつてつてもらおう。私はもう、何から何まで自分でやらなけれやだめだと知つたんだ」

「船頭さん、室蘭にいい病院があるの？」ボーイ長はたずねた。

「ああ、いい病院があるよ、室蘭病院てのが、山の手の高いところにあるよ」

「そこまで、波止場から、どのくらいの道程みちのりがあるの」

「そうさなあ、十二、三町ぐらいなもんだろうなあ」

それではとても一人ひとりの力で負おぶつてなんぞ行けない。といって、ここでは櫂そりでもなければとてもだめだが、それもちよつとあるまいし、もし船長が身を入れてくれないと、今度こそは、自分は航海中に死なねばならないだろう。

「市立病院かい、それは？」ボーイ長はたずねた。

「市立じゃないけれど、公立だよ」船頭さんは答えた。「だけど、どうしてまたけがなどしたのかい」ときいた。

「ほらこの前の航海ね。室蘭を出帆する日からしてえらい暴化しげだったろう。あの航海に、舵機だきの鎖とカバーの間に食い込まれたんだよ」ボーイ長はあの時の様子を、ここで初めて語り始めた。

「その日、私はとももの倉庫にキャベツを出しに行ったんだよ。おもてのおやじが、とつて来いというからね。で、キャベツを三つぎる箆べへ入れて、コック部屋べやの方へデツキを歩いてる

と、船が急に傾いたんで、左の足をウンと踏んばったんだよ。それがねちようど都合悪くデツキが凍つてたもんだからすべつて、つい鎖の方まではいってしまったんだよ。その時に舵機ががらがらと動いたもんだから、私や鎖に食い込まれてしまって、カバーの中へからだを半分入れたらしいんだよ。そしてうつむけに引きずられたもんだから、胸をひどくデツキへたたきつけたらしいんだよ。わしは、ブーツとして気を失つてたから、足を食い込まれて、ひどくやられたことだけは知っていたんだけれど、こんなに胸や手やなどが痛むとは、助けられてからでも思わなかったんだよ。だけど、足はもうすっかりなおつても、ビッコを引かなけれや歩けないだろうと思うと、どうしていいかわからなくなるよ。おらあ、からだよりほかにもとでがねえからなあ、びっこをひくようになつちや、車も曳ひけなからねえ、そうかつて学問をする学資はないしね、家にやまだ子供が八人もいて、小作のおやじはおふくろと一緒に、それこそまっ黒になつて働いても、どうしてもやつて行けねえで、小さな子まで子守こもり奉公ほうこうに出してあるんだよ。だからおれ、少しでもかせいで家に送ろうと思つて、収入がいいという話を聞いたから、船に乗つたらこんな始末だろう。今後どうしてやつて行くかまるでわからなくなつてしまつたよ。こんな時はいくら貧乏してもやつぱり、とうさんやかあさんがいると、気強いけれどなあ」と語つて彼はホロリと

した。

労働力を売って生活するこの青年も、今その売ろうとする労働力が、大きな障害を与えられたことについては、どこかはつきりしない憤懣ふんまんを心の底に感ずるのであった。彼は、負傷後、イヒチオールを二、三回塗布され、足のガーゼを二、三度自分で取り換えただけであつた。彼は傷の疼痛とうつうのために、非常にやせてしまった。彼はそのいたさに、彼の神経を極度に疲労させた。

水夫たちが、仕事に出て行つて、おもてにだれもなくになると、彼は、今までためていた苦痛の叫びをあげるのであつた。彼は、出任せに何でも叫んだ。そして自分の声に一生懸命聞き入つた。彼の足の痛みは負傷後五、六時間を経て、はなはだしくなつて来た。彼は、そのぬれた麩ふのように力なく疲れたからだを、寢箱の中から危うくデッキへ落ちそうにまでもだえ狂つた。彼は狂人のように叫んだ。そして、それは、彼自身でも、疼痛に対しては、非常にハッキリした意識を持つていたが、あまりに、そちらの方へのみあらゆる神経を集めたので、自分のもだえや叫喚には、ボンヤリしているのだつた。

水夫らは帰つて来て、この苦悶くもんのさまを見ると「あまりあばれると、かえつて傷が悪くなるから、じつと我慢しておれ」と、慰めるよりほかに道がなかつた。水夫たちはボーイ

長の負傷に対して、非常な嫌悪けんおの念を一様に感じていた。それは、彼がけがをしたのが、彼の過失だからというのではなかった。また、負傷したのが彼だからというのでもなかった。それは、ボーイ長が自分の負傷について、神経を全く疲労させ、身をのろい世をのろい、ついには絶望的に自分の足までもろうような、それと全く同じ感情が、水夫らにあったからであった。水夫らは、それを意識するとしなやかにかかわらず、そこに、泣きわめき、狂い叫び、のた打ち回る自分自身の運命を、朝も夜も、食事にも眠りにも、焼けた鏝こてでも当てられるように、ジリジリと感じないではいられなかったからである。それから逃れる術すべはなかつたのである。

水夫らは、自分の負傷のように、ボーイ長の負傷によって陰気にされていた。そして自分の負傷のように、いらいらさせられた。彼らは、それから逃れようとして、あせっていた。冷淡な、無関心な態度は、彼らが鈍らされた神経を持っていることと、も一つは「なれている」ことと、今一つは、その自分自身の運命を、あまりにハッキリ見せつけられることから、免れようとする心から出たことであった。

波田は、石油罐かんの二つに切つたので、便器をこしらえて、彼と、ボーイ長の寢箱とが※かぎ形をなしているすみへ置いてやった。

安井は、だれも見えなくなると、その便器へ用を足した。その時の彼の努力は全くおびただしいものであった。彼は、用を達したあとは、疲労と疼痛とで失心したような状態に陥るのであった。

彼は、一切のことが、二度目であるというような幻覚にとらわれるのであった。それはちやうど、濁った方解石を透して物を見るように、一切がボンヤリして二重に見えるのであった。彼は、ズツと遠い以前からの歴史も、また、たった今何か考えた刹那的な考えも、二度目であるように思った。その一度は、どこで経験し、どこで考えたかということ、彼は考えさかのぼるのであった。そうして、そこには、彼の以前の生活があった。ひもじい、寒い小作人の子としての絶え間なき窮乏の生活が、それも二重の形をもって展開されるのであった。小学校時代の暑中休暇のことが、彼の今の負傷して寝ている状態と、ゴツチャになってしまったりするのだった。「ちやうどおれは二度目だ」と彼はぼんやりけがのことを考えているのであった。「おれはあの時、ほかのだれもが休んでいるのにおれだけは、父ちやんと二人ふたりで田の草をとりに出かけたつけ。休まねばならぬ時に、おれは、煮えたぎる田の水の中で草とりをしたつけ。おれは休む時を持って生まれなかった。だが、あの時おれはけがをしたつけ。そして休んだつけ」それから、彼の哀れな、疲れ切った意

識は、彼を暑中休暇の田の草とりから、彼を嚴寒の万寿丸へ引き戻してしまった。そして彼はまたうめきもだえ狂わねばならなかった。

彼はその疼痛の絶頂においては、感ずるのであった。

「こんな苦痛をハッキリ味わわねばならないのは、何て慘酷なことだろう。それよりも、もっとひどい苦痛を、もっとぼんやりの方がいいのに」などと、会体えたいの知れぬことを感じるのであった。だがしかし、必要もないのに、彼に、これほど長い間苦痛を、わざと見せつけることは、明らかに、船長の冷酷から来たことであつた。

船には、その船に対して、会社から、傷病費の予算が請求に応じて提供されてあるのだがそれは、高級海員の家族の病氣療養費、あるいは特別収入といった方が正当であつた。そして、このための支出から、かくのごとき場合の負傷は、船長によって「節欲」せられるのであつた。

船における一切の事は、船長だけがトルコの回ファイファイ々教の殿堂内における、サルタンと同様に知っているだけであつた。より緊密でないことが高級海員に知られていた。そして、労働者たちは、自分たちに会社から支払うところの食糧費がいくらであるか、それすらも知らなかつた。

もし搾しぼろうとするならば、搾られる者が「何か」——それはきわめて詰まらぬことではない、二と二とを加えると四となるということでも——知っているということは、それより悪いことを、搾るものが見つけるのが困難であろう。つまり何でも知らなきやいいのだ。知つてると理屈が多くて困るのだ！ かくておもての「ゴロツキ」どもは、完全に何も知らなかった。自分の手帳まで事務室に取り上げられてしまうのであった。そして、ついでに判も。かくて、彼らは、ゴロツキにされてしまうのであった。

そこでは、何でもふんだくる者が紳士であることは、十八世紀の英国のゼントルマンとすこしも変わることはなかった。そして奪われるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！ 全く奪われるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！ 奪うものと奪われるものとの間、ゼントルマンとゴロツキとは絶えないのだ！

「生存権すら主張ができない」ことは、どんなに、ボーイ長をいらだたせたことだろう。そこに人間の生命の疾患に対しての、病院がいくつも豊いらかを並べているのに、彼はそのまま、横浜からまた船で戻ってしまったのだ。そして、それは船長が自分の船のボーイ長がけがをしたことなどは、チーフメートから聞いたまま「忘れてしまった」ことが原因かもしれないのだ。またそんなものを病院なんぞに入れることはもちろん、そのけがが「なおらね

ばならない」必要を認めない、ことに起因するかもしれないのだ。そして、きつとそうなのだ。

それは確かにそうあるべきだ。なぜかならばそれは「階級」と「身分」とが違うからであつた。それはまたなぜかならば「階級」と「身分」とは人間と猿さるとをへだてるよりも、もつとひどく人間と人間をへだて、離れたからだ。

かくて、ボーイ長の負傷は、水夫らに何とはなしに、陰惨な印象を与え、白内障そこひの目における障害のように、いくらふいてもふいてもとれなかつた。そして、それはこのゴロツキどもを、布団ふとんに紛れ込んだ針のように、時々チクチクとつつ突いた。かつ針は、いつかはあまりの痛さに「ゴロツキ」どもを飛び上がらせずには置かないのであつた。

ボーイ長は、自分にとつては何よりも尊い自分の生命のために、相手は船長であれ何であれ、「今日きょうという今日は交渉しよう」と決心した。そしてそれは藤原に相談すべきであると思ひ決めた。

一方水夫らは、ボイラー揚陸のために、ハッチの蓋ふたをとり、ビームをはずした。そして彼らは、マストの内部にとりつけてある足場を伝って、ダンブルの中へと降りて行った。それは嚴重に荷造りがしてあった。水夫らは、それが航海中ゴロゴロあばれ出さないように、それをしつかり据え、方々から引っぱるための作業の困難で、とても面倒臭かったことを思いながら、それを取りはずすのだった。取りはずしは、取りつけから見ると、比較にならぬほど手軽に行った。

クレインは今、室蘭駅の機関庫の見える方から、その怪物のような図体を、渋々とランチに引っぱられて、万寿丸を目がけて近づいて来るのであった。四角な浮き箱の上に、二十五トンの重さの物を引っぱり上げるだけの力と、骨組みとを持った鉄の腕と、ウインチが装置されてあるのだ、けし粒ほどの小蟻こありが黄金虫こがねむしか何かを引っぱるように、小蒸気はそれを曳ひきなやみつつ、じりじりと近づいた。

船の方では、いつでも、引き上げられるように、ボイラーはそのあらゆる拘束から釈放された。今はただ大きな腕が、自分をその牢獄ろうごくから引き出してくれるのを待つばかりだった。

クレインは近づいた。そしてその偉大な腕を、ヌツと本船のハッチの上へ差し延べた。

それから、ワイアロープがブラ下がつて来た。そのロープの尖端には人間の腕まわりほどの太さの鉤かぎがついていた。この鉤自体が一人ひとりではとても動かないのであった。そこへ持つて来て室蘭では、この種の荷役になれた仲仕がいなかった。その巨大な鉤が上からブラ下がつて来て、下から何でもひっかかりさえすれば、引き上げようとしているのに、仲仕はただまごまごするだけであった。

水夫たちも荷役に手伝った。が、何にしても足場は、ボイラーの円まるいペンキ塗りの上である。すべることこの上もないところへ、それを縛るワイアロープは、腕の太さほどであるのであった。まごつくワイアに、はね飛ばされねばならぬ破目はめになるのであった。おまけに鉤は一人で動かない、やつであった。従つて作業がはなはだしく困難であった。

ところが、船長が、このボイラー揚陸に当たつた時間は、きわめて短いのであった。それはチーフメーツも心得ていた。チーフだつて正月は横浜でしたかつたことはいうまでもないことだ。従つて、これも、ボイラーを急いでいた。かくのごとく二重にボイラーは急がれていたが、仲仕は人数が少ない上に、横浜の仲仕ほどなれていなかった。なかなか仕事ははかどらなかつた。チーフメーツはハツチに片足を載せて、

「そのワイアを引っぱるんだ！ ちがう！ そつちからこつちへだ！ ボーソン、そのワ

イアをあれへかけて引っぱるんだ、そら、シャツクルがはずれた！ だめだ！ ボースン！ ばか！ 違う！ そらホックをかけて、ヒーボーイ、チエツ、またはずれた。スライク、スライク！」彼はまっ赤になつてせり売りの商人のように怒鳴りまくつた。

彼のこの焦燥にもかかわらず、ボイラーはクレインからホックに、すこしも引つかかろうとしなかつた。チーフメーツは、自分の声で、ホックをワイアに引っかけようとでもするやうに、だんだんその声を大きく張り上げた。そして、鉤の大きいのは、ボースンや水夫たちの責任でもあるやうに、ボースンや水夫たちを口ぎたなくののしり始めた。

紳士の番頭はその地金じかねを現あわした。

「大工、なぜすみへ行く、そのワイヤを抜くんだ！ ボースン、何だ、まいまいつぶろ見たいに、グルグル回つてやがつて、グルグル回つたつて、ボイラーは上がりやしないぞ、どこへ行くんだ、そら、ばか！」まるでボースンがばかであることをはやし立てているのであつた。

ボースンが、上から見るとただ、ボイラーのまわりをグルグル回るだけのように見えると同様に、チーフメーツはボースンの周囲をグルグル回りながら、ボースンがばかであることを、ハッキリ飲み込ませてしまつたよりほかには、何もしなかつた。

ボースンはあわててしまった。どこから手を出していいか、わからなくなってしまうのだ。

藤原はボイラーの上にながって、鉤かぎが当然引つかかるような状態になって来るのを待っていた。そして彼は、普段から、あまりに意気いき地ぢのない、ボースンや大工が、チーフメーツに「くそみそ」にののしられているのに対して、なおさら腹を立てた。

「ほんとに貴様らはばかだ！ 奴隷どれいでもそれほど卑屈ひくつじゃないぞ！ 水夫らからは月二割も搾しぼりやがって、豚め！ チーフメーツの野郎、なにかおれにいつて見ろ！ 思い知らしてやるから、高利貸の丁稚てつちめ！」

彼は、それこそ、抜けかけたボールトのように、ボイラーの上へ突つ立っていた。

ホックはうまく彼と、向かい合つて立つてる波田との間へおりた。波田は腕ほどの太さの、ワイアの鉤穴を持ち上げた。それは一秒間とは持ち続けることのできない重さであった。藤原は、ホックを、彼のからだの重みをもたせて、波田の持つている鉤穴の方へ揺るがした。それはちようどそこへ行つたが、少しおり足らなかつた。

だめだつた！ はまらなかつた。

「何だ、ボケナス、どうしてはめないんだ！ ばか！ よせツ！」チーフメーツは頭から、

ストキへ罵声^{ばせい}を吐きかけた。

「波田君、降りたまえ！ チーフメーツがよせという命令だ」そのまま藤原は、ボイラーからワイアを伝つて飛びおりた。波田も続いた。

「どうした、ストキ、どこへ行くんだ！ 畜生！」チーフメーツはまるで狂っていた。

藤原は下へ降りて、西沢をデツキから見えないところへ呼んだ。

「君、仕事があれでやれるかい、ばかとか、よせとか、怒鳴り散らされて？ え？ よそうじゃないか、おれたちあ、船を棧橋まで着けないで下船しちやおう、ばかばかしいや！ 奴隷じゃねえや」藤原はジロリとボースンをにらんだ。

「よせ！ よせ！ 全く、こんなボロ船いつだつておるぜ」西沢も賛成した。

「ストライクか、それや、ぜびやらにやならないこつた」波田も賛成であった。

チーフメーツはデツキの上で、餅^{もち}をのどにつめでもしたように、あわててしまった。

ボースンは下で癩^{しやく}を起こしそうに青くなった。そして、ストキのところへ飛んで行った。

「ストキ、どうしたんだね、何か腹の立つことでもあったのかね」ボースンはまるでチーフメーツがも一人^{ひとり}できた、といったようにオズオズしながらきいた。

「ボースンはすこしもおこつていないようだね。おれたちや、チーフメーツから、仕事を

やめろと命令されたから、今やめたまでの話さ。そして、荷役の加勢はもうよそう、ということに決めたんだ。陸から、そのために来た仲仕があるからね。それに、仲仕の前で、ああがなられちや仕事もできないしね」藤原は答えた。

「そんなことをいわないで、頼む、あとで何とでも話をつけるから、気を直してやってくれ、わしなんぞはどうだ、まるで畜生だが、頼む、ナ、ストキ、やってくれ」ボースンは自分が畜生のようにいわれることを知ってはいたのだ。だが、ボースン対チーフメーツの関係と、水夫対チーフメーツとの関係はまるで違っていた。

前者には、高利貸とその手代という関係があり、後者は、高利貸対労働者という関係であつた。

「やるもやらぬもねえじやないか、いいつけを守って、やめてるだけのもんじやないか、ボースンもさつきから大分やめろといわれてるようだが、よさないとあとでまたうるさいだろうぜ」

全くボースンにとっては、どちらにしても、あとでうるさい、面倒な事になったものであつた。

ボースンは、ストキから、西沢、西沢から、波田へ、その禿^はげた頭をつるつるなでなが

ら、一生懸命で、仕事をしてくれるように頼んだ。

デツキでは、チーフメーツは青くなつてしまった。彼は様子が悪いことを見てとつた。しかし、どうにもならなかつた。クレインの方では、チーフメーツの合図一つで、いつでも巻き上げようと、腕をたくし上げて待つてるのであつた。デツキの上に、チーフメーツの怒鳴るために、人のことながらウロウロしていた仲仕たちは、にわかにはボイラーの上から、水夫たちがおりたので、ぼんやりしてしまつた。

二九

チーフメーツはデツキから、「ボースン！」と怒鳴つた。

ボースンは、いよいよあわてて、いよいよ急にその禿^はげ頭をなでて、頼むのであつた。

「ソラ怒鳴つてる！ 後生だからこのボイラーだけ上げてくれ。そのあとでいくらでも話
はつくじやないか、ホラ、またわめいた。頼む、ストキ、西沢、な、波田頼む」

彼はこんなことをしゃべりながらも、チーフメーツの声にに応じて、そのたびに、マスト
の梯子^{はしご}まで駆けて行つては、また、駆けて帰るのであつた。「ね。おい、やってくるだ

ろう。な、おい、頼んだぜ」

「おれたちやチーフメーツの命令でやめただけのもんだ。ボースンからやれっていわれたってどうも、やるわけにや行かないぜ」ストキはがんばった。

「困ったなあ、ほんとに、チョツ！ 頼む、わしは今ちよつとチーフメーツさんが呼んでるから上がって来るから、その間頼むよ。いいかい。おれを助けると思って。な」

ボースンは発育不良な、旅芸人のジョーカー見たいな格好で、マストにとりつけてある梯子はしごのぼを上って行った。

三人の水夫は、そこに腰をおろしてしまった。彼らは、彼らの力が偉大であるということを知った。わずか三人のセーラーであつた。しかも、それが、ただ何ともいわずに、ボイラーからおりただけであつた。それだけなのに、このボイラーが動かず、あのクレインがむなしく待ち、仲仕が徒手傍観し、本船の出帆がおくれ、チーフメーツは青くならなければならぬ。

そして、これは、ただ労働を一時中止するというだけの簡単な理由からなのだ！ そしてこれは、社会の一切の根本は、労働者の労働によって、維持される、ということ語るものだ。きわめて簡単であるのに、われわれの知らされない、唯一の事実なんだ！

水夫たちはそんなふうに感じて、煙草たばこに火をつけた。

藤原は、西沢と波田とに、「これはまだ何でもないんだ。僕らは、こんな詰まらない理由でストライクには移れない。これは、労働者の発作的の癡けいれん擧だ。ストライクは発作的に無計画に起これば、必ず失敗するものだ。しかし、それでも、事によるとほんとうのストライクの、口火にはなるかもしれないけれどね。ストライクの総成員三名なんてのは、古今未聞だろうね」

「僕らは、しかし、この船の船長や、チーフや、ボースンには、あらゆる機会に反抗しなきゃならないんだぜ。船長チーフメーツは共謀で、おれたちあての食費を、会社から前月末に受け取るものだから、それをボースンに月二割で、おもての者に貸しつけさせてるんだぜ。見ろ、だから借金しないと、給料も上がらないし、受けが悪いじゃないか。向こう半年も頭なしのやつはどんどん給料が上がるじゃないか。やつらは、借金の利子を回収するためだけで、給料を上げるんだ。だから、彼らはおれたちに女郎買いを奨励するんだ。借金があれば、月二割の途方もない利益があるのと、それに頭を上げられないし、足止めすることもできるんだからな。だから藤原君なんか、いつまでたってもストキなんだ。だから波田君なんざ、僕よりもいつも進給がおそいんだ」西沢は自分たちのことを例に話し

た。全く藤原はその驚くべき独学の努力のおかげで、学校出の船長などよりも、はるかによく社会的事情にも、一般学術的常識にも、通じていた。

小倉は藤原から、英語、数学、その他の学科を習った。彼は高等海員の試験を受けるつもりで勉強しているのであった。小倉も頭はよかったので、一年余りでナシヨナルリーダーを五まで上げてしまい、代数は高次までやってしまったのであった。そして、船長にしろチーフにしろ、頭脳が明晰めいせいなために、その地位を得たのではないことを知ったのだ。だが、小倉は、自分の位置を、高めることによって、酷使と隷属れいぞくと侮辱とから、逃のがれようとしたのであった。そして、それは結局彼一人ひとりを救うことすら至難であり不可能であることがあらゆる努力を尽くした後、彼を敗残の身にしたことよってわかったのであった。彼は非常に圧迫を憎んだが、身を挺ていして反抗しようとする代わりに、権力の壁にくつついて身を隠そうとたくらんだため、卑怯ひきょうになったのだと、水夫たちからいわれた。

ボースンはデツキからおりて来た。そして三人が煙草をのんでいるところへ来て、チーフメーツは非常におこって、すぐに下船を命ずるといつていたが、自分はやつと頼んで、やめてもらって来たから、どうか、一服したらすぐに荷役にとりかかってもらいたい、そ

うしないと、チーフメーツは、すぐボーレンへ代わりを連れに行く気でのだから、と
いつて来た。

藤原は、産業予備軍が海員においては、組織的に、ボーレンによって動員準備されてあ
る、かつ事情不明のためストライク・ブレーキングが平気で行なわれることを知っていた。
そしてこの場合もそれが行なわれうることを知っていた。で、彼は、仕事につくことが得
策であることを知った。

「それじゃ、一服したらやると、チーフメーツへ返事して来てくれ」と、わけなくストキ
が承諾したので、おどりが上がったボースンはデツキへ上がって行った。

藤原は、西沢と、波田とに、形勢は全く不利であるから、これは時期を見なければいけ
ない、これほどの少数で、完全に勝つためには機会を握ることが第一だ。その時は今では
ない。だから、その時を待つて力を示すために、今は忍んだ方がいい。それに今はなんで
もないことなんだからと、種々^{いろいろ}と話をした。

「だが、今はいい時だがなあ、正月前だし、横浜にはギリギリに帰れるかどうか、という
時なんだからなあ。条件がそろってるんだがなあ、ただ冬であるってことが悪いだけだ。
ボーイ長は雇い入れなしで負傷させて打っちゃってあるし、おれたちは、全く馬車馬か奴

隸かで甘んずるなら、それでもいいだろうけれど、——それに、いま時分、室蘭に休む者
はありやしないと思うんだがなあ」と波田は主戦論を唱えた。

「だから、今は仕事をしなければならぬだろう。今は、室蘭に休んでる者があるかな
いか、ハッキリしてないから、今は仕事をしなければならぬだろう。その代わり、今
夜上陸した時に、僕らは休んでる者があるかないかを探ることができる。で、もしもない
ということになれば、出帆間ぎわに船を動かさないことができるだろう。横浜まで、電報
でセーラーを呼ぶにしても、いくら早くても、四日や、五日はかかるだろう。おまけに正
月だ。正月早々なんだ。ね。それに、ボーイ長を今日きょうというふうに取り扱うか、それを
見なくちや、もしボーイ長に対して、全然船から救護しないということになれば、僕らは
機関部の方にも檣げきを飛ばして、全船の問題としなければならぬと思う。

まずいのは、三上の問題が、未解決で残つてることなんだ。船長側では、それを仕掛け
の種に使うだろうと思われるんだがね。

要するに、ほんとに、僕らの力がその一切を現わしうるのは、一切の奴隸的条件が、僕
らに痛切に感得され、彼らの野獸的殺戮さつりくぶりが暴露される時だけなんだ。その時は、当
分来ないか、または明日あすの朝来るかは、僕らが、ジツと見張っていなければならぬこと

なんだ。ね。だから今よりも、いつか、もつと彼らの暴虐が露骨に現われて、われわれの生命を直接にも、——間接にも顧慮することなく、かえって損傷するという事実がハツキリした時の方がいいだろう。と、僕は思うんだがね」藤原は条理を尽くしてその本質と、作戦とを述べた。

ボースンは降りて来た。衆議は一決して、藤原と波田とはボイラーの上に、西沢は、船底でそれぞれの仕事の持ち場についた。

ボイラーは、ハツチの口よりも長かったので、非常にその作業は困難であつた。けれどもその日の夕方には、三本のボイラーをうまく無事に積みおろすことができた。

さて、それから、万寿丸は、高架栈橋の、石炭漏じょうこ斗の下へ、そのハツチの口を持って行かねばならなかつた。

三〇

ボイラーが、舢はしけへ積み込まれるとすぐに、わが万寿丸は、高架栈橋へ横付けにするために、錨いかりを巻き始めた。

錨を巻き始めると、おもての室の中は、一切合財がガラガラにゆるんでしまいはせぬかと、気がもめるほど震動した。とどろきわたった。ボーイ長は、その弱った神経がこわれるのを、心配するような格好で、耳に栓^{せん}をするのだった。

水夫室のまん中にある蓋^{ふた}をとると、その下は錨鎖のはいる箱（チエンロッカー）になっていた。それはすつかりの鎖が出切った時、その広さは、横六尺、縦六尺五寸、高さ十尺ぐらいであった。そして、それが二つ並んでついていた。上で巻き上げる鎖は、デッキの穴を通つて、この箱の中へ送り込まれるのであった。それをこの箱の中では、波田が、一々、鎖を順序よく並べなければならなかった。そうしないと、鎖が穴の下へたまつてつかえてしまうのである。

波田は、この箱のドブドブの中へ、カンテラをさげてはいるのであった。そして、金棒の先の鉤^{かぎ}になったのを、落ちて来る鎖に引っかけては、順序よく並べねばならなかった。それは急がねばならぬし、力のいることだし、狭いところだし、ぬれていてすべることだし、暗くはあるし、油煙は立つし、息苦しくはあるし、そして、また、時々鎖から鉤がはずれると、肘^{ひじ}で後ろの壁を力一杯つき飛ばすのであったし、鎖が一杯になって来ると、彼は、鎖の中に危うく身を構えて、それにはさまれぬように作業しなければならなかった。

これは一航海に一度でもうんざりする仕事であった。それを、彼は、昨日きのうの朝から、二度目であるのだ。

波田は暗い顔をして、チエンロツカーへおりて行つた。彼は全く、それへはいる時は地獄じごくへおりて行くような気がするのであつた。

彼はチエンロツカーについて悲惨な物語を聞いていたが、それは、いつでも彼がチエンロツカーへはいる場合に、彼の記憶の中から、ムクムクと起き上がって来ては、彼を脅すおどのであつた。

それは一九一〇年代の事であつた。英領植民地のシンガポアの、マレーストリートとバンドストリートとの二街に、赤色煉瓦れんがの三階建ての長屋が両側二町余にわたつて続いていた。その長屋は全部日本人の娼婦しょうぶのいる家であつた。そこは、わが国の大都会、たとえば、横浜とか神戸とかにおける遊郭よりも、数も多く、規模もはるかに大きかつた。そのころは船員はゴロツキが多かつた。それはほん者のゴロツキであつて、陸を食いつめた博徒ばくとなどが、船乗りになつていた。そして、船長などというのものがわしいのが多く、これらの船員と結託しては密航婦を、シンガポアだとか、ホンコンだとか、またはアントワープだとかの遠方までも、大仕掛けで輸送したものだ。その運賃は高率であつて、そ

れに食費は向こう持ちであつて、おまけに船員が航海中最も悩むところの性欲に対して、密航婦を積む以上、好都合なことはなかつた。

密航婦はどんな状態でも、我慢しなければならなかつた。哀れな彼女らは、フォーアピークの中で、窒息して死んでしまつたほどにも、我慢しなければならなかつた、彼女らはビール箱の中で五昼夜も、いいようのない状態で、半死のどたん場まで我慢しなければならなかつた。

ことにチエンロツカーと彼女らとの関係は惨鼻さんびをきわめた。それは、密航婦を船長とボースンとが共謀で、チエンロツカーの中に隠したのであつた。チエンロツカーは、出帆したが最後、入港までは用のないところなのだ、その暗室の鎖の上へ彼女らは、蓆むしろを敷いて寝ていたのだ。彼女らはシンガポアで上陸して、その遊郭に売られるのであつた。水火夫らは毎夜、そのチエンロツカーの蓋ふたをあけてやつた。彼女らは、運動に出された禁錮きんこ囚ゆうのように喜んで、おもての船員たちの室へ来て出してもらつた礼として、（以下十一字不明）。

彼女らにとつても、その航海はビール箱や、フォーアピークなどよりも、**であつたに違ひなかつた。船員たちは浮かれ気味の航海を続け、彼女らは一日も早く、動揺しない

大地を踏みたいとねがっていた。

ところが、ホンコン入港の時に、密航婦を、フォーアピークへ移しかえることを忘れなかったボースンは、何と考え違いしたものか、大切のシンガポアで、有頂天になり過ぎていて、密航婦を、チエンロツカーから出すことを忘れてしまった。

そこで状態は、投とうびよう 錨いかりの際に一度に悪化した。鎖の各片、人肉の各片、骨の各片、蓆むしろの破片ともつれつ、くんずして、チエンホールから、あるいは虚空こくうへ、あるいは鎖と共に海へ、十三人の密航婦を分解、粉碎して、はね飛ばしてしまった。船首甲板に立ち並んでいたボースン、大工はもちろん、水夫、チーフメーツらは肉にく 醬じょうを頭から浴びた。

波田は、チエンロツカーが、そんな歴史を持つことによって、その困難な労働をなお一層不快いやな、堪たえ難いものにした。それを思い出すと、彼は全くチエンロツカーにはいることが、何よりもいやであった。そして、はいつて来る鎖の一片一片が、まるで、自分をねらって飛んででも来るように感じるのだった。

彼は肉体的にはもちろんであるが、精神的にもこの上ない疲労を感じて、チエンロツカーから上がった時はまるで溺死できししそこねた人ようであった。

その仕事着には海底の粘土が、所きらわずにくっついていて、彼の手や顔は、それでい

ろどられて、くまどりしたように見えた。顔の色は劇動のために土色であった。心臓はむやみやたらに、はね上がった。頭が痛く、目がくらんで、彼は、しばらくデツキへ打つ倒れるか、その辺にあるどんなどころへでも、打つ倒れるのが例であった。

だれかが、このチエンロツカーにはいらなかつたならば船は動き得ないのであつた。波田は、破れそうな心臓に苦しみながら、どんなに多く与え、少し得ているかを思わずにはいられないのであつた。

「おれたちは死ぬほど苦しんで、こんなありさまなのに、遊び抜いて、住みもしない別荘を、十も持った人間が、この船を持つてるのだ！」

万寿丸はかくして栈橋へ横付けになることができた。

栈橋の上は、夕張炭田から、地下の坑夫らの手によつて、掘り出された石炭が、沢山の炭車に満載されて、船の上の漏斗しゅうとこへ来ては、それを吐き出して帰って行くのだった。

数十間の高さに、海中に突き出している高架栈橋上の馱夫や、仲仕の仕事は、たとえように困るほど寒いものに相違なかつた。

人はストーブにあたつて、暖かいコーヒー、暖かい肉を摂るべき時候であつた。そして多くの労働者は、それを作り出すために、各おのおの、危険と鼻面はなづらを突き合わせて、凍え、飢え、

さまよいながら、労働すべきであった。で、一切はおめでたくその通りに進行し、幾千代かけてのどかなる年の初めが、十日の内には来るべきであり、また、めでたくも曆さえ間違わなくば来るのであった。

そこでブルジョアどもは新年宴会をやるのであった。二次会が開かれるのであった。が、そんなところまで、話を飛び越えてはならない。

三一

ボーラーを吐き出すと、すぐに飯を食った水夫たちはそのまま船首甲板へ上がって、棧橋付けの作業にとりかかった。ボーイ長は、食事の時に藤原に頼んで、

「今夜はぜひ病院へやつてもらおうように、船長に頼んでくれませんか、もうこの上とても辛抱がなりません」というのであった。

「いいよ。だがね、今から、棧橋だから、棧橋へついてからにした方がいいと思うよ。それにまず、そんなものはどうでもいいとしても、順序つてもものがあるそうだから、ボースンに一度話して、ボースンから最初に話し込んでもらって、僕も、その時、一緒について

行つて話をつけたらいいと思うよ。ま、何にしても、苦しいだろうが、今夜まで待つてくれたまえね。今度は僕も、そのつもりでいるんだから」と藤原は快く、請け合つてくれた。ボーイ長は非常に喜んだ。

棧橋にも、馬蹄形ばていがたの街まちにも、その後ろなる山も、高原も、みな、美しく、厚い、雪で念入りにおおわれ、雪面を吹きまくる北海道の風はしびれるように痛かった。

万寿丸は棧橋へついた。棧橋の漏斗じょうこはその長いくちばしを、船のハツチの中へ差しのぞけた。それからは白い雪の代わりに黒い石炭が降つて来た。

船員たちは、船長から、水火夫に至るまで、自分を、完全に縛りつけている、その動揺する家屋から、解放しようとして、それぞれ準備に忙しかつた。

船長は、室蘭から少し内地へはいつた登別のぼりべつという温泉地へ、室蘭碇泊ていはく中は必ず泊まり込んでいた。そこには、彼の妻や子供の代わりに、彼の愛妾あいしやうがいるのであつた。

一般に北海道に美人が多いかどうかは、わからないが、しかし、飛び抜けた美人を時々、われわれは北海道で見る。色が「抜ける」ほど白くて、顔立ちの非常に高雅な美人を、われわれは、雪に埋うずもれた山腹の遊郭にさえ見いだすことができた。それは寂しい情景であつた。船員たちにとつては、彼らの手に負えない夢幻的な情緒であつた。従つて水夫たち

にとつては、それは本能的な、肉欲的な、一対照より以外ではなかつた。

彼は、今夜も、そこへ行くために、汽車の時間表とにらめっこをしながら、したくを急いでいた。

船長が、そのダイアモンドのピンを、ネクタイに「優雅」にさそうとしている時に、純白の服を着けたボーイは船長室の扉をたたいた。

「何だ？」船長は怒鳴つた。

「ボースンとストキとが、お目にかかりたいといつて、サロンで待つております」

「用事だつたらチーフメーツへ話せ、といえ」彼はピンの格好について、研究を続けた。

ボーイはサロンに待つていた、ボースンとストキに、その由を伝えた。

「それじゃ」と、ボースンは、それをいいしおに、ストキにいかけた時であつた。

「どうしても、会わなきゃならないんだ！ ぜひ、会いたいつて、も一度取り次いでくれたまえ」ストキは、ボースンをおさえてボーイにいつた。

ボーイは「何だい一体」とストキにきいた。

「ナアに、ちよつと会つて話せばいいことなんだよ」気軽に藤原は答えた。

「奴さん、登別に行くんで、急いでるんだよ」

「ところが、こつちはもつと急ぎの用事なんだ、ちよつと頼む」

ボーイは再び船長室の扉をたたいた。

「ぜひお目にかかりたいといっています」

「だめだ！ 時間がないんだ！」船長は鏡の中の自分に見入っていたが、チエツと舌打ちをした。

「うるさいやつらだ、用事は何だときいて見ろ」ばか野郎めらが、と、彼は考えの中でつけ足した。——手前たち^{てまえ}全体の運命は横浜までだ。代わりのボースンはもう横浜まで来てるんだのに、ばか野郎らが——船長は蛆^{うじむし}虫どもの低能さに対して、ちよつと冷やかしてやつてもいい、という気を起こしたほどであった。

「ボーイ長の負傷の手当てをするために、室蘭公立病院へやっていたただきたい、というのだそうでございます」

「ボーイ長！ そんなものはだめだ、と、そういつとけ」何だ一体ボーイ長の負傷とは、ばかな。そんなものは船の費用から出せるかい。べら棒な。冗談も休み休み、機^{おり}を見ていうがいいんだ。時もあるうに、自分らの首の運命の決していようという時に。それに今は上陸間ぎわじゃないか、ゴロツキどもめが！ 船長は、ボーイ長が負傷をしたことを、今、

言われて見て、思い出すには出したのであった。そして、それは手当てをしなければならぬであろう。——が、——それはこんな場合ではもちろんはずだ！ と彼は思ったのであった。

一体それはいつのことだ。横浜でやるべきではないか、今ごろになってそんなことをいうのは因縁をつけるというものだ！ しかし、これは彼の思い違いであった。横浜では船長に話す間がなかったし、それに、チーフメートは、船長に相談してからにするというので、横浜では、フイになったのであった。

船長は、登別の温泉に、彼女——それは全く美しい若い女であった。そしてそれは、白らかば樺のように、山のおいの高い、澄んだ溪流のように作為のない、自然人であった。——をしつかりと、あのあらゆる力と情とをこめて、彼女を抱き締めることの回想と予想とで、血なまぐさい、汚れた、現実的な、ボーイ長の問題などは、その余地を頭の中へ置き得ようはずがないのであった。

「どうしても、それが必要なら、それはチーフメーツがうまく片をつける事柄なんだ！」船長は、ズボン——押し出してしまったあとの絵の具チューブかなんぞのように、ピツタリ一重えにくつついた——の中へ足を通した。

「北海道じゃちよつと類がない、さすがしい気持ちなもんだ。ズボンの折り目の立っているのは」彼はちよつと足を前へ踏み出すように振って見た。「上等」それで彼のズボンの試運転は通過した。

彼は十八の少年のように急ぎながら、彼女に与える指輪を、自分の小指へ光らしながら、理想的に船長らしい、スツキリした立派な服装と、その姿勢とを、サロンドェツキへ現わした。

そこには、その寒さにもかかわらず、ストキとボースンとが立って、彼の出て来るのを待っていたのであった。彼はハツとして立ち止まった。

ボースンは、とつつかまえられた、コソ泥棒みたいに、しきりに尻しりごみしながら、ストキにつかまれ、励まされて待っていたのであった。が、彼は一体、何をいえばいいのだ！彼には言うべきことはなかった。けがをしたのは見習いであって、女房子を持った哀れな、老いた彼ではなかった。「おれはこの船をほうり出されたらどこへ行くことができるんだらう。橋の上か、墓場かだけじゃないか、おれは今、おれのためよりも、子供らや家内のために、働いているだけのものなのに、おれは、……ストキは全く困ったことをさせるわい。見習いのけがとおれと、一体何の、……そりや関係はあるにしても、船長が一

度いかんと言つたものをナア……おれは、第一寒くてやり切れないや」

ボースンは、ストキの顔をせつぱ詰まつて拝むようにながめ、そしてまた、船長にあわてて敬礼をした。

船長は黙つて行きすぎようとして、タラップの方へ歩みかけた。

ストキはボースンを小つぴどくつついた。ボースンは目だけをパチパチさせて、口は固くつぐんでいた。それは一秒おそくてもいけなかつた。続いて第二発目のストキの拳固げんこがボースンの横つ腹へ飛んで来た。と同時に、

「船長」と太い、低い、重々しい声がおさえつけるように、ストキの口から呼ばれた。

そしてストキは、ボースンを打ちやらかしたまま、船長が今おりてゆこうとするその前へつつ立つた。

「船長！ 水夫見習いの安井昇のぼるつてのが負傷したのは知つてますか、それが、今日は病院へやつてもらいたいといつてるんです」

「それがどうしたんだ」と船長は頭のさきから、足の爪つまさき先まで、ストキの長さを目で測量した。

「上陸禁止にでもなつていいのか、そうでなかつたら、今日でも明日あすでも病院へ行けるじ

やないか、だが何だつて、お前はそんなところに立ちふさがってるんだい」船長は、暴化しけの時に、夜中、深海測定をやるのと同様に、厳密に、幾度も幾度もストキの長さを、全く腹が立って頭の熱くなるほどの、熱心さと冷静さで測定した。

藤原はそのあらゆる激怒と、憤懣ふんまんとを、船長の前で、そのしつかり踏んだ足の下に踏みつけて立っていた。

「だが、負傷手当を船から出すべきじゃありませんか。それに、足を負傷して寝ているものが、この雪の中を歩いて行くというわけにも行きませんか。俵賃くろまと、診察料とを払ってくださいまし。それに、……」

船長は、爆発した。

「負傷手当を船から『出すべき』だ？ べきだとは何だ！ べきだとは！ そんな生意気な横柄おうへいなことをいうんだつたら、どうとも勝手にしろ、おれは、手前てめえらに相手になつて暇はないんだ！ ばかな！」

船長は怒鳴りつけると、そのまま、棧橋へとおりて行った。

藤原は自分の足の下に踏んでいたかんしゃく玉を、そうと、やっぱりおさえつづけた。彼はアハハハハと、船長の後ろ姿に向かつて哄笑こうしょうを浴びせかけた。

船長は棧橋の上へ飛び上がった。ポケットで金が鳴った。彼は、ひどく怒りはしたが、先を急いでいた。

「明日、片をつけてやるから」と自分をなだめながら、棧橋の闇へと消えて行った。

彼は、しばらくすると、ほとんど全速力で駆け足に移った。何だか、メスが、自分の心臓に向かつて光りそうであつた。このごろはどうも、おかしい。

三上——藤原——、どうもよくない傾向だ。彼は、後ろを振り向いた、狐のように幾度も幾度も振り向いた、棧橋は黒く、まつ暗であつた。本船の碇泊燈が、後ろに寒そうに悲しくまたいたっていた。

やがて棧橋が尽きて、海岸に出た。雪は二尺余り積もっていた。海岸に小溝のように深く雪道が踏み固められてあつた。

室蘭の町は廃墟のように、雪の灰の中からところどころのぞいていた。人魂のように街の灯が、港の水に映っていた。のろいの声を揚げて風が波をつき刺した。彼は外套の襟を立て、首巻きを耳まで巻いてフルスピードで停車場の方へと急いだ。

停車場は室蘭の町をズツと深く入り込んで、馬蹄形ばていがたの一端に寄つた方にあつた。さびしい、終点駅であつた。停車場は海岸の低地にあつて、その上の方には、遊郭の灯が特に

明るく光っていた。

冷酷な、荒涼たる自然であった。その前では人は互いにくつき合い、互いが、互いに温め合^{あたた}い、たすけ合^あわねばならないように感ぜしめられるのであった。

何だか、人なつっこくなるのであった。

船長はストキや船員を反撥^{はんぱつ}して、登別へ引きつけられた。そこでは彼は自然の冷酷さからしばらく逃^{のが}れうるのだ！

ストキはわめくような笑いを船長に浴びせると、そのままグルリと振りかえって、おもての方へ帰って行った。ボースンは、すごすごとついでに行った。

おもてでは大工は、ボースンが来るのを、したくをすっかり済まして待つており、水夫たちは藤原の帰るのを待ちくたびれていた。

藤原は、おもてへはいった。食卓の前のベンチへ倒れるように腰をおろした。

「どうだった」と皆はきいた。

「だめだ！ 今度はチーフメーツだ」と彼は答えた。もし彼は、彼がボーイ長が診察を受け、治療を受けるだけの金を持つていたならば、チーフメーツへなんぞ、再び交渉に行くわけがなかった。その結果は、あまりに彼にはハッキリ見え透いている。けれども、彼が

もし、ボーイ長を自分の費用で連れて行き得ない限りは、彼はありとあらゆる手段を試みる必要があったのである、そして、それは、また、彼を救うと同時に、ボーイ長を絶望から、しばらくでも引き止めて置くところの、唯一の残された方法なのであった。

「チーフメーツの方もどうなるかわからないから、もし、それがだめだったら、おもてで出し合うってことにしよう。そうすることは、まるで船主に口ハでくれてやるようなもんだが、この際仕方が、ほかにあるまい。そして大丈夫チーフもだめだと思うんだ。船長の許さないものをおれが、というに相場はきまつてるんだ。だから、一人頭二円ずつぐらい金を集めて置いてくれないか、それはボースンに頼もう。今持ち合わせのない者は、ボースンに立て替えて置いてもらうこと。ということにしていたらいいだろう。ね、僕は、チーフのところへ行行って来るから、頼みますよ」

彼は出て行つた。波田は、彼が出て行つてしばらくすると、ボースンに、五円貸してくれと頼んだ。そして二円をボーイ長へ割きいて、三円をふところへしまひ込んだ。そして、彼は、デツキを通つて、チーフメーツの室の付近へ行つて、藤原の交渉を聞こうと試みた。しかし、チーフメーツの室は固く扉とびらに錠かぎがおろされて、人の気配けはいがしなかった。彼はサロンドエツキを一回りした。けれども何事も、そこでは起こつてはいなかったし、また、だれ

もそこにはいなかった。

波田は——それでは、藤原君はどこへ行つたんだ？——と思ひながら、おもてへ歸つて来た。

藤原はもう歸つて来て、水夫たちに、チーフメーツは、船長よりも先にサンパンで、海から上陸したあとだったことを報告したところであつた。

そこで、ボーイ長はどうしよう、という相談が水夫らと、四人の舵取りかじとの間に行なわれた。

三二二

相談の結果、病院が夜では都合が悪くはないかという動議のあつたため、なるほど、それは昼の方がいいだろう。では明日午前中あすに、行くことにして、ついでといつては済まないが、この事件の最初からの関係者として藤原君と、波田君とに、病院までついて行つて、もらおうと言うことになった。金は五人の水夫と、四人の舵取りと、一人のひとり大工とで二円ずつ出せば、二十円あるから、それで、もし必要ならば入院させて、「とも」で入費を持

たないというようなことであつたら、おもてで持とう。その代わり、ともをやつらは覚悟をするがいいや、というようなことになつた。

安井は、そのきたない、暗い、寒い寝箱の中で、その傷の疼痛とうつうのために、時々顔をしかめながら、一生懸命にことの成り行きを聞いていた。そして、藤原のそれほどの努力にもかかわらず、また、明日に延びたと聞いて、彼は心持ち持ち上げていた、その頭をまたぐつたりと落としてしまった。今夜は病院へ行けるといふ、彼にとっては唯一よろこの歡びが消えてしまったのであつた。彼は、今までと「同じ」一夜をまた、この船室で苦しみ通さなければならぬということに、まっ黒い絶望を感じたのであつた。

しかし、何ともならなかつた、事情は彼も聞いていた通りであつた、「とも」の人間にとつては、彼は、その生命でも一顧の価値なきものだといふことが、念入りに繰りかえされて聞かされたに過ぎないのであつた。そして、彼は、自分の生命がほとんど、生まれ落ちてから、一顧の価値だもなく、それはちようど産みつけられた蛆うじが大きくなるように、大きくなつたのである。いつでも、彼の生きていることは、ほかのだれかの生きていることと、そのパンの分配の時に、おそろしく窮屈な思いをしなかつたことのなかつた、彼の全生涯——わずか十八年ではあるが、その中の確かに十四、五年を占める——を、その傷

の疼痛と共に、彼に手きびしく思い知らせた。

「いつそ、産まれなければよかった」と思われるほど、あるいは事実において、その人間を餓死か、自殺かに導くような、「いつそ、死んでしまった方がましだ」と痛切に感ぜざるを得ないような状態が、なぜ存在するのか？ そして、それは永久に存在しなければならぬものか？

一方には「腹がすかない」という「病氣」のために、薬を飲む階級があり、一方には「飯が食えない」という「健康」のために死ぬ階級があるということは、地球が円くできていることと同様に、何ともしようのないことであるか？ それは時が、種を植えており、その種が生えており、すでに実ついているところもあるのだ。だが、傍路へはいつてはならない。そんなことはあまりにわかり切ったことなのだ。それはやつぱり、飯の食えない、健康体の人たち、すなわち労働者たちが、命じられている仕事の一つなのだ。

藤原は、ボーイ長の寝箱のそばに腰をおろして、今日の顛末を話した。種々とその成り行きを述べて、こういった。

「労働階級は、君の場合のように、ハッキリ現われた場合だけ、資本制生産のために、その生命の危難に面するということを覚るのだが、それは実はもうおそすぎてるんだ。賃銀

労働者であることが、すでに生命を搾取されていることなんだ。だから、工場法にだって、生命を失った場合に、その生命に対する支払い額のミニマムが決めてあるじゃないか、それが、労働力、いいかえれば、人間の生命力の搾取に、その基礎を置いてなっているものであるならば、それが、どんな形において生命が消耗されようと、ブルジョアジーにとって、驚くべき理由がないだろう。君の生命は、君にとって永久に大切であるが、ブルジョアジーにとっては、君の生命が搾取されうる間だけ、役に立ちうるというだけなんだ！産業予備軍は無数だ！ 僕らは今、一切残らず、そういった境遇の下にあるんだ。そして、お互いにかみつき合おうとしている。ばかな話だ！ 僕らは、生きる道を探るのだ。君の、今の直接の生きる道が医者にかかることにあるように、労働者階級は、階級としての、生命の道へまっしぐらに進むべき時なんだ！」

それは、ボーイ長へ話してるといよりも、彼がひとり言をいってる、と言った方が正当であつたくらいだった。

波田、西沢、小倉などはまだ上陸をせずに、一緒に、彼の話を聞いていた。

水夫では、波田、コーターマスターでは小倉が、今夜の当番であつた。

波田、小倉、西沢、藤原と、四人の中で、酒を飲むのは西沢だけであつた、あとの三人

は酒よりも甘いものであった。特に波田と来ては、前にもいったように、菓子のために「身を持ちくずす」ほどだったのだ。

「みんな、東洋軒へ行つて、お茶でも飲みながら、話をしようか」と、藤原は、皆が自分を待つてくれたのが、——上陸を十分延ばすことが、どんなにつらいことかは、読者は船長の例で知っているはずだ——気の毒になつて、皆を菓子屋へ誘つた。

「よかろう」波田は、懐中の三円——その月末には二割の利子で月給から天引きされるところの借金——をおさえながら叫んだ。

皆はそろつて出かけた。出がけに、波田は、ボーイ長に言つた。

「すぐ帰つて来るよ。菓子を買つて来るぜ、待つてたまえよ。そして、明日あすは、午前中に病院へ行くんだ！　すぐ帰るからね」彼は三人のあとを追っかけて、棧橋へとタラップを、猿さるのように伝つて飛んで降りた。

西沢たち三人はタラップを降り切つたところで彼を待つていた。

それは寒い夜であつた。水夫たちは不完全な防寒具で、皆震え上がつていた。オーバーを持つていたのは藤原と小倉とだけであつた。彼らは、どこかの古着屋で、それを買つたのだ。藤原のは上着の大き過ぎるくらいに小さかつたし、小倉のは米一斗袋に三升詰めた

くらいにダブダブしていた。

彼らは馬蹄^{ばてい}型の海岸を一行に並んで、黙々として歩いた。歯が痛かった。風は頬^{ほほ}を透^{とお}して、歯の神経をひどく刺激するのであった。水夫たちは、彼らが貧乏であるために、必要以上に苦しまねばならないことを思っていた。

「メリヤスの新しいシャツが一枚あれば」波田は「どのくらい暖かいだろうなあ」と思いながら油と垢^{あか}とでガワガワになったズボンのポケットの中で、拳固^{げんこ}を力一杯で握り固めたり、延ばしたりした。

西沢はオーバーがない代わりに、スエーターを着込んでいた。それは、「買いかぶった」綿製の物であった。「随分商人はひどいことをしやがる」もつとも、彼はそれに一円二十銭を夜店で出したということは、あまり吹^{ふい}聴^{ちよう}はしない方が賢いと思っていた。

こうしてめいめいがはなはだしく貧弱な防寒具^{もと}の下に、はなはだしく寒い、寂しい、荒涼たる、一口にいえば、といつても、いいようのない、そうだ、それは「死」にいやでも応でも考えを押しつけねば置かない関係、すなわち、プロレタリア対寒冷！ の、本能的の寂しさの中を、四人は、港の街^{まち}のさびしい通りの、明るい二階で暖かいお茶と、お菓子とが待っていることを思つて急いで行くのであった。

左側は、駅から迂回^{うかい}して来た鉄路のある山腹の切断面、それから高架線、それらが万寿のかかつてる方へ並行していた。積まれた石炭の上には雪がすっかり塗り上げをしていた。ところどころに、人足^{にんそく}の茶飲み所兼監督の詰め所の交番のようなものが「置い」てあった。彼らは、石炭と海との親^{おや}不知^{しらず}、石炭と石炭との山の谿間^{たにま}を通つて、夕^{ゆう}張^{はり}炭山へ続いている鉄道線路を越して、室蘭の市街へ出た。その街^{まち}は、昼も夜のように寂しい感じのする街であった。方角を忘れてしまったが、室蘭製鋼所のある反対側、棧橋を上がつて右の方へ大通りをさびしく歩いて行くと、道が、上中下三段ぐらいに別れて、山の側面^{おの}へ各^{おの}家の並びを持つて並行についている。その中段の通りへ、東洋軒という、この町で見つけた初めビツクリしたほど、立派な「文化的」な構えと「文化的」な菓子売っている店があった。ガラス製の立派な箱が十五、六、その広い鋪^{みせ}に並べてあつて、その中には、外国人がクリスマスに食べるようなパイや、その他種々な生菓子^{たな}が並べてあつて、一方の棚^{たな}の中には、栗^{くり}饅^{まん}頭^{じゆう}や、金つばや、鹿^かの子^こなどという東京風の蒸し菓子^{たな}が陳列してあつた。その店の間から靴^{くつ}を脱いで、階段をのぼると、二階二間がホールになっていた、はいつて左側のは、大テーブルが一つと椅子^{いす}がいくつか置いてあつた。右の室は日本室で六畳であつた。

セーラーたちは、テーブルの方の室へ、油だらけな同勢を押し込んだ。けれども東洋軒は驚かなかつたというのは、波田は、いつもその格好で来て、必ず二円ぐらゐは食つて行くからであつた。

テーブルには白い布がかけてあつた。それを力をいれて指でこすると、黒くなるのであつた。どんなに手に石鹼せつけんをつけて軽石でみがいたあとでも！ 彼らはそれで用心をした。金つばと、栗饅頭とを小僧さんがお茶と一緒に持つて来てくれた。

彼らは、まるで飢饉ききん地方の住民のように、飛びついて、食べた。ことにその中でも、波田は仲間からさえ驚嘆されるのであつた。しかし、彼らがそのものを要求するのは、囚人が甘いものを宝玉よりも数十倍も数千倍も、比較にならぬほど望み、ほしがると同じことだ。

何かを人間から、奪うならば、たちまち奪われたものが、奪われたものにとつては一番切実な要求となり、願望となるのであろう。光線を奪えば光線、空気を奪えば空気を、活動、音声、嗜好品しこうひん、それらは、それが奪われるまでは第二義的であつても、奪われると同時に、それは一切第一義的な欲望に変わるのだ。自由を奪われたものは自由を生命より尊いと思うようになるものだ。

菓子には、銀色の小さなフオークが楊枝代わりについていた。紅茶のコップは銀のスプーンがついていた。彼らは、これらの器物を汚さないように、気にしながら、たちまちのうちに第一の皿さらをあけて、第二番目が注文された。

三三

彼らは甘いものに対する渴望がやいやされた。そこでボーイ長へ持って帰る菓子が注文された。それから彼らは、ボーイ長の負傷について「とも」の取った態度について、われわれは、どういう形において抗議するか、また、三上のような、事件をひき起こさずには置かない、船長のめちやくちやな態度に対して、そしてこれらのことを交渉するならば、労働時間もハッキリと決めてもらうこと、それに賃銀がまるで相場はずれだから、もう少し上げてもらうこと。——当時欧州大戦乱時代であつて、石炭は水夫たちの寝るべき室にまで詰め込まれたほどであり、従つて、汽船会社の利益は莫ばくたい大なものであつた。——それに、日曜でも何でも出帆入港でとられれば、それで休日はおじやんになるが、それは休日を翌日回しということにしてもらう。これらのことは、ぜひ片をつけるべき性質のもの

であり、またつけねばならない状態に、われわれは追い迫られている。そこで、これらのことをいつ、交渉を始めるがいいかということの話が、彼らの間に、西沢によって口を切られて問題になった。

「それは、交渉をチーフメーツに対してやるか、または最初つから船長に対してやるべきものか、それが問題だね」と小倉は言った。

「もちろんそれは決定権を持つている船長との最初で最後の交渉にならねばならぬだろう」藤原が答えた。

「君の言うように、それが最初で最後であると言うならば、交渉を拒絶された場合には、どうなるんだろう」小倉はその点をおそれていた。もし交渉が不調になったりした場合、同盟下船とでもいうことになれば自分は明らかに乗船停止を食うだろう。そうすると、自分は高等海員の免状をとる資格がなくなってしまうんだ！ 彼は苦しい立場にあった。彼はもし、高等海員になってやや多い収入を得ないならば、山陰道さんいんどうの山中で、冷酷な自然と、惨忍なる搾取との迫害から、その僻村へきそん全体が寒さのために凍死し、飢餓のために餓死しなければならぬのであった。

彼の村は、山陽道と山陰道を分ける中国の脊せきり梁りょう山脈の北側に、熊笹くまざさを背に、岩に

腰をおろしてもたれかかっているような、人煙まれな險阻な寒村であった。その村の者は森林の産物をその生活資料としていた。ところがそれらの森林は国有林になってしまった。そこで、その村の者は、監獄へ行くか、餓えるかという二つの道のどちらかを取るようになりいられた。小倉の生まれた村の小径とも、谷川ともわからない山径は、監獄の方へ続いていく。わずか三軒の家をもつて成り立っているこの村は、その各家から戸主を監獄へ奪われた。村から最年少は六つ、最年長十六の間の、十三人の男児は滅亡に瀕している故郷を救うために、社のように神寂びたその村をあとに、世の中を目がけて飛び出したのである。そして、村に金を送る代わりに、村から労働力を搾取されて来たという形なのであった。

でもし、彼が、これに参与して、この企てが失敗するならば、彼は、今まで三年間、全力を傾倒してそれに向かって進んだ高等海員どころでなく、下級船員からさえもその職業的生命を奪われることになるのであった。

彼は三上とサンパンを押した時にも、同様な感じを味わった。深い憂悶と、人生に対する疑問とが彼を蜘蛛の網のように包みとり巻いた。

「それは闘争になるだろう。僕らは、何の武器も持たないから、ただ固まって、何もしな

いだけの方法をとるだろう。そうすると、船では雇い止めして、乗船停止を食わずだろう。事によれば棧橋から道は監獄へ続いてもかもしれないよ」藤原は答えた。

「それは僕らの生活の破滅にはならないだろうか、いや、僕らだけではなくて、僕らの背後にある老人や幼児たちの運命を破滅に導くだろう。僕は僕の故郷のことを考えると、どんな忍耐でもやりたいと思うよ」小倉は彼の哀れな気の毒な心の中に、涙と共に浮かぶ考えを述べるのであった。

「そうだ！ 君は君の忍びうる最大の『忍耐』をなし得た時に、君は君のなしうる最大の力で同胞を殺戮さつりくし、それからパンを奪ったという結果を見ることになるんだ」藤原はほとんど冷酷そのもののような顔つきになっていた。そしてその目だけは火のように燃えて、光っているのであった。

「そうは思われないよ。僕が今職業を失えば、僕の故郷では、どんなに嘆くか知れやしないよ。それだけではないんだ。僕の家では食う物に困ってしまうんだ！」小倉は感情がたかぶって来た。彼の頭には、彼が村を去る時の悲痛な光景が涙に曇って浮かんで来るのであった。

「同情する！ 労働者はほとんどすべてが、罷工ひこうすることのできない地位につき落とされ

ているんだ！ あらゆる組織がおれたちを簀巻すまきにしているんだ。そして、おれたちは首を切られても罷工もできないんだ。直立不動の姿勢を保って、なぐつても、けられても、それをくずせない新兵よりもおれたちは苦しいのだ。資本制は、労働者に一人残らず狭きよう窄衣さくい——監獄で狂暴な囚人に着せる革かわの衣類、それを着ると、からだは自由がきかなくなつて、非常な苦痛を感じる——を着せて、手錠、足錠をはめているのだ」藤原は、その目だけがますます然え上がった。が顔はそれと反対にだんだん血の気があせて青ざめて行つた。

「だが、小倉君、君はどつちにしてもだれかの死には、関係しないわけには行かないだろう、ボーイ長は、自分のパンを求めに来て、鉤はりのついた餌えさを食った魚のように、自分を生命の危難に打ぶつつけてしまった。それが、『今』の問題なんだ。これはボーイ長にその形をとって現われたのだが、パンを得るために、船のりになるなどと言うことは、針のついた餌に釣られた魚と同じことなんだ！ それはわれわれ全体に一樣に変わりのない運命なんだ。われわれには、鉤かぎについた餅よりほかには、どこにも餌がないのだ。君も二度まで沈没船に乗っていたというじゃないか、その時に、もし万一君が死んでいたら、どのくらい君の家族は嘆いただろう。もしその時に、君がだれかに救われなかったとしたら、君は、

その嘆きを家の者につけなければならなかつたんだ、そうではあるまいか。それは、どこへ行つても餌に鉤がついてるから起こることなんだ。

だが、小倉君、君の言うことはわかる。僕らは馬車馬のように生活するか、餓死するかどちらかなんだ。ほんとうに、僕らが、僕らの持っている偉大な力に、自分から驚く時の来るまでは、いたずらに、僕らは犬死にをしなければならぬんだ」上陸の時以外に彼らが口にするのできない一杯の紅茶は、彼らを興奮せしめたように見えた。藤原は自分でもそう思いながら、自分に追つかけられて話しつづけるのであつた。

「わかつたよ、藤原君！ 僕らは、一飛びに跳ぶことよりもジリジリ進む方がいいんだろ。自分だけがブルジョアになろうとするよりも、成功しなくてもプロレタリアの戦士で、倒れた方がいいんだ。僕には、それがよくわかるんだ。そしていつも君たちには敬服してるんだ。だが、僕には、その勇氣と、決断と、信念とがないんだ！ つまり憶病者なんだ！ 僕は！ ひきょうもの卑怯者なんだ！ だが、僕は、今度は、やるよ、やって見よう！ コーターマスター四人をも起たせて見よう。僕にもようやくわかつたような気がするよ」小倉は、ようやく厄介なものを払いのけた、と言つたふうな顔つきをして残つてる菓子を摘まんだ。「それで」と西沢は口を切つた。「だれが船長に打ぶつつかるんだい」彼は、まるつ切り黙

つてるわけにも行かない場合にしゃべるような、それと同じ気持ちで、同じようなことをそこへ吐き出した。

「おれたちじゃとても太刀打ちができねえから、やっぱりストキに頼むんだね」

「じゃあ、今夜要求条件をこしらえて、それに全部で連印して、それを船長に提出しようじゃないか」波田がいった。

「いいだろう」皆が賛成した。

「だがそれはいつやるか？ その時を選ぶことが、勝つも負けるも、時を選定すると言うことになるだけだと僕は思うんだ、ことに、船長は帰りを急いでるからね。正月は目の前だしね。おれたちの用事がなくなつた時に、おれたちが力を示そうとしたって、それやだめなことだから」藤原は、実戦家としての提案をした。

「だがさつきも言ったことだが、要求がはねつけられた時はどういう対策を取るんだね」小倉はそれを聞いた。「始めることになれば、おれも徹底的にやらねばならん」と彼も覚悟したのであつた。

「それは、ストライクが皆の意志で決定されるように皆で、決定しなければならぬ重大な問題だ。要求条件を出したただけでは、まだなんでもないんだからね、それで容れられな

い時に、休業するか、怠けるか、下船しちまうか、等の方法があるわけだね。こんなところで下船するというわけにも行かないから、それもやむを得ない時はもちろん、裸でもこの雪の中へおりる覚悟はしているんだが、下船するということは、最後の場合にとつて置いて、そう大切でない時は怠けて、これをやっては絶対にいけないというような仕事の日には休業しちまうんだね。これが一番効果の上がる方法だと思うんだ」リーダーは、実戦の闘士、藤原であつた！

「そんなことは、一体どこで相談をするんだい」西沢がたずねた。

「それは、もし、コーターマスター全部が承知したら、コーターマスターの室でやろうじやないか」と小倉が言った。

「それはいいだろう」で、本部は三畳敷きに足りない舵取りかじとの室を第一の候補地にした。コーターマスターがはいらなかつたら「おもてでいいさ」ということになった。

「それで、いつ一体やるのかい」波田が今度は聞いた。

「いつがいいと思う」と藤原は反問した。「それは皆が一番いいと思つた時が、いいんだ」「おれは出帆の時がいいと思うぜ。出帆の時におれたちが遊んだら、第一ワイアやホーサーが棧橋からはずれっこねえんだからな。ヘッヘッヘヘヘ」と西沢は、戦闘を開始した

ような気でいた。

「そうさなあ……出帆の間ぎわに要求書をブリτζェへ持つて行くか？」小倉が言った。

「『これを承認してください。何でもあたり前のことです』とやるか」

「そうじゃないよ。要求書を、やつ目の前へつきつけるんだよ。『やい見えるかい、え、これに判をつけ、さもねえと、正月は横浜じゃできねえぜ』と高飛車たかびしゃに出たら随分痛快だろうね」西沢はいつた。

「出帆の時はいいだろう。第一、おれはチエンロッカーにはいらんないよ」波田は、自分のあの困難な仕事、船の出帆に際して、どうしても省略することのできない重大な作業であることを、ハッキリ見ることができた。「おれたちを月給盗どろぼう棒ぼうみたいに見えることは、まるで違つてゐることをハッキリ思い知らせた方がいいだろうよ」彼は、何だかほんとうに、人間として、労働者として、貴い犠牲的な、偉大な事業に、初めて携わりうるといふ晴れがましい誇りと、自信とを感じないわけには行かなかつた。

「だが、これがよし通つたにしても、これが最後の勝利ではないということ、よく考えて、なるだけ大事をとつてくれないと困るよ。たとえば要求は通つたけれど、あとで気をゆるめたために、毎航海毎航海、一人ひとりずつ下船させられたなんてことになる、二、三航

海のうちに、また元々どおり、ほかの人間は搾しぼられるし、僕らだつてばかを見なければやらないからね、争議は、その時も大切には相違ないが、跡始末がもつと大切なんだからね」藤原は、彼の苦い経験を思い起こした。「せつかくきれいに掃除そうじしても塵取りちりとりですっかり取つてしまわないで、すみつこの方のためときでもすると、埃ほこりはすぐに飛び出して、前よりもきたなくなるようなものだからね。ことに、三上のような捨てっぱちなやり方は、残った同志のことを思えばやれないはずだと思うよ」藤原は、一切のプログラムを腹案しつと言つた。「でボースンやカムネ（カーペンター——大工——の訛なまり）はどうするんだね」波田はボースンや大工が裏切り者になりはしないかを恐れた。彼らは籠かごの中で孵かえつた目白のようなものであつた。自分の牢獄ろうごくを出ることを拒む、その中で生まれた子供のようであつた。彼らは船以外に絶対には、パンを得られないほど、船に同化されていた。たとえば彼らは、ちょうど人間ほどの太さのねじ釘くぎにされてしまったのだ。それは船のどこかの部分に忘れられたようにはまり込んでいるのだ。そして、それは大切なねじ釘なんだ。だから錆さびびるまでそこへそのまま置かれるのだ。錆さびびると新しいのと取り換えられねばならない。

彼らはねじ釘の本質に基づいて、船体に錆さびびついているものと見なければならなかつた。

「よつぽど例外でもなければ、あいつらが船長に闘争を宣言するなんてこたあないよ」とストキもいった。

「それやあたり前さ、今夜だって、ボースン、大工は、チーフメーツに大黒楼に呼ばれて、そこで飲んでるんだぜ。もちろんやつらあ、ねじ釘さ！ だがやつらはかえっていない方が足手まといがなくなつていいよ。今夜は貸金の利子を勘定する日さ」西沢は、すばしこくスパイしていたのだった。

「おれたちは毎月の収入の五分ノ一ずつ出し合つて、やつらに芸者買いをさせ酒を飲ましてとくだなあ」波田が言った。

「では」藤原が言った。「要求書は僕が原稿を作つて、それがまとまつた上で、清書して判をおして、それから提出ということにしようね。それまではもちろん、絶対に秘密、しかし内容を秘してコーターマスターを説くことは小倉、君に一任しよう。ね、それでいいかしら、ほかにまだ考えて置くことはなかったかしら」彼はちよつと頭を軽くたたいて考えた。

「もういいようだね」西沢が答えた。「だが波田君には菓子子が、僕には酒と女とが足りないような気がするね」彼は大口をあいて笑つた。空気まで寂しさに凍りついたような、静

けさを破つて、声は通りへ響いた。

「波田君、どうだい、そんなにいけるかい」藤原は立ちながらきいた。

「もういいよ。でも食べば食べないことは無論ないけれどもね。財政が許さないさ。ハハハハ」と笑つた。

四人はおもてへ出た。西沢は「ひやかして、一杯ひっかけてくる」と言つて坂を遊郭の方へ上がつて行つた。三人はそろつて、どこか、そこが外国の町でもあるような感じを抱いだきながら、馬蹄形ばていがたにその船へ向かつた。

ボーイ長は波田から菓子のみやげをもらつて喜んだ。

三人は、紅茶のおかげで眠られぬままに、ボーイ長のそばで、ストーブに石炭をほうり込みながら、前のボースンが、直江津なおえつでほうり上げられた悲惨な話を、思い起こしては語り合つた。

三四

それは、ここに今書くべきことではないかもしれない。けれども、それは書いた方が都

合がいい。船長とは一体何だ？ 其の答えの一部にはなるだろう。

それは夏の終わり、秋の初めであつた。時々暑い日があつて、また、時々涼しすぎる夜があるような時であつた。万寿丸は同じく吉竹船長——これはやつぱりこの船のブリッジへ錆びついたねじ釘以外ではなかつた——によつて、搾ることを監督されていた。そして小樽から、直江津へ石炭を運んだ時の、出来事であつた。

本船が秋田の酒田港沖へかかつた、午後の一時ごろであつた。まるでだし抜けに滝にでも打つつかつたか、氷囊でも打ち破つたかと思われるような狂的な夕立にあつた。その時、船首甲板には天幕が張つてあつた。それが、その風にあおられて、今にも、デッキごとさらつて行きそうにブリッジから見えた。船長はすつかりあわてた。そして、あれをすぐ取れと、命じた。その時、夕立前の暑さで、おもては皆裸で昼食後の眠りをとつていた。そこへ、コーターマスターが駆け込んで「ウォーニン」をとれと伝えた。

波田、三上、藤原、西沢らは元氣盛りではあるし、船長をそれほど「怖」れてはいなかつたので、猿股一つで飛び出した。仙台と波田とは全裸で、飛び出した。それは風呂のない船においてのいい行水であつた。だが、風が猛烈なので、仕事はすこぶる危険であつた。ウツカリするとウォーニンのあおりを食つて、海へ飛んで行かねばならなかつた。

それにしても、若い水夫らにとつては、それは、全裸であれば回るものが「痛快」なことであつた。彼らはしまいには、少々寒くなりながらも、裸でその作業をなし終えた。ところが、妙な船長だ！ ボースンが裸ですぐ飛んで出なかつたというので、ひどくボースンをしかつたのだ！

全くこれは予想外の悪い結果を水夫たちはもたらしたものだ。水夫たちでは、漁船じゃあるまいし、全裸で「船長」の見て「いられる」前で作業することは無礼だと、船長は考へるだろう。だが、ウォーニンを取りはずすことは、また急いでいるんだろう。だから、こういう時を利用して、やつの鼻先におれらの×を拝ませてやれというつもりだつたのだ。ところがその晩ボースンは船長から「ねじ」のぐらつくほど「油をしぼられた」のであつた。「そんなふうでは非常の時に役に立たない、かえつて邪魔になるくらいなものだ」というんだ。

それにはボースンはひどくしよげた。水夫たちも、方角違ひの飛ばつちりに、いささか、恐縮したのだつた。

だがそれは、問題にならずに、直江津に着いた。直江津の初秋！ それは全く、日本海特有のさびしい景色けしきであつた。さらでだに、人恋しい船のりは、寂しい人なつっこい自然

の情景の前で、滅多に来る事のない直江津の陸をながめて恋い慕った。

ところが困ったことには直江津の海はきわめて遠浅であつて、おまけに少し風が吹くと、そこはのべつたらな曲線をなした海岸であるために、汽船は錨いかりを巻いて、大急ぎで佐渡さどへと逃げねばならないのであつた。

佐渡へ避難する！ それもまたセーラーたちには結構であつた。そこにも、珍しい街まち、珍しい風俗があるのだ。

万寿丸は別に錨を巻いて逃げるほどのことはないが、石炭積み取りの舢船はしけは波で来られないという、はなはだじれつたいあいまいな日が三、四日続いた。これには、船長はおろか、だれでも癩かんしやく癩しやくを起こした。

そうかといつて、わが万寿丸が、不良少年のように、ノコノコ佐渡までも女狂いには出かけられないのであつた。

ちようど、その時日曜が来た。船長は直江津の舢船はしけの腑甲ふが斐いなさを、冷やかす意味において、水火夫全体へ向かつて、当番を除いたほかの者は、ボートと伝馬てんまとおろして、練習していいという、本船初まって以来の計画と壮拳てんけんとが発表された。そこで、伝馬にはデツキ、カッターにはエンジンということに振り当てられた。

この計画が発表されると、同時に、ボースンと、今の大工、三上の三人は逸早く隠謀をたくらんでしまった。それは、伝馬を、どんどん漕いでつて、上陸して直江津の女郎買いを「後学のため」にして、朝帰つて来ようというのであった。そのためには、グズグズしてると不純な分子藤原のごとき、小倉、波田のごときが乗り込んで来ると、いけないというので、気脈相通する火夫長とナンブト（ナンバーツォイルマン）とを誘惑して、伝馬を占領してしまった。これは無邪気なおもしろい企てであった。この企ては必ず喝采を博すると、彼らは考えた。

直江津の町は、沖から見ると、砂浜から、松がところどころに上半身を表わしていて、街はほとんど、その姿を見せないようなところであった。それは、隠されるとなお見たくなるという人心をはげしく刺激した。おまけに、だれかが直江津へ一度来たことがあるのであった。

「この女郎は、皆亭主持ちなんだぜ！　そして、みんな自分の家を持つてるんだぜ、自分の家へ連れていくんだぜ、素人みたいなや、かと思うと芸妓も及ばないようなのがいるんだぜ。そして、皆素人素人してるんだぜ。まるで自分の家へ帰つたようなものだけ。日本一だ！　全くこの女郎買いを知らないやつは船のりたあいえないくらいなんだぜ」

それは、恐ろしく皆の者を興奮させた。有夫の女郎、素人の女郎！ 人に飢えた船のりはもう有頂天にされてしまったのであった。それはまるで錦にしきえ絵の情緒じやないか。

それは、全くおそろしいほど、彼らの好奇心をそそった。素人の娼婦しょうふ！ 一軒を持つている娼婦！ それは全く独特のものであった。

この興奮剤は、恐ろしい偉力を現わした。伝馬は直ちにおろされた。

彼らは大騒ぎをしておろした。それは難なく、海面へおりた。そして、三上は、実際直江津の漁夫を笑うかのように、楽々とおもてへ漕こぎ寄せた。ボースン、ナンバン、ナンブトー、大工、という順序にロープを伝つて乗り込んだ。

櫓ろが二挺ちよう立てられた。三上と大工とがそれを押した。

波の山、波の谷を、見えつ隠れつして、それを漕いで行つた。

そして、そのまま、どこへ行つたか、見えなくなつてしまった。カッターはそのあとでおろされた。そしてそれは、サードメーツ、チーフメーツまで乗り込んで、ほんとうに漕ぎ方の練習をやつた。「伝馬は」といって、チーフメーツはカッターの上へ立つて方々をながめたが、それは見えなかつた。

カッターは引き上げられた。そして日は暮れた。伝馬はもちろん帰つて来なかつた。伝

馬の連中が、もし、船長を連れて行つてゐるならば、このような問題は起こらないのだが、船長は船に残つていたので。

船長は、たたき落とされた熊蜂くまばちの巣くまみたいにかつとなつて憤おこつた！

自分の妻君の姦かん通つうをかぎつけた亭主のように、その晩船長は一睡もしなかつた。そして、そのおかげで、ボーイも眠れなかつた。というのは、船長は、のべつに、ベッドから飛び上がつては、「ボースンはまだ帰らないか、帰つたらいつでもいいから、すぐにおれのところに連れて来い、わかつたか」だの「伝馬はまだ見えないか」だのと、怒鳴り続け、ベルを鳴らし続けたからである。

「まるで狂人病室だ！ 看護人はたまらん」ボーイは背中をボリボリかきながらこぼした。全く船長にしてみれば、その誇りを傷つけられ、自分の優越感を裏切られ、自分の特権を蹂躪じゆうりんされ、ことに彼さえもまだ遠慮していたのに、「女郎買ぢやうがいい」に行つたことは、彼を「愚弄ぐろう」することはなほだしいものであつた。それは、昔ならば「罪まさに死」に相当すべきであつた！

彼は時々ベッドから、飛び上がつては、ボーイを怒鳴つた。それは足へ煮えたぎつた湯でもかかつた時のように飛び上がるのだった。そして、彼は飛び上がるたびごとに、「き

やつら」に対する復讐ふくしゅうを一層残忍にしようと考えてのだった。

ボースン、ナンバンらが「出し抜いて」直江津の、自分自身の家を一軒独立に構えている女郎買いに行つたことは、憤怒の余り、船長を発作的の熱病患者みたくにした。

わずか、しかし、このくらいの事で、何のために、それほどまでに船長が、憤おこらねばならなかったか、それは、だれにもわからないのだ。それほどに憤慨しなければならぬ。「理由」を、いまだに「発見ができない」とおもての者たちもいつているのだ。それは多分、「虫の居どころ」が悪かつたのだろう。そして、虫の居どころが悪かつたために次のような結果になつてしまつた。

三五

その夜は、船長にとつては、全く不愉快きわまる長い夜であつた。その夜は、ボースン一行にとつては、全く愉快きわまる短い一夜であつた。そして、おもての者たちにとつては、それは、灰色に塗りつぶされた、懲役囚の一夜のように惰力的な一夜であつた。

その夜が明けると、ボースンらは、陸地近くの、日本海特有のまき浪なみの中から、その伝て

馬んまの姿を見せた。浪は、その波のような色と幅を持って、沖の方から陸地の方へ巻きころがして行く反物たんもののように見えた。伝馬は、陸近くでは、よくこの浪に見事にくつがえされるのであった。伝馬は巻き込まれるように見えた。が、すぐにヒヨコリと現われた。芥け子粒しつぶのような伝馬は、だんだん大きくなって来た。

よせばいいのに、ボースン——海軍出のおもしろい男だった——は、伝馬の舳へさきにつつ立って、その功を誇りでもするように、ハンケチを振っていた。

それは、客観的には浦島太郎が、龍宮の乙姫おとひめ様のところから、帰って来るのではないかと思われるほど、美しく、詩的であった。

黒青い、大うねりのある海には、外には一艘そうの船もなかった。空気は甘く、恋人の肌はだのようににおった。空は海一杯を映した鏡のようだった。伝馬の背には、白い砂山の続きの間から、松と屋根とが延び上がったのぞいていた。

一切が澄みわたって、静かであった。それは一九一四年のことではなくて、紀元二百年の日本海と名のつかない、前の海面であった。

そしてボースンは乙姫様からもらった箱をさげて、ハンケチを振っていた。

ボーイが、船長にボースンの伝馬が見えると報告した時の、彼の憤り方おこの気持ちや、態

度を説明するのには、匙さじを投げる。

彼は、ドイツ製の双眼鏡をオツ取つて、ブリッジに駆けのぼった。彼の双眼鏡は伝馬を拡大した。

「凶ずうずう々しいにもほどがある、やつはハンケチを振っている！」彼はうなった。

水夫たちも、火夫たちもデッキへ出て、悲惨な遊蕩児ゆうとうじたちをながめた。伝馬は近づいた。大工は鼻歌をうたっていた。彼は、また声がいいのだ。それは、だれでも聞く者を、母にすがりついて乳を飲んでいたころの、甘い追憶を誘い出さずには置かなかつた。

彼らは、おもてからロープをおろしてもらつて上がった。

彼らが、皆まだ上がり切らないうちに、コーターマスターが飛んで来た。

「伝馬はそのままにしといて、ボースンにすぐ来いって、船長が」とボースンにいつて、「オイ、ボースン、気をつけないと、まっ赤かになつて憤おこつてるぜ」

ボースンは、女房と、六人の子供が、打ち上げられた藻屑もくずのように、ゴタゴタしている、自分の家庭のことを思い出してしまった。「こいつあしました。行かなきゃよかつた」と、彼は思った。深刻に彼は悔いた。悪いと思つてでなく、より悪いことの誘因ゆういんになつたことを、彼は、……頭をデッキへ打ぶつつけたかつた。……心臓ろくこがまるで肋骨ろくこの外側について

るように、彼は、動悸どうきがした。捕つかまった犯罪人のように、彼は、自分の運命が決定したことを直感した。彼は、その破滅に瀕ひんした自分の家で、疲れ衰え弱った、妻や、子供らと一緒に飢え凍えている状態を想像して、震えながら、船長の所へと行った。

彼の共犯者？　たちも、霜寄りした魚のように、一つところに集まって「困った」のであった。三上だけが一人ひとりその中で、昨夜はいかにして遊んだかということ、仲間の者に発表する勇氣と、発表せざるを得ない衝動とを持っていた。

その話によると、若い船員たちにとつては、その歡よろこびを得たことは、そのために首を切られることがあるにしても、なおかつ非常にいい、得難いことであつた。なぜかならば、三上はこう説明した。「ほんとに、自分の亭主のように親切にした」と。

彼らは、人間の「愛」には、うそにもほんとにも、沙漠さばくのように渴かわき飢えていたのだ。沙漠にオアシスの蜃気楼しんきろうを旅人が見るように、彼らは「愛」の蜃気楼さえをもさがし求めたので。それは「愛」の形骸けいがいであつたかもしれない。しかも彼らは、それ以上のものを知らなかつたのだ。彼らは、そこへ持つて来て、原始的な制度の残っている、いくらか何か真実らしいもののある——それは、彼らの幻影と、極端な想像とから来たものである——「愛」の一夜を過すごしたのだ。

彼女らが、彼らに、ほんとに人間として、仲間として接近された時、彼女らも、時としては、その夜、強い反抗と、自暴自棄とから、涙の多いその女性としての一面をフト、見せることがあるものだ。それは、よくないことであろう。だが、それから先には、なおらないであろう。

船長はサロンに待っていた。チーフメートもそこにいた。セコンド、サードもそこにいた、陳列されたように頭をそろえていた。船長はそれらの人間にとつても、犯すことのできない人間であった。従つて、ボースンなどは「陪臣」であった。

ボースンは落ちて来た煙火はなびの人形のように、ガツカリしていた。彼は、ドーアのところへ立つて、マゴマゴしていた。彼はためらっていたが、死のような沈黙と、屍かばねのような冷たい目とが、集まっていたので、そのまま思いを決めて、中へはいった。

そこは、まるで法廷のようであった。そこでは、善人と悪人とは決定されてあった。ボースンのしたことは、論ずる余地がなかった。

「お前に下船を命ずる！ 今からすぐに。荷をまとめて、あの伝馬で上陸して行け、合意下船ではないぞ、下船命令だ！ それでよろしい」

きわめて簡単であった。抗弁もなかった。ありもしなかった。余裕もなかった。船長は

自分の室へ、赤くなつた目を休めに引つ込んだ。それぞれメートらも幽霊のごとく引き取った。

ボースンはおもてへかへつた。そして、どつかと自分の寢箱の中へ、からだを投げつけた。一切は決定した。ボースンは業務怠慢で下船命令を食つたから、一年間乗船を海事局の名によつて停止されるのだ。それだけの事実なのだ！

悲惨なる事實は、新聞の三面に「死んだ人」の欄に一括して載せられる。ブルジョアの結婚が破れたことは、全紙を数日間にあつて埋める。それだけのことなのだ！

(以下十九字不明) 凍死し、飢え死にし、病死し、自殺し、殺戮さつりくされることは、その状態なのだ！ (以下七字不明) もし、新聞や、その他の社会が事實を顛倒てんとうしてと考えるならば、それは、君が資本主義の社会を見ていないからだ。

もし、それらの悲惨なる事實がなかったならば、それらの悲惨事の上にのみ建つ、ブルジョアの社会建築はどうなるのだ。それは、だから、実は悲惨事ではないのだ。貧窮のために死滅して行くことは、すこしも悲惨ではないのだ。死滅して行くほどに多数が貧窮であるからこそ、これほど、ブルジョアが富んでいるんだ！

だから、一切は、最上の状態なので、「これを動かしてはならない！」のだ。

ボースンは、そこらの物を片づけ始めた。帆布で作った袋の中へ、一切合財押し込み始めた。そして、その間に、アーツとため息をもらした。曇った夕暮れのように、どんよりと考え、どんよりと感じた。彼は寢床の下から、長いこと、そこにつつこんであった、破れたゴムの長靴ながぐつをとり出して、それにながめ入っていた。白い粉のように、塩がフイていた。が、彼はその靴の事を考えているというわけでもなかった。彼は、それをぼんやりと見入っていた。

ナンバン、大工などの連累者は、ボースンの命乞ごいを計画して、それぞれ手分けをして頼み回っていた。ことに大工は、船長と同じ国の山口県の者であった。彼は、国くにもの者という、——何という哀れな、せせこましい、けちくさいことだろう、——理由で、船長のところへ、日ごろの寵ちやうたのを恃んで出かけて行つた。

「お前が、国の者でなかったら、お前も一緒なんだぞ！」大工は、船長にそう怒鳴りつけられて、失望したような、ホツと安心したような、何だか浮き浮きしてうれしそうな氣にまでなりながら、おもてへかえつて、「だめだった」ことを報告した。そして、心の中では口笛でも吹きたいような元氣元氣した氣になった。

三上は、何とも思わなかった。それは、人のことなのだ！ ナンバン、ナンブトーも、

同様であつた。

読者は、作者に対してこのことで憤おこつては困る。作者が冷淡にしたわけではないのだ！
もしまた、皆がそうでなかつたら、ボースンがおろされるようなことも初めつから生じ得なかつたらう。要するに、労働者が結合していいことを、作者に向かつて憤られるのははなはだ迷惑だ。

ボースンはばかな子が、その帯をくわえるように、その靴をいつまでもいじくつていた。しばらくして、彼は、その靴を床へ力一杯たたきつけた。そして、しばらくまた考えていたが、また、それを拾い上げて、その破け目を子細に調べて、ソーツと、下へ置いた。彼は、寢床の縁へり板いたのすみに、セルロイドの妻楊枝つまようじを作つて置いてあつた。それは歯のためにいいだろうと、彼は自分で思い込んでいた。彼はまた、それへ目をつけた。これはどうしよう。彼は、それをとり上げて、また、子細に検査を始めるのであつた。一切のものが急に、非常に重大な、貴重なものであるように、彼は感じ初めた。

水夫たちは、ボースンの室をのぞいては、気の毒そうな顔をした。波田は、ボースンを、月二割も利子をとるので、船長の模型ぐらいに評価していたのであつたが、彼が「鹹首かくしゆ」されたことを聞いて、急に同情者になつてしまった。

彼は、梅雨時つゆどきの夕方みたいな気持ちでいる、ボースンの室へはいった。そして、何かと手伝ったのであった。——彼が、今時々足にはめるゴム長靴の「ゲートル」はこの時に、もらった記念品であった——。

ともからは、ボースンはまだ上がらないかと、しきりに急せぎ立てて来た。

「人間ほどわからんものはない。ああ人間ほどわからんものはない」と、ボースンはため息と共に言った。

ボースンは、三上に送られて、自分も一本の櫓ろを押して、今帰ったばかりの直江津まちの街へ向かつて漕こぎ去った。

ブリッジからは、船長とチーフメーツが望遠鏡でこれを見送った。伝馬はだんだん小さく、波山と波谷との上にのりつつ見えつ、沈みつして行った。

ちようど、その日も荷役がなかった。また別に仕事もなかったので、水夫らは、船首甲板にウォーニンを張って、その下で寝ころびながら、ボースンの伝馬を見送っていた。

伝馬はどんどん進んで行った。そして、陸岸近くなつて、もう一、二間と、いうくらいのところまで進んだ時に、後ろから追つかけられた、例の巻なみき浪なみに、くるまれて、旋風ちりが埃ちりでも渦巻くように、ゴロゴロと横にころがしてしまった。もちろん、船長とチーフメ

ーツはこの上もなくおもしろがり、手を打って喜んだ。

岸には、石炭の人足たちが、もう少し凧ないだらば、本船へ仕事に出かけようとして沢山集まって、そのありさまを見ていた。

人足の四、五の者は直ちにおどり入った。そして、二人は——三上は櫓ろと抱き合つて、ゴロゴロころがった、彼は、立とうとして二、三度試みたが、彼の四倍も長い重い櫓かかを抱かかえていたので立てないで、その代わりに潮を飲んだ。ポーソンは、そのとつさの場合にも、荷物を流すまいとして、手を章魚たこのように八方に広げて、手にさわるものをつかもうとしながら、グルグルと巻きころがされた。そして、彼は手に舟板ふないた一枚と洋傘こうもり一本をしつかりと握りしめていた。

もし、人足が助けてくれなかったならば、伝馬はもちろん、流されているし、ポーソンにしても、三上にしても、死に得た。彼らは足が立たなかったといっていた。そのはずであった。どんな大男でも、海の幅ほど丈たけのあるものはないからだ。つまり彼らは、横になりながら足を突っぱろうと試みたのだ。

二人は、櫓と、舟板と洋傘とをしっかりと握りしめて、人足に助け上げられた。

ポーソンの荷物は、布団ふとん一枚と毛布一枚との包みを取りとめられた。そして、帆木綿ほもめんの

袋の方は流れた。そして、一切は残るくまなく完全にぬれてしまった。それは、吸い取り紙が完全にぬれたように、ほとんど一切を役に立たなくしてしまった。

それは、ブリッジから、望遠鏡で見る時に、流れて行く行李こくりまで見えたくらいであった。「これは痛快だ、こいつあおもしろい、ワツハツハハハハハハハ、ワツハツハツハツハハハハハ、とてもたまらない、ワツハツハハハハハハハ、あれを見たまえ！ 舟板とらを虎の子みたいに抱いてるぞ、ワツハツハハハハハハ」船長はころげ歩くばかりに笑い狂った。全く、それは、関係のない者から見ると、おかしい情景でもあつたらうさ。チーフメーツも笑った。

おもてのウオーニンの下でも、砂丘の上の粒のような人間たちが、動揺し始めたことを見た。何だろう？ と伝馬ゆくえの行方をさがしたが見えない。そのうちに、ブリッジで、船長とチーフメーツが腹かかを抱えて笑いころげているのを見た。そこへ、ブリッジから、非番になつたコーターマスターがおりて来て、ボースンの伝馬が、巻き浪に巻き込まれて顛覆てんぷくしたが、人命だけは人足に救われたことを知らせた。

彼らは、ウオーニンの柱やレールのぼに上つたり、つかまつたりして、それをながめようとした。けれども、波にさえぎられて見えなかつた。彼らは下に降りて、寝そべりながら、彼らについて話し合つた。

夕方になつて、三上は、ふくれつ面つらをしてボースンと共に、また帰つて来て、船長に、子細を告げた。ボースンは、船長に損害賠償を要求しようとしたが、テンで、デツキまでも上からされなかつた。すでに彼は、万寿丸のデツキさえも踏み得なくなつていた。そして、一切は浪にさらわれた！

三上は、再びボースンを送つて行つて、夜になつて歸つた。

ボースンは、横浜へ歸つて、全く、くず鉄の山の中の本のねじ釘くぎのように、わずかに存在しているに止とどまつた。彼は、帆布の縫い工になつて、一日七十銭を取つているのであつた。

これが、船長の偉業であり、これが、ボースンが、「当然」受けねばならない報いであつた！

三六

私がるで酔つぱらいのように、千鳥足で歩き、一つのことをクドクドと、繰り返してゐる。だが、これは、私が船のりであるからで、小説家でないからのことだ。全く、こん

なことを、いや、「書く」ということは、とてもむずかしいものだ！

ボーイ長は、もうこれですっかり傷も、それから来た病気も、「これでいよいよなおるんだ！」と思つた。それは、今から室蘭の公立病院に行くからであつた。

そこに行くためには、どうしたつて、海も見ろだろうし、家も見ろだろうし、木々も見ろだろうし、また、町の人々も、そのほかいろいろなものを見る事ができるんだ！
 そうだ、彼は頭の上の、上段の寝箱の底板ばかりを一週間ばかりながめつづけていたのだつた。

こんな場合には、人は恐らく、どんなものでも、見るもの一切がなつかしいものだ、どうかすると、自分にけんかを吹つかける、酔っぱらいでさえも。それは放免された囚人の心と同じであつた。

彼を連れて行く、藤原と、波田とはしたくをしていた。したくをしながら、二十五歳のキビキビした青年、波田は悲痛な冗談をいつていた。

「病院には、看護婦がいるぜ、色の白い、無邪気な、それほど別嬪べっぴんではないが、すてきにかわいい……」

「何だい、こいつすみに置けねえなあ、君は病院に行ったことがあるかい」波田にしては

珍しい話なので、藤原が一本突つ込んだ。

「その目がいいんだ！ 目がね、汚れたよじどんな塵ちりも映さない、山中のまだ発見されない、処女湖のような澄み切った、親切な目なんだ！ その女は、全く、どの患者にでも、兄きょう妹まいのように、わざとらしからぬ親切さでもって、接するんだ！」波田は、すでに十度以上は、便所掃除そうじで汚よじした仕事着に腕を通しながら、自分の恋人のことを語るように言った。「似合わねえな。波田君、糞くそだらけの服と、澄み切ったひとみの処女とは、どう工面して見たつて、縁がねえなあ」と、藤原は冷やかした。ボーイ長までも、ウツカリほほえんだ。水夫たちも笑った。

「マ、待ちたまえ、先回りしちやいけないよ。実際だね。僕だつて、もう二十五になるんだからね。恋も、愛も十分に知ってるさ。その時に、もし、そんな処女に病院で出会ったらだね。この糞くそのにおいのする仕事着にでも近づいて来るだろうかってことを考えてるんさ、ハツハハハハハ」彼は笑った。その笑顔えがおの中には全く、処女湖に宿す、処女林のような純な表情があつた。

「だつて、君は、自分でも言ってるじゃないか、『女難除よけ』にはこの葉ツ葉が一等だつて、そうだと、もちろんその娘だつて例外じゃないぜ」小倉が言った。

「悲観悲観、おれが女のことなどいい出したのが、よくねえんだな、おれの妹だって、こんなきかない労働者とは結婚したがるねえだろうからな。ハツハツハハハハハ」

「それは全くだよ、波田君」藤原は感に堪えぬようにして言った。

さてしたく、——それは、その通すべきところへ、手、足を通して、はめるべきところへボタン、靴、帽子とはめればいい——はでき上がった。全く波田は「女難除けのお守り」であった。新米の乞食などは、彼より立派な風をしていた。彼の髪と来たらなれた乞食と区別がつかなかった。

波田は、ボーイ長を背中に負った。水夫たちは、ボーイ長を彼の背中に、そうつと乗せるようにした。

「済みません」と、ボーイ長はうれし涙に詰まったような鼻声で言った。

三人は、四本の足で出発した。

子供を負んぶすることでさえも、非常に肩が痛く、また重いものである。ボーイ長の場合にははなはだしく重かった。そして、困ったことには、その胸が痛く、なおより悪いことは、砕けた左の足が、ともすればダラリと下がって、雪の中をひきずるのであった。ボーイ長は、足を引き上げていようとして、全身の注意を左足に集めて、それを、ひきずら

すまいとしたが、だめであった。ボーイ長の足の下がると同様に、波田の手までが下がるのだった。

波田が、ボーイ長を揺すり上げるのは、二十歩から十歩になり、今では一步ごとに揺すり上げるようになった。ボーイ長は、痛さと寒さとのために、顔色をなくしていたが、それでも辛抱した。

彼らは、棧橋から、二十間ぐらいのところにある、番小屋へはいった。そして、ボーイ長をベンチへおろした波田は、額の汗をぬぐった。

「アア、ご苦労様」藤原は言った。ボーイ長は、心臓の鼓動がくたびれていて、額から冷汗が出て、ものを言う気に、どうしてもなれなかった。ただ、アーツと小さくため息をもらした。

番小屋で休んでいた男女の人足たちは、彼らを取りめぐっていた、ストーブの一边をあけて三人に与えた。そして、ボーイ長の負傷に同情と憐愍れんぴんの言葉を贈った。

「おれたちあからだが資本もとでだでなあ、大切にしなければや」と言い合った。「かわいそうにまあ、まだ子供だによ」と言った。

ボーイ長の左足は、銃剣さきの尖さきのように、白木綿しろもめんでまん丸くふくれ上がっていた。その

尖さきがストーブの暖かみで、溶けた雪粉によって湿らされていた。

ボーイ長は、そこで、変わった人々の慰めの言葉を聞いて、涙ぐまれてしようがなかった。

彼の母ぐらいの年配の老いたる婦人も、あの劇労に従うのであろう、シヨベルを杖つえにストーブのそばへ立っていた。彼は、恥ずかしい気持ちを感じた。なぜそうであったかはわからないが、彼がけがをして病院へ負われてなど行くということが、恥ずかしい気がしたのであっただろう。そこにいた人たちは、そんな大きなシヨベルを動かすさえ困難であったように見える、年配の人が多いのであった。それは皆四十を越しているか、そうでなければまだ十五、六の子供かであった——そんなのが娘さえも交じって四、五人いた——働き盛りの者はどこにいるだろう？ と、人々は思わずにはいられなかった。

働き盛りの者は、夕ゆう張はり炭田の、地下数千尺で命をかけて、石炭を掘っているのだ！ それに、彼らの息子むすこや娘が、そつちへ出かせぎに行っているのだ。そして、帰って来れば、不具者か敗残の病びょう軀くか、多くは屍かばねになって帰って来るのだ。

「おれも、片輪になって帰らねばならぬだろうか」ボーイ長は、灰になりかけた石炭のような、味気ないさびしさに心を虫食われた。

「サア、行こうか、今度は僕が負うからね」藤原が言った。

人足の人たちも手伝つてくれて、ボーイ長は藤原に負われた。三人は、また、四本の足をもつて、馬蹄形ばていがたの海岸の石崖いしがけの端を、とぼとぼと拾い歩きして行つた。そうして、藤原は丈たけが高かつたにしても、雪は二尺から積もつていた。踏まれた道は狭かつた。ボーイ長は、道ばたの高い雪へ、足で合図の印しるしでもつけるようにして、その足をひきずらねばならなかつた。

三人は、それほど黙つていないで、まれには一言ぐらい何か言つたらいいだろうと思われるほど、黙つてくつついて歩いた。三人も自分で、何かその不愉快な苦痛な沈黙に反抗したいとは思つても、口をきくだけの氣力がないのであつた。それは何か官庁の手続きでもあるように、非常に面倒臭いことのように思われるのであつた。

道は、藤原と、波田にとつては、昨夜歩いたと同じ道であるのに、道の方が先へ向こうへすべり抜けでもするように遠く思えた。

しかし、彼らはやがて、第二の小屋まで来た。そこは、港の最奥部で、馬蹄形の頂点になつていた。その小屋からしばらく行くと、彼らは、左へ、海岸から離れて、石炭の連峰の間に、こしらえられたトンネルを抜けて、それから、室蘭駅の機関庫のある、数十条の

レールの平原を横切つて、街へ出るのであった。

彼らの一行は、第二の小屋で息を入れた。

そこにも、沢山の人足の人たちが、まっ赤に焼けたストーブのまわりに、集まっていた。三人は、また、そこで、人足たちに席を与えられて、そして、前と同じようなことを繰りかえした。一休みごとに、彼らは、少しずつぬれるのであった。

やがて、一行は、レールの平原を通り越して、街に出た。そこで、ボーイ長に俵くるまそりかこを雇いたかつたが、そんなものはなかつた。波田と藤原とは、かわるがわる汗だくになりながら坂を上り上つて、もう少し上れば、半島の頸部けいぶから、大洋の見えるほど、市街の高い部分へ上つて行つた。そこに公立病院があつた。

三七

受付で、診察券を買つて、外科の待合室で順番を待った。まるで、言葉の通わない国へ上陸したように、不案内であつた。船の生活が、彼らを、だんだん陸上においては、不具者同様にするのだ。

白い服を着て、看護婦たちはいた。そして、美しいのもいた。けれども、波田の考えたような夢のような、女はどうとう見つからなかった。けれども、ペンキのにおいの代わりに薬のにおいをかいだ。殺風景の代わりに、清い女の声の流れ、看護服の裳もすそがサラサラと鳴った。薬のにおいの中に、看護婦の顔からは、化粧水の芳香が、蜘蛛くもの糸のようにあとを引いて流れた。

椅子いすには頭いすじゆう繻ほうたい帯したのや、手を肩から吊つつたののだが、二、三人かけて待つていた。

そのうちに「安井さん」と呼ばれて、ボーイ長は二人ふたりに抱かかえられて、診察室へはいつて行った。

「どうしたんです」医者はきいた。

ボーイ長は、かいつまんでけがをした時のようすと、痛いところとを話した。蒸気のラジエーターが、白い湯げを吐ついていた。

ボーイ長は、寝台の上で巨細に診察を受けた。そして、足は、改めてナイフで切り開かれたり、ピンセットで、神経を引っぱられたり、血管を引っぱり出して、それを糸で縛むすつたりした。

「どうして、こんなに、いつまでもほっといたんです。夏だったら、もうこの辺から切り取らねばならぬようなことになってたかshれないよ」といって、ひざ膝の辺を指さした。

「船長が、どうしても診みせることを許さないんです。それで、僕らは、自費で連れて来たんです」藤原は答えた。

「何か、船長と、例のごとくけんかでもしてるんだらう。船では、よくあるこったからね。君たちも強く出たんだらう」若い医者は、近視眼鏡の奥で、その人のよさそうな目で、笑いながら言った。

「そんなことじゃないんです。全く、話にならないんです」と、藤原は簡単に暴し化の話と、横浜の話をした。

医者は、大きく、うなずきながら聞いていたが、

「足は、これで一週間もすれば、糸を除とれるようになると思うんだが、胸の打撲傷のところは、一度、内科に、見てもらわないといけないね。どうも、そこは外科では、ちよつと困るからね」

といった。

「それじゃ、胸を内科で診察してもらおうんですか」波田がきいた。

「そう、その方がいいね。足は絶対に動かさちやいけないよ。五日か一週間のうちに、もう一度来てください」

「は」と藤原は答えて、二人はボーイ長を抱えて、内科の方へ行つた。

一週間、以内なんぞに来られやしない——ことは皆を困らし、途方に暮れさせた。が、まあ、内科の方が、済んでから考えることにしよう、言い合わせたように、皆が考えた。それは、痛い傷に触れたくないような状態であつた。

内科の医者は「熱が夕方になると出るだろう」とたずねた。ところが船には、ともは知らずおもてには、検温器などは見たこともなかつた。従つて、熱もあるにはたしかにあるんだが、高すぎるのか、低すぎるのか、皆目見当がつかなかつた。

「計つたことがないんですが、実は、検温器がないんですから」藤原が答えた。

「夕方になると、気分が悪くなつたり、寒けがしたりしやしないかい」医者はきいた。

「ええ、しよつちゆう傷は痛いんですが、気分がぼんやりして来るのは、夕方です。何だか、妙な夢なんぞ見て、うなされたりします。それに、寒けも夕方になると、きつと来ます」安井は答えた。

医者は、背中から呼吸器を聴診しながら首を傾けていた。

「入院ができるかい。入院をした方がいいんだがなあ」医者は、藤原の方に問いかけた。「何でございましょう病気は。入院も、できなかないと思いますが、船の方から経費が出ないと、私たちでは、入院費がとても支払えないと存じますので」藤原は、正直なところを打ち明けた。

「病気つてのは、打撲から来たものだ、やつぱりね。足のように、中から骨と肉とででき上がったところはいいが、こういうところは、内部に複雑な、機関があるからね」といって、七面倒なむずかしい病名をいった。

「で、病気の原因が、負傷から来たものだということがわかれば、船から出るのかね？ 診断書を書いて上げようかね」といって、医者は、診断書を書いて渡した。

「どうもありがとう、いづれ帰船して、相談いたしましたから」

三人は、礼を言つて、ボーイ長は、波田に負われそこを出た。

診断書が、百通あつてもだめだろうとは思つたが、とにかく、それは、一つの有力な味方であつた。

今では、実際の負傷や疾病よりも、診断書の方が、重大な意義を持っているのだ。ことに、それは、労働階級の負傷疾病の場合、そうであるのだ。工場医は、資本家の診断によ

つて診断書を書く、という役目だけを勤める場合が多かった。

資本家は、機械にせつだん截断された労働者、ベルトに巻き込まれて、碎けてしまった労働者、乾燥炉の中へおちて、焼き鳥のようになった労働者には驚かない。その診断書だけに驚くのであった。

炭坑主は、自分の炭坑が、ガス爆発をした時に、五百人の男女工が、坑内で蒸し焼きにされていることには、決して驚かないのだ。彼は、その坑口の密閉が三年後にか、五年後にか開かれた時、まだ掘る部分が焼けずに残されているか、どうかに心配しているのだ！ 汽船においても同じことだ。一緒に沈んだ人間は何でもない——しかし、船体は資本家にとつて大きな永久の嘆きなのである。

船長も、ボーイ長の負傷そのものに対しては、驚くべき「理由」がなかった。だが、この診断書は、幾分なりとも、何らかの衝動を与えまいものでもない、と三人は空頼みにした。

小学校の子供たちが、本と弁当とを載せた小さいそり櫓を引っぱって、笑ったり、わめいたりしながら、その高みにある学校から、ゾロゾロと帰って行った。道が、急な坂をなしているところになると、子供たちは、子供たちにとつても小さすぎる、その櫓の上へ、両足

をそろえて、まっしぐらに、下の街へすべり落ちて行つて、曲がりそこねて、雑貨屋の店先に飛び込んだり、その破目板に打ぶつつかつたりした。中にはうまく曲がったは曲がったが、雪の掃きだめの山へ衝突して、煙のような粉雪をまき散らしたりする子もあつた。

これは、ボーイ長にとつて、たまらぬほど、愉快なことであつた。いい気散じであつた。三、四年前までの彼の姿が、無数に雪の上をすべつたり、ころんだりするのである。彼は、足のことを忘れてしまつて、自分の負おぶさつていることまで忘れていた。

彼を負おんぶした波田は、汗をたらしていた。

「波田さん、菓子屋まで、まだ大寄り道になるの」ボーイ長はフト菓子が食べたくなくなつた。「きんつば」が食いたくなくなつた。できれば、上等の蒸し菓子の中へ入れる餡あんだけが食べたくなくなつた。彼は、甘いものを食べると、それは、血管を流れて行つて、足の傷所きずで、皮になるように感ずるほど、それほど甘いものに飢えていた。それと一つは「上陸した以上は、煎餅せんべい一枚でも食わないと気が収まらん」と言う波田へ、その機会を与えたかつた。と、休息したかつたのと、最も彼を、この拳に出いでしめた重大な誘因は、一分でもおそく船へ降りたかつた、少しでも長く、陸の明るいとこにいたかつた。清い空気、ハッキリしたものの形、人間の生活、美しい一切のもの、それらと一刻も長く、一緒にいたかつた

のだ。

「そいつあいまい思いつきだ」波田は、そのつもりで航路をそっちへとついていた。

東洋軒は、また、その日も、珍無類なお客を迎えた。

ボーイ長は、足がきかないので、日本間の方に三人は通された。

全く、波田がどのくらい甘いものに対して、真実の愛をささげているか、それは、私によく表わし得ないところだ。彼は、ほんとの酒好きが、酒に目をなくす以上に、菓子には参っていた。それは「病的」だった。しかし、一体に、船員は、何物、何事に対してでも「病的」に欲望を持っていた。安井、藤原なども量的には、時とすると波田以上であっただろう。

三人は、木炭の埋いけられた火鉢ひばちをはさんで、菓子をつまんだ。こういうことは、ボーイ長は、いまだかつて経験しなかったことだ。非常に惨さん憫たんたる生活をしてきた労働者が、何かくだらぬ犯罪で、監獄にほうり込まれる。そこでは、彼は、いまだかつて食ったことのない豚肉や、魚肉やを食べさせられた。その労働は、彼を今まで、苦しめたよりも楽であった。土地のやせた、産業のない、深い山中の谷間などから、四十を越してとらえられた、囚徒などの、やや低脳なのに、そう言うのがある。そして彼は、晩年を獄中で送るこ

とを意に介しないように見える。

一八六三年、法刑及び懲役にされた、囚徒の給養や労働状態について、英国政府が調査した結果からマルクスは、ポートランドの監獄囚徒が、農業労働者や、植字工などよりもよい營養をとっていたことを証明している。(資、一ノ三、二三八ページ)

一八五五年、ベルギーにおいても、デユクペシオー氏は、書物の中で、悲惨でないと思われる標準的の労働者が、同国における囚人の營養よりも、十三サンチームだけ營養が少なかったと書いている。(資、一ノ三、二二四ページ)

世の中には、監獄よりも、食物や、労働においては、中には一切にわたって、苦しい、生活をしている者もあるのだ。

ボーイ長は、負傷して、見舞金をもらって、初めて、そんな——炭火の埋いけられた、茶の道具の並んだ盆や、名前も知らない非常にうまい菓子を食べ、お茶を飲み、ゆつとりとした、——気分を味わうことができたのであった。これは、監獄にはいつて来て初めて「豚の肉」に、ありついた哀れな労働者と似てはいないだろうか？

——私は、読者に、断わって置かねばならないのは、以上のことによって、監獄がいいところだということには、ならないことを承知してもらいたい、監獄よりも悪い条件が、

あるということは、監獄が、いいということの、一つの条件にもなり得ないからだ。――

ボーイ長は、その注意を足や胸から、しばらくの間は、引き離すことも、できるようになった。彼は、つまり、いくらかほかのことも、考えることができるようになった。というのは、手術をしたり、薬の香をかいだりしたのが、彼を、いたわったのだ。

「船に乗つてるところこういうものは、とても食べられないね」などといって、彼は「鹿かの子こ」のあずき小豆を歯でかみとつたりしていた。

「全く、この家の菓子はうまいよ。横浜にだって、たんとありやしなないよ」波田は通がった。

「菓子かしの鑑別かんべつにかけちや、波田君は、ブルジョア的しゅうの嗜好しこうを持つてるからなあ」藤原は笑った。

三人は、胸の焼けるほど菓子かしを食った。その間に、疲労も回復された。そして、しばらくは、船のことや、一切のいやなことを、忘れてることもあった。が、藤原の心は、ストライクが、いつ起こさるべきであるかが、ほとんど、忘れられなかった。

彼は、菓子かしを食いながら――「万人が、パンを獲るまでは、だれもが、菓子かしを持つてはならぬ」というモットーを思っていた。この言葉、このモットーは、どのくらい、藤原を

教育したことであろう。この簡単でわかりのいいモットーは、全世界の、労働者たちの間に、どんなに、親しい響きをもつて、口から口へ、村から街へと、またたく間に、広がって行くことだろう。そして、この言葉は「アーメン」を口にする人の数を、今でははるかに、抜いているのだ。そこには、新しい感激に燃える真理が、炬火のごとくに、輝っているのだ。――

藤原は、勘定を払った。「済まないなあ、僕が、おれいにおごるつもりだったのに」とボーイ長は、藤原に負さりながら、真から恐縮して言った。

ボーイ長のまっ白の縷帯は、それでも血がにじんで来た。「膿が出るよりはいいね」と、ボーイ長は笑う元気が出た。

しかし、本船に帰り着いた時は、彼らは、グツタリくたびれていた。ボーイ長は、そのひきずった足のために、再びその神経は、かき荒らされてしまった。それは、美しい夢から目ざめた、牢獄内の囚人の心に似ていた。

一切は、また狭い、低い、騒々しい、不潔な、暗い、船室の生活へ帰った！

万寿丸は、横浜へ帰ると、そのまま正月になるのであった。従って、船体は化粧をしなければならなかった。船側は、すでに塗られた。次はマストが、塗られねばならない。

マストのシャボンふき、ペン塗り、——この仕事は、夏はよかったが、正月の準備などは、冬に決まっていたので、困難であった。シャボン水は凍ってヨーグルト見たいになるし、ブラシが凍るし、全く、始末に行かなかつた。

中でも、最も困ることは、からだの凍ることであつた。

冬の日電柱に寒風がうなり、吹雪ふぶきの朝、電柱の片面に、雪が吹きつけられて凍っているのがちようどその面おもてに日でも当たっているように見える。その電柱の数倍の高さと太さとして、マストは海中、何のさえぎるものもないところに吹きさらしに突っ立っているのだ。

全くそのマストを相手の仕事はあぶなくもあるし、寒くもあつた。

仕事は一番のマストから始められた。自分で自分のからだをロープに縛りつけて、それを、マストのテツペンヘプロツコを縛りつけ、それへそのロープを通して、一端を自分が持っているのだ。塗りながらだんだんそのロープを延ばし、延ばしては塗り、塗っては延ばして下の方へ下がって来るのだ。

われわれの仕事はペン塗りは夏においては、大変やりいいのである。それはペンキがのびるからである。だが、この場合、ペンキはいくら油でのぼしても、夏の時よりも、はるかに濃い。波田は濃くて堅くて延びの悪いペン罐かんを腰のバンドに縛りつけて、マストのテツペンから塗り始めた。

向こう側を西沢が塗っていた。

高架栈橋は、マストのテツペンから四、五間下に見えた。

「栈橋は高いようだが、マストよりは低いななあ」波田は西沢にいった。

「そらそうだ、だがどうだい、寒いこたあ、手に感じなんぞありやしなげ」

二人は、ペンブラツシユを子供ふたりが箸はしをつかむようにしてつかんで塗っていた。風のために彼らをつるしているロープは揺れた。彼らは機械体操をする人形のように、足をピンピンさせながらマストから、離れず、即つかずのところぶで仕事をしなければならなかった。どうかすると二人の労働者は、マストの一つの側で打ぶつかるのであった。

「オイオイ、こっちはおれの領分だぜ！」

「冗談言っちゃいけない」

そこで二人は横をながめる。栈橋が左の方になれば、西沢が正しいのだ。西沢は船首か

ら船尾を向いて、船首部分を塗るのだった。

彼らをつるしたロープまで、堅く凍ったように感ぜられた。彼らはもちろん「棒だら」のように凍って堅くならないのが不思議であった。

「こんな団扇うちわみたいなボロ船を化粧してどうするってんだらう。え、船長も物好きじゃねえかなあ、いくらお正月だつて室蘭でマストのペンキ塗りなんざ、万寿丸の船長でなきや考え出せねえ名案だぜ」西沢がガタガタ震えながらそれでも、早く降りたいばかりに、盲めくら杖を振り回してもするようにむやみに塗り立てた。

「やつあ、おいらが、マストにくつついて凍ったのが見たいんじやなかろうかい？ え、おれは、あいつの魂胆はてつきりそこだと思うよ」波田も震えていた。

「きまつてらあね、金魚が凍りついたのよりや、よつぽど、人間がマストへ凍りついた方が珍しいからね」西沢が答えた。

大きなマストも、その高い部分では、随分揺れた。それは、その磨みがき澄ました日本刀のような寒風が揺するのだった。

「はたちやそこらでペンカンさげて、マストにのぼるも——親のばちかね」西沢は坑夫の唄うたをもじって、怒鳴った。

——シューシュ、どころか今日きょうこのごろは、五銭のバットもすいかねるシューシュー——と波田もうたった。

「何だ捨てられた小犬みてえな音を出してやがる」西沢が冷やかした。

「おめえのはペン罐をたたいてるようだよ」波田がやりかえした。そして彼は下を見た。

「オイ、まだ大分あるぜ、何とかうまい便法はねえかなあ」波田はこぼした。

「あるぜすてきにいいことが」西沢がいった。

「ヘッ！ 下においてストーブにあたるこつたろう」

「もつといいんだ。マストのテツペンから海へ飛び込むんだ！ そうすれや、どんな難病

でも、いやな仕事でも一度に片がついてしまわあ」

「全くだ」

彼らはほとんど、無意識に、マストを、こすっていた。水の中で金魚が凍るように、彼らは、宙天の空気の中で凍りそうであった。

西沢と、波田とは、マストのペンキ塗りを「やりじまい」で命じられたのであった。

「やりじまい」とは字のごとく、やってしまえば、その日の仕事のしまいということであった。つまり仕事を、請け負ってやることであった。

それは大抵都合の悪いことであつた。なぜかならば、仕事を当てがう方では、普通の一日行程ではなし遂げ得ないで、しかも急いでいる仕事を「やりじまい」に出すのであつた。すると、出された方では、尻尾しっぽに紐ひもを縛りつけられた犬のように、むやみにグルグル回つたり、飛びはねたりして、その仕事から免れようと狂うように働くのだ。

「やりじまいだぞ、二時には済まあ」セコンドメートは、未熟とうなすの南瓜のような気味の悪い顔を妙にゆがめて、そう言つて、自分の室へ行つてしまふ。そうするとその仕事はきつと五時には済む。普通より一時間だけ余分に働いて、二倍以上の骨を折つたのだ！

彼らは「やりじまい」という「わさびおろし」で自分をすりおろすのだ！

それは、陸上における請負仕事、あるいは「せい分」仕事、と同じものだ。

「やりじまい」の仕事で、時間のおくれるのは、それは労働者に「腕がない」のであつた。仲間から言つても、それは「だらしのない」ことだった！自分からいえばそれは「自業自得」であつた。そして、資本家から言えば、「だからこれに限る」のだった。それで、「おれたちがもうかる」のであつた。

彼らは、ほとんど骨の髄までも冷たくなって、夕方、ほかの水夫たちが、飯を食つてしまつたあとでようやく、その「やりじまい」を終えた。それは彼らの言うのが正当であつ

た。「やりづらい！」と。

三九

一切はともかくも順当に行つた。

高架栈橋からは、予想以上に、石炭を吐き出した。それは黒い大雪崩おおなだれとなつて、船せんへ文字どおりになだれ込んだ。仲仕は、その雪崩の下で、落ちて来る石炭を、すみの方へすみの方へと、シヨベルでかき寄せた。上の漏斗じょうごからの出方が速くて量の多い時は、数十人の人夫のシヨベルの力は間に合わないで、船のハッチ口は石炭でふさがつてしまい、人足たちは船艙の四すみのあいたところへ密閉されてしまった。

彼らは、苦しさと暗さことから、その身を救うために、そのありたけの力で、石炭をすみの方へかき寄せた。そのシヨベルの音、石炭のザクザク鳴る音、彼らが何か呼ぶ声が、デツキの上をあるいていると、初めての者にはどこから聞こえて来るかわからないのと、その音がまるでもしあるなら冥土めいどからでも出ただろうといったふうな妙に陰気な響きであるので、必ず驚かされるほどであつた。そしてハッチ口に山のように高く積んだ石炭は、う

まくダンブルへ収まつて、中の労働者が上へ上がることができらるだろうかと、心配せずにはいられないほど高かつた。

労働者たちは、時とすると半日も石炭に密閉されて、トンネルに密閉された土工のように、暗い中で働いているのであつた。出て来ると、まるでからだじゆうが肺ででき上がった人形でもあるように、幾度も幾度も飽かずに深呼吸をしているのであつた。そして、ごま塩のついた、非常に大きな、——それは他のどこの港でも見られない——人間の頭ほどの太さの、せいとん整頓した、等辺三角形の、握り飯を一つずつ、親方から受け取つて、船室へ持つて来ては食つていた。

それはセーラー中での食い頭がしち三上できえも、一つはとても食べられなかつた。それにはごま塩以外何にもおかずはついていないのであつた。人足は夕食にその握り飯を一つもらうと、明け方までは、義務として、残業労働を、再びその窖あなの中で、「あの世」の人のごとくに続けねばならないのであつた。

石炭の運賃は、そのころ一トンについて室浜間が五円であつた。従つて、石炭は水夫室にまで積み込まれた。水夫の月給は八円ないし十六円であり、仲仕、人足らは八十銭の日賃銀をもらつていた。そしてその途方もない握り飯に釣られると、一円三十銭だけ、一昼

夜でもらえるのであった！　そして石炭の運賃はトン五円であった！

ありとあらゆるすき間は石炭をもつて填てんじゅう充じゅうされた、保険マークはいつも波が洗って、見えなかつた。そして、糧食は、かつきり予定航海日数だけが、積み込まれていた。

船主や株主らにとつては、黄金時代であつた。水夫たちや、労働者たちにとつても過度労働の黄金時代であつた。

たとえば、汽船はゼンマイ仕掛けのおもちやのそれのようだつた。ゼンマイのきいている間は、キチキチとすこしも休むことなく動いた、従つて、水夫たちも船長にしても、同じようなことであつた。船長はややそのために水火夫へ対して当たつたのかもしれない、迷惑な話だ！

人足たちは、棧橋から轟ごうおん音と共に落ちて来る石炭の雪崩なだれの下で、その賃銀のためにではなく、その雪崩から自分を救うために一心に、血ちまなこ眼こになつて働いた。そして、そのために彼らの労働は一月に二十日以上は、どんなにいい体格の者にも続けられないのであつた。そして、彼らは粉炭を呼吸するのだ。

しかし、よかつた。一切がわからなかつた。一切が知られなかつた。馬車馬のように暗やみくも雲にかせぐのはいいことなのであつた。そして、資本主にとつてもこの事はこの上もな

くよいことであつたのだ。そして、そのころは欧州戦争が行なわれていたのだ。

その時であつた！ わが日本帝国の富とみが世界列強と互角するようになったのは！

その時であつた！ 日本が富んだのは。その時であつた、日本の資本主達が富んだのは！ 労働者はその代わり過度労働ですつかり、からだをブチこわしてしまつた！

夕食は船ではとつくに済んだのに、昼ごろふさがってしまったハツチ口はまだ開かなかつた。デッキの下では、——テーブルの下あたりでも、ボーイ長の寝箱の下あたりでも、あちこちで、ゴトゴトと、異様な響きが絶えず続いた。そして時々うなるような人声が聞こえた。そして、それらも七時を過ぎると、ようやく穴があいた。それは難治の腫はれ物が口を開いて膿うみを出し切つたのと同じ喜びを人足たちに与えた。山の絶頂へでも登りついた人のように、彼らはシヨベルを杖つえにして石炭を踏みしめて上のぼつて来た。

そして、その例外に太い握り飯にありつくのであつた。

彼らはこうして、ダンブルの中で土蜂どばちのような作業に従つて、窒息しそうな苦痛をなめている時に、その境涯をうらやんでいるものさえあつた。

それは高架栈橋上の労働者であつた。それは船のマストと高さを競うほど高いのであるから、その風当たりのよいことは、送風機のパイプの中のものであつた。

彼らは、石炭車の底部にある蓋ふたをとる。石炭は棧橋へ作られた漏斗しゅうとうの上へ落ちる。そして、船のダブルヘッドツと雪崩なだれ込むのである。彼らが労働する部分は皆鉄ででき上がっている。そして、その鉄は焼き鏝べいのように、それに触れると肉を引んむいてしまう。彼らは帆布で作った大きな袋を足に「着て」いる。彼らはまた毛布と毛布との間に、綿や毛などを詰めた赤や灰色の仕事着を着ている。それは、彼らが、その目の回るような、過激な労働時間以外に着ている、唯一の防寒具である。彼らは、また、皆、鎮西ちんせい八郎はちろうが朝ともが、はめていただろうと思われるような、弓の手袋に似た革手袋かわの中で、その手を泳がせている。

北海道の寒風がりんごの皮を緻密ちみつにし、その皮膚を赤く染めたように人足らも、その着物を厚くし、その頬ほほを酒飲みの鼻の頭のようにしている。

だが高速鋼のカッターは、鋳物を、ナイフで大根でも削るように削る。と同様に北海道の寒風は、労働者たちから、その体温をどんどん奪ってしまう。棧橋の上で働いていることは、焰ほのおの中へ氷を置くのと反対な、しかし似合った作用をする。

彼らは、その労働を終えた時、帰って行く、空荷車からの上へよじ登るのが困難なくらいに、からだかたが硬くなっているのだ。彼らの一人ひとりは言っていた。

「まあ、生きながら凍ったようなものすら」と。

しかし、労働者は、生きて行くためには死をおそれてはならなかった。

四〇

藤原は、自分の寝箱の中で、腹ばいになって、紙きれに何か書いていた。それは、何本の抜き書きでもするように、そばには二、三冊書物が置いてあった。彼は、煙草たばこをふかしていた。二本一緒にくわえたらいいだろうと思われるほどむやみにスパスパとふかしていた。彼一人でおもてを燻くすべ上げるに充分であった。

ダブルには、ほとんど石炭が一杯に詰まった。本船は、予定どおり、明朝出帆して、横浜へ帰って正月を迎えることができそうであった。横浜で正月を迎えることは、すべての船員の希望であった。「室蘭むろらんではしやうがない」のであった。

横浜には船長も、機関長も、だれも彼もが、世帯を持っていた。その自分の世帯で、お正月を迎えたいということは人情として当然であった。万寿丸は、三十一日の午前十時ごろか、もつとおくれて横浜へ帰りつける予定であった。従って、その予定は、一時間も延

長しうるものでなかつた。

明朝一番で船長は登別のぼりべつの温泉から、その愛人と別れて、一番の列車で室蘭へ帰って来るはずであつた。

船長が、船へ上がり切ると同時に、ブリッジには、彼の姿が現われるだろう。そこで、彼は「ヒーボーイ」と、錨いかりを巻くことを号令するであろう。

それまでは、今までとすこしも変わらないだろう。だが、それからが変わるだろう。彼らは「横浜正月」が、すでに実現されうるものと信じていた。その安心を、はなはだしく揺り動かされ、のみならず、その他のことも一切が、まるで、プログラムと違った方向に脱線して、坐礁ざしやうしたということを、さとらねばならないだろう。

そして、それらの原因は、水夫らが、要求条件を提出して、目下交渉中であるから、彼らは、働いていないのだ。それで、船が動かないのだ！ ということが、船内一般に知られるだろう。われわれの要求条件は、エンジンの労働者によつても、吟味せられるだろう。この要求条項は、彼らにも、何らかの衝動を与えるだろう。そして、そのために、この要求条件は、よく考えて、作らなければならない！

藤原は、煙草の煙の間から、こんなことを考えていた。

彼は、その紙つきれをながめた。それには、要求条件の原案らしい文句が、書かれてあった。労働時間の制定、労銀増額、公休日、出帆、入港は翌日休業、公傷、公病手当の規定及び励行、深夜サンパン不可、などが乱雑に書かれてあった。

彼は今、それらの条項に、要求書としての形を与えるために、苦しんでいるのであった。「チエツ！」藤原は舌打ちをした。そして、煙草の灰を本の表紙の上に、やけに払い落とした。「こんなことを今さら、要求しなければならぬなんて」

彼は、その紙きれをポケットに入れて、寢箱からおりた。そして、波田へたずねた、「小倉君の方は、どうなつたんだろう」

「さあ、それを、まだ何とも聞かないんだがね」波田も、心配しているのであった。

「小倉は、ウアツチ当番かい、今？」

「どうだか」波田は、出入り口まで行ってブリッジを見た。

小倉は、ブリッジを、アチコチ歩きまわっていた。

「いるよ、チャートルーム海図書で、相談しようじゃないか」波田は、ストキに耳打ちをした。ストキはうなずいた。

「じゃ僕が、都合はどうだか、きいて来るから、君は、エンジンの上で、待っててくれた

まえ」

波田は、そのまま、気軽に飛び出して行った。藤原は、一度奥まではいって、そこで、ベンチに腰をおろした。そして、煙草へ火をつけた。しばらくすると、フト何か、忘れものでも考えついたように、立ち上がって、デッキの方へ出て行った。

幸いに、メーツらは、明朝出帆の名残なごりを惜しむために、皆、どこかへ行ってしまっていた。

三人は、チャートルームへ集まった。

「西沢君に来て、もらわなきゃ」小倉が言った。

「今、女郎買いの話で、おもてを持てさせてるから、目立ったらいかんだろう、と思うんだがね」藤原が答えた。

「あいつあ、全く、しようがないよ。女郎買いの話となったら、まるで、夢中になっちゃまやがるんだからね、もう少しまじめな時は、まじめに、やってくれなくちゃ、困るんだけどなあ」波田は、くやしがつた。

「しかし、中には、中にはじゃないや、ほとんどだれもが、それ以外に何も無いのに、それ以外のものを、あの男は持つてるだけ、いいじゃないか、味方に対しては、われわれは、

徹底的に寛容な、態度を取らなきやならないよ。そうしないと、味方の戦線から、自然に壊滅しちまうからね」藤原はなだめた。

「で、コーターマスターの方はどうだろう。まだ、話してもらえなかつたかしら」藤原は、小倉にきいた。

「まだ、話さないんだよ。どこから切り出していいんだか、話が、すっかり、打ちまけられないので困っちゃったんだよ。だからね、要求書を出す間ぎわになって、それを見せて意見を聞いたら。そしてもし、コーターマスターとしての、提出要求でもあるということなら、それを追加して、提出するということにしたら」小倉は答えた。

「そうだね。その方がいいだろうね」藤原は賛成した。「その方が、秘密を保つ上にも、かえっていいだろうよ」波田も賛成であった。

「じゃあ、僕は、西沢君を連れて来よう。そして決めちまわなきや、明日の^{あす}ことになるのじゃないかい」波田は、何だか追っ立てられるように、心が急がしいのであった。

「ちよつと」と小倉は手で制した。「僕は、もう十五分で非番だから、非番になったら、^{あす}ももの倉庫で寄り合つたらどうだろう」時計は、八時前十五分をさしていた。

「そう、そうしよう。一人ずつ、チョツと上陸すると、いった格好をして、出ればいいか

らなあ」

「じゃあ、そうしよう」そこで、二人ふたりのセーラーは下へ降りた。

おもてへ帰った波田は、西沢に、八時の鐘がなつたら、ともの倉庫で、相談があるから、わからないように抜けて来て、くれるようにといった。西沢はうなずいた。

ストキは、ベンチへ聴衆の一人と、いったような顔つきで腰をおろして、例によつて、煙草をふかし続けた。

四一

八時が鳴った。その時には、もう藤原はいなかった。波田は、ボーイ長のそばに、腰をおろして話していた。「じゃ、正月までの菓子を、食いためて来るからね。おみやげを忘れやしないから、待っていたまえよ、え、相変わらず、東洋軒さ、ハハハハ」と、波田は、ともの倉庫を東洋軒にしまった。

「え」西沢は頓とん狂きやうな声を出した。「波田君！ 僕も、たまにや連れて行けよ」そこで、二人は、連れ立って、倉庫へやって来た。

藤原は、目玉ランプを抱えて、綱敷き天神みたいに、ホーサーの、巻き重ねてある上にすわっていた。やがて小倉もやって来た。

それで、一切は動員された——というわけであった。

「そこで、僕らは、いつ浪なみにさらわれるか、ウインチでやられるか、どこで、やられるかわからない危険な労働をしているのに、ボーイ長のように、負傷はさせつ放し、死ねば死につ放し、というような状態では、とても不安心で、落ちついていられないんだ。それで、僕は、公務疾病、傷害手当規約を本船に作って、それでもつて、扶助すべきだと思う。それを諸君に、計りたいんだが。そして、ただ、そんなものを作ってもらいたいと、いうのだけでは役に立たないものを作るだろうから、こつちで二人ふたり、向こうで一人ひとりの委員を出して、その委員会によつて、扶助規則を作るということにしたら、どうだろうと思うのだがね」藤原は言った。

「そりゃ、ぜひ必要なこつた」西沢が言った。

「しかし、規則の点だが、委員会で、おもての意志が、はたして貫徹するだろうか、僕は、その点に疑いを持つよ」波田が言った。

「そうだ、だから、こちらから二人、向こうから一人と、いう割合にしといたんだがね」

藤原が答えた。

「そりゃ、形ではそうなるけれども、実際に、その委員会は、ともの一人のために、おもての二人が支配されることに、なりはしないだろうか？　もし、おもての二人が、支配されなかったためには、僕は単に、その条件のみにについても、一度ストライクが、起こされやしないかと思うんだよ。そうなれば、それは、二重の手間をとることになるからね」波田が言った。

「そうさなあ、それじゃ、どうすればいいんだろう」小倉が言った。

「なるほどね。こつちからの委員は、木偶でくの坊ぼうも同じだからね」藤原も賛成した。

「で、結局、どういうふうにすればいいだろう」

「僕の考えでは、こつちで作ってしまった、向こうには、ただ、それを承認するか、しないかの二つの回答のうち一つを、選ばせるだけでいいと思うんだがね。でないと、何しろ出帆前のとつさの間に、決する勝敗だから、出帆後に持ち越せば、こちらの負けになるに決まってるんだからなあ。だから一切の条件は、それを承諾するか、しないかどちらかのみ、決定のできるように、ハッキリしたものにして置いて、そして出帆間ぎわの致命傷を突くということが、一等よかないかと思うんだがね」波田の考えはこれだった。

「そう、その方法はいいと思うね、今室蘭には、一人も、休んでるものはないそうだ。二、三日前まで休んでいた者が、二人ばかりあったそうだが、仁威丸じんいまるに、便びんを借りて浜へ帰ったそうだ。室蘭なんぞじや雇い入れする船はないそうだ」小倉が言った。「だから、たとい四人でも五人でも、時機さえしつかりつかまえば勝てると思うよ」

「だから、その要求条件を、ここで作ろうじやないか」西沢が言った。

「それは、藤原君に草案が一任してあるから、それでもって作って行こうじやないか」波田が言った。

そこで、藤原の原案によって、新しい要求条件が、巻き重ねられたロープの上で、その夜十一時ごろまでかかって作り上げられた。

それは、

一、労働時間を八時間とすること。（現在十二時間以上無制限）

八時間以上は、必要なる場合労働するも一時間に付き、正規労働時間の倍額の賃銀を支給すること。

二、労働賃銀増額、——水火夫、舵手だしゆ、大工ら下級船員全体に対して、月支給額の二割を左の方法によって増給すること。

方法、下級（下級とは何だ！）船員全体の月収高の総計の二割を、下級船員の人数に平均に配分し、これを在来の賃銀に付加すること。

三、日曜日公休を励行すること。

四、公休日に入出港したる時は、その翌日を休日とすること。

五、作業命令は一人より発し、幾人ものメーツより同時に幾つも発せられぬようにすること。

六、横濱着港の際深夜、船長私用にてサンパンをもって、水夫を使用して、上陸することに對して、吾人ごしんこれを拒絶すること。

七、公傷、公病に對しては、全治まで本船において、実費全部を負担し、月給をも支払うこと。

以上

というようなものであった。それは、小倉が、舵手室へ帰って清書して、波田に手渡しする。交渉の順序は、明早朝、出帆準備にとりかかる前に、チーフメーツに手交して、われわれは全部の要求が承諾されるまでは船室から出ない——ということに決定した。

要求条件は、労働時間と、労銀増額と、公傷病手当の三つは完全に利害をフアヤマンの方と一致した。そして、その三つは、要求条項中重要なものであった。「だから、われわれは、この要求をフアヤマンの方へ無断でやるというわけには行かないだろう」「もちろん」

そこで、小倉がフアヤマン（火夫）コロツパス（石炭運び）に報告し、藤原がオイルマン（油差し）に、水夫たちはこういう要求条件を出して戦う、戦線を共同してもらえれば、この上もない事だが、そうでなかったら応援をしてもらいたいと、いうことを申し込むことになった。しかし、それは、われわれの要求条件がチーフメーツの方へ持って行かれると、同時でなければなるまい。なぜかならば、それは、セーラーの方で計画実行しなければならなかつたほど、セーラーによつては、緊密な要求だが、火夫の方では、ある者にとつては、そうでないかもしれないし、より一層われわれがおそれるのは、スパイだ。スパイに対しては、われわれは絶対に、気をつけねばならない。それはペストのバクテリアよりもこわいんだから。スパイはいつでもいそうなどころにいないことは、柳の下の鱒どじょうと同じことだから、なおさら、われわれは細心に注意しなければなるまい。だから、少し手おくれのように思われるかもしれないが、明日あすの朝にした方が、よくはないか、それはど

うしても、明日の朝でなければならぬ——という事も決定した。

そして、今一つ重大なことが、決定された。それは、この要求提出を機会として、それが成功しようが失敗しようが、とにかく、要求を出したということにだけは、成功したわけなんだから、その記念として、われわれは海員組合——それがなければ作ろうし——へ加盟しようではないか。確か、それはごく最近生まれたように、おぼろげながら聞いた。それは、浜に帰った上で、早速^{さっそく}調査して組合があれば、直ちに入会に決することになった。

公傷病手当の規約については、直ちに実行するのは、もちろんであるが、ボーイ長の手当は、その新しく決定された規約によつてなすこと、を忘れないように交渉すること、これも、その通りに決定した。

彼らが、こうして、彼らの必要なる要求をするのに、何か、不都合ななすべからざる行為を企てでもしているように、彼ら、自身がまず、これを秘密にし、それが、ならない時は——という善後策をも考えねばならなかったことは、何を意味しているか。

それが、何を意味しているかが、私の知ったことじゃない。ただ、私は、彼らが、人間としてあたり前のことを最小限度に要求する時に当たって、いつでも、その企ては、慎重

に秘密にされる習慣を知っている。だれでも、地獄に落ちたくはないのだ。だれが、人間をこんなに、コソコソするように仕込んでしまったのか。

ちようどこの時、船長は、そのマストがきれいになり、サイドが化粧し、うまい具合に満船したという報知を、チーフメーツから受け取って、彼女と、酒を飲んでいた。彼女は、「これが、この年のお別れで、来年は、また、すぐ会えるのね」と言ったふうな意味のことを言った。

「おれは、お前の美しいのが好きだけれど、そこがまた、おれを心配させもするんだよ」と、彼は杯をなめた。それは登別の温泉宿の一室で、燃えるような、緋ひの布団ふとんのかかった炬燵こたつの中であつた。

ボーイ長は、その時、鉄のサイドが、同時に彼のベッドの一方である、その寢箱の中で、海のものとも山のものともつかない傷と、病やまいのためになつていた。

水夫らは、彼らを、あまりしつかり締めすぎる鎖を、少しゆるくするように、要求する相談の最中であつた。

三田子みたしやく爵は、この汽船会社と、その炭坑との社長だつた。彼はその時、何をしていたか、雲の上に隠れてしまつて見えなかつた。

四二

夜が明けた。風がヒューヒューうなっていた。灰色の空は、どこからともなく、山となく平原となく水平線となく、とけ合ってしまった。その間を粉のような灰色の雪が横つ飛びにケシ飛んでいた。だが、大した雪ではなかった。目も、鼻も、あけられないと言う、あの特徴的のやつではなかった。風は、大黒島を代われれば必ず、前航海ほどには吹いているだろうとは想像された。

ハツチは、まだその口をあけたままであった。それは粟^{あわ}おこしを食った子供の口の辺に似ていた。デツキじゆうは石炭だらけであった。その各片はデツキの銹^{いしごぶ}瘤のように、デツキへ堅く凍りついていた。

ボースンはチーフメーツのところへ、その作業の順序を聞きに行った。すぐそのあとからストキ藤原が、清書された要求書を持って続いて行った。小倉は、起きると共に火夫室へ行った。

水夫らは、それはいつもの朝とは何だか大変違った朝のような気がした。全く実際違つ

た朝ではなかつただろうか。

ボースンは、チーフメーツの室にはいった。そして彼はあとを締めようとすると、もうストキがすっかりそのからだを入れていた。そして扉はあとからストキによつて締められた。

「お早うございます」とボースンはいった。

「うんすぐ……」チーフメーツが仕事の命令を発しようとする、ストキはすぐに、チーフメーツの机の上に、その要求条件を載せた。

「水夫一同は、その要求書どおり要求しますから、要求を容れてください。そしてその要求書に判をおしてください。つまりそれが要求承認の意味になります」

ボースンはそこへ凍りついた棒のように立っていた。

チーフメーツは、暗礁あんしやうに乗り上げたよりももっとも驚いた。

それはありうることではなかつた。暗礁はありうるが、水夫らが要求書を出すなんてことが！ 彼は憤おこつてしまった。

「何だ、要求だ！ どんな要求だ！ 乗船停止の要求か！」チーフメーツは怒鳴った。

ボースンは縮み上がった。彼は、私は知りませんと言いたかったが、——そこにストキ

が立っているではないか——ああ、困った。彼は字義どおり立ち往生した。

ストキは平気だった、「初めやがった」と彼は思っていた。

「そこに書かれてある通りの要求です。ご質問があればお答えいたします」

ストキは「癩しやくにさわる」ほど落ちついていた。

「どんな要求でも今はいけない。横浜へ帰ってからだ！」チーフメーツは、事態が自分の考えてるように簡単でもなく、また予想どおりにも行かないだろうとすることをさとした。

「私たちは、室蘭で片がつかなければ働かないだろうと思います。この要求はほとんど海
 事法に定められてある最小範囲から、きわめてわずか出ているか、いなくらいのものだ
 し、その他の問題も普通の問題です。今ごろ要求するのは、われわれの迂愚うぐであり、同時
 に万寿丸の恥辱でしょう。しかし、それは、われわれにとっては、全く切実な問題なので
 す。これは、あなた方にとって全く一顧の価値もない、軽易な問題でしょう。それがわれ
 われには重大な問題なのです。これをごらんの上承諾してくださいるように希望します」

ストキはまるで小学校の生徒が読まされる時のように、「まじめ」くさってそう言った。
 ボースンはもじもじしていた。逃げるにも逃げられないわけであった——

「とにかく、おれには何とも返事ができない。船長が帰ってから、船長と相談して返答す

る。だが、ストキ、こんなことあよした方がいいぜ、これはお前のためにおれは言うがなあ、もうお前も三十三なんだから、考えてもいい年じゃないか、これや全くよした方がいいぜ、船長がウンというはずがないと思うぜ。そうすれや、お前たちや一年か三年ぐらいの停船命令は食わにやなるまいぜ、え、どうだ、おもてへかえって、水夫らに思いかえすようにすすめたら」

チーフメーツは、そのコースを転換した。

「私はそういうわけには行きません。ひつ込められるような、どうでもいいような要求を私たちは出しはしません。それはわれわれの生命や生活にとって切実な事柄ばかりなんですから。冗談や退屈しのぎ半分でこんなことをしはしません。私たちは乗船停止なんてことを今ごろ恐れているようでは、こんな要求ができないことを知っています。要するに、私たちは、この要求が、容れられなければ、私たちとしては、どんな仕事にもつかないという申し合わせがありますから。私はただ、使いとしてこの要求書の提出とその説明とを引き受けて来たのです」ストキはチーフメーツの戦術にはつり込まれなかった。

「それじゃどうしてもきかんといいのなら、船長におれから渡すまでだ。だが、それは承認されないよ、そしておれの顔も踏みつぶすつもりなんだな」チーフメーツは自分の手で

納めたかった。

「そうです！　船長に渡してください。それから、あなたの顔をつぶすとかつぶさないと
か言うのは、おかしいと思います。そんなことはどうだっていいようなものだけれど、誤
解があるといけないからいつときますが、この要求書は最初あなたに出したんですよ。そ
うするとあなたはおれでは決められんから船長へといわれるのでしよう。で船長へ渡すこ
とを頼めば『おれの顔をつぶす』といわれるのですね」

「そうではないか、おれの言うことを聞かんじやないか」チーフメーツは一つグツと押し
た。

「それではあなたは、私たちの要求書の決定権を持たないというときながら、握りつぶす
権利を持つてることになりはしませんか、握りつぶすことは否定することじゃありません
か、否定する権利だけ持つていて肯定する権利を持たないと言うことは、このごろの流行
にしても、理屈には合わないじゃありませんか。だから、あなたに対して、今ではわれわ
れは何らの要求もしません。ただ取り次いでいただけばいいのです」ストキはやっぱりま
じめに、急がず、何か相談でもしてるとような調子で話した。

それは全くチーフメーツの顔をつぶしてしまった。彼はうんともすんともいわなかった。

「船長が帰ったら渡すよ」

「どうぞ願います」ストキはいった。

大工はフォックスル（おもての甲板）へ上がって揚錨機キャブスタをゴットンゴットンと調節したり、油を差したりしていた。

ボースンはチーフメーツの室で、おそろしくきまりの悪い思いをしながらまだ、そこに突っ立っていた。

「どうしたんだい。ボースン、お前はこれを知らなかったのかい」チーフメーツはその机の上の要求書を指さしてきいた。

「早いことをやるものです。私はまるで存じませんでした」ボースンはよみがえったように答えた。彼はもう先刻から、何でもいいから一言口がききたくてたまらなかつたのだ。

「すこしも知らないじゃ困るじゃないか、お前に責任があるんだぜ。一体どうするつもりなんだ。それに今日きょう出帆きぼうが遅れでもすると正月には横浜へ帰れやしないぜ。そんなことでもなつて見ろ、船長は、一人残らず下船ひとりを命じかねないから、お前はどうするつもりかい」チーフメーツはボースンから切りくずして行こうととっさに考えついた。

「私は……、困りましたなあ、ボイラーを揚げる時もようやくなだめて仕事をさせたので

すけれどもなあ、とにかく全く私もぬかっていたのですから、おもてへ行つてできるだけ仕事するように話して見ます……」彼は確信でもあるもののようにあわててそこを立ち去ろうとした。

四三

船長は帰つて来た。

ボースンは、水夫たちへ「無分別」をしないように頼みに行こうとしているところへボーイはチーフメートの室へ現われた。

「チーフメートさん、スタンバイだそうです。船長は今ブリッジに上がられました」

そのままボーイは去つてしまった。

何と言うこつたろう。「始末がつかない」ボースンも、チーフメーツもこれからなぐり合ひでもしそうな格好で、二人向き合つてそこに突つ立っていた。

「とにかく、お前はおもてへ行つてスタンバイしてくれ、何とでもごまかして水夫らを働かしてくれ！ 僕もすぐ行くから」チーフメーツはようやくやくそういうと、急いで帽子をと

った。

ボースンは追っかけられた猫ねこのように、おもてへ飛んで行った。

チーフメーツはブリッジへ駆け上がった。右の手には要求書を引っつかんでいた。

船長はスタンバイをかけたのに、チーフメーツがフォックスルに現われないので、彼女との別れ前からそのまま保っていた幸福感が、爆発しかけていたところであつた。彼はチーフメーツが上がつて来たのでチョツとニツコリした。

「どうも、サア、スタートしよう」船長はいつた。そうして息を切らしながら彼の前に突つ立っている、チーフがただじやないのを見てとつた。そしてその紙つきれへ目をつけた。「水夫めらが要求書を出しているのです。舵夫だふまで二人はいつているのです」チーフメーツはようやくこれだけをいうことができた。彼は要求書を船長の前へ差し出した。

水夫の出入り口では、三尺幅の出入り口へ、一尺幅のベンチを抱かかえ出して、藤原が出入り口へ最も近く、波田、小倉、西沢、と腰をおろして、顕微鏡的なピケツティングラインを張っていた。藤原は船長とチーフメーツとが要求書のことを話しているのを、おもての出入り口からながめていた。

船長はチーフメーツの要求書を見ようとしなかつた。そんなものはチーフメーツが、

引き破いてしまえばそれで円満解決が、船長に言わせるとつくのであった。それなのに、チーフは、そんなくだらないことまでもおれに持ち込んで来るのであった。

「そんなものは、引き裂いちまいたまえ！ そんなもの、大体君がビクビクしてるからいけないんだ！ 万事は横浜へ帰ってから聞いてやるとそう言いたまえ」船長はまるでチーフメーツが指さしがね尺ねででもあるように頭から足までを計った。

「私もやつて見たんです。ところが、それが容いれられるまでは絶対に働かないというのです。来年の春になつても働きやしないとこうなんです。そしてそれは船長が決定権を持ってるんだから、あなたは船長へ渡してさえくれればいいんだ——と言うんです。私はどうせあとでわかることだからと思つて取つといたのです」チーフメーツも、船長からガミガミやられると「何だこの野郎、おれだつてあと一年で船長の免状がとれるんだぞつ」と思わざるを得ないのであった。「団扇うちわ見たいなボート見たいなチョコマン舟の船長で威張つてやがら。へん、ボースンといった方がよく似合うよ」と憤慨するのであった。が、それは思うだけのもので、何ともしかたがなかつた。

「どんな寝言が書いてあるんだか見せたまえ」船長は要求書を取った。

「そら、やつは受け取つたぞ！」藤原が低い力のある声で言った。

「フン、フン」船長は軽蔑けいべつしきつた心持ちを鼻から吹き出した。が、第六の条項、深夜サンパンを船長の「私用」では漕こがない、と言う点に至つては彼は鼻を鳴らすことをやめた。これは彼自身に關することであつた。由々ゆゆしい大事であつた。

「セーラーを呼べ！」船長は無視するわけには行かなかつた。無視すれば船も動かないだろうし、横浜で正月もできないし、それに、彼のサンパンに対して、文句をつけるとは全く、けしからぬのであつた。

船長は、スタンバイの命令を出しつ放して、サロンへは行って、そこで、水夫らを「とつちめ」てやろうと待ち構えた。船員手帳は、チーフメーツに持って来さして、テーブルの上へ積み上げた。

かわいそうに、ボースンと大工は、フォックスルで鼻水を凍らせていた。

機関長はエンジンへは行って、ハンドルへ、手をかけて待つていた。

蒸気は、どんどん上がつて来た。セーフチイヴアイヴアルヴが、吹きそうになつて来た。サロンのテーブルにはメーツが船長の両側に並んだ。チーフ、セコンド、サードと。

ボーイはおもてへ飛んで行つた。

「セーラー全部、ボースン、大工、コーターマスター、みな、残らず、サロンまで来てく

れと、船長が言ってるよ。大至急！」煙のように、彼は、また、飛んで去った。

そこで水夫らは出かけた。

「やつは、高圧的になるつもりだな」藤原は思った。波田、小倉、西沢、各は、おのおの別様の戦闘意志を持っていた。

ボースン、大工も青くなつて来た。

この時、フアヤマンの方でも小倉が、持つて行つて見せた要求条件が、問題になつて、主戦論と非戦論との猛烈な論戦が行なわれていた。だが、全体として階級闘争ということ、ハツキリ頭にはいつていなかった。従つて、それは適當ではある、けれども、まだ直接の刺激、衝動が来ない、というような「感じ」が、彼らを、水夫らと共に立たせることを妨げた。しかし、彼らは、立たないにしても動揺はしていた。それは、立つまいものでもない気配に見えた。

彼らの出入り口の前を水夫らが通る時に、彼らは、かんせい喊声をあげた。

それは、サロンまで響き渡つた。

これらのことは、万寿丸ができて、海にうか泛んでから初めてのことであった。

水夫たちは、え笑みを浮かべて、火夫たちにあいさつ挨拶しながら通つた。それは、まるで、目

をさました獅子の第一声のようでもあった。

何となく、いつもと違っていた。スタンバイがかかったのに、船体はピクともしない。罐前の火夫や石炭庫のコロッパスは、デツキまで子子のように、その頭を上げに来た。

オイルマンは機関室からのぞいた。

サロンでは、交渉が開始された。もつとも、船長は、一撃の下にやつつけるはずであつて、交渉などをする気はテンデなかつたのだ。ところが、どうしたはずみかいつのまにか、交渉の状態にはいった——のであつた。

四四

「これは、だれが、書いたんだ！　これは！　この要求書は？」船長は、その一声をこの文句によつて切つて離れた。

「私が、書きました」舵手の小倉が答えた。

「お前が？」船長は、その回転椅子から、無意識に腰を浮かしたほど驚いた。小倉は、コーナーマスターの中で、彼の一番愛していた従順な青年であり、頭脳もよく仕事もできる、

その上風采ふうさいのいい、サツパリした男だった。

「だけれが、お前に、それを書かしたんだろう。お前が自分で、こんなものを書くと言うわけがない、だれだ、この文章を作ったのは」彼はストキをにらんだ。

「私が、作ったのです」ストキが今度は答えた。

「そうだろう。お前だと思つた。大体貴様は、横着だからな。貴様が、小倉や皆をおだててこんなものを出さしたんだろう」彼は裁判官のごとくに訊問しんもんした。

「そんなことは、きわめて枝葉の問題と思います。私たちは、食うために船乗りになつてゐるのです。であるのに、船の仕事のために負傷しても、手当をしてももらえないということになれば、私たちは、命をすててかかつたも同然です。もつとも、船では命をすててかかつてゐることは、当然だといえは当然ですがね。しかし、ただ、私たちだけが、命を安売やすうりするということは、私たちに、承知ちやうちができないことです」

藤原は、最初の探照弾を打ぶつ放した。

「それじゃ、勝手に下船して行つたらどうだったい。だれが、いつお前に、どうぞ、下船しないで乗ってくださいと頼んだ！ 頼んだのはどっちだったか、よく考えて見ろ」

船長が言つた。

「私たちは、どこへ行つても、いいところはないのです。だから、自分の『今』の生活を、よりよくする方法をとるよりほかはないのです。この船ばかりへ日が照らないと言つて、下船したところで、他の船でも、陸でも同じことです。だから、自分の今いるところで、より良い条件の下に、生活しようとするだけなんです」静かに彼は答えた。

「私たちは、どこへ行つたつていいところはないのです？ え、それは、一体、だれの責任だ。おれの責任だとお前は言いたいんだろう。おれは、今も言つたじゃないか、だれが、頼んで乗つてくれといったと。それに『より良い条件』の生活がしたかつたら、なぜもつと、勉強して上の方へ、昇るのぼるようにしないんだ。自業自得を、人の責任におつつけるのは、ずうずう図々しすぎるぜ」船長は、こいつ一つ脂あぶらをすっかりしぼりぬいてやろうと考えた。そして、それからつつ放す！ と。

「ご忠告は、ありがとうございますが、勉強して上へ上がって行く人間があまり多くなると、セーラーなんぞするものが、なくなるだろうと思ひまして」彼は危うく笑おうとするところであつたが、それだけは取りとめた。

「ばか！ お前は、おれを愚弄ぐろうしてるつもりか！ ばか！ が、いくら勉強してもばかばかなんだ。セーラーより上にはなれないんだ。だから、実力さえあつたら人に遠慮など

せずに、サツサと船長にでも機関長にでもなったらいいじゃないか」

船長は、だんだんストキの話の相手になつてしまった。

「私たちは勉強しても、船長はおろかボースンにも、なれないだろうと思つて居るのです。ですから、なおさら、私たちは、今のままで、幾分でもいい条件の下で労働したいと思うのです。私たちには、決して、船主になつたり船長になつて、富や、権利を、得ようという考えなんぞはないのです。私たちは、普通の労働者として、普通の人間としての、生活を要求するのです。人間として、船長は労働者よりもより特別なものだと、われわれは考えません。われわれは、今では、階級と称せられているものは、一つの仕事の分担に、過ぎないものだと思つています。それなのに、今では、ある仕事を分担すると、同時に、人間を冒流ぼうとくするようにさえなります。人間が、人間を虐げしいた、踏みつけ、搾取することを、えらくなると考えることは、半世紀ばかり前の考えだと、私たちは思つています。私たちは、人類の生活の一部分の貴いたつと分担者として、自分を見ているのです。だが、あなた方は、私たちを資本家と思つている」ストキは、その話にだんだん熱と真摯しんしとを加えた。

「資本家と思つている。お前らをか？ ハツハツハハハハ」とうとう船長も、あまりのストキの言葉にふき出してしまった。「恐ろしい資本家もあつたものだ！ ハツハツハハ

ハハハ、のみ蚤と南京虫なんきんむしのだろう！」

メーツらは皆笑った。セーラーたちが、資本家とは珍しい言葉だった。

「もし、私たちを資本家だと思っていないのなら、奴隷どれいと思ってるだけです。私たちの売ることのできるものは、私たちの労働だけです。つまり『からだ』だけです。だが、それも、私たちのものでないと考えられるならば奴隷だ、と考えられることになるでしょう。しかし、奴隷だったら、なぜその奴隷の生命を大切にしませんか。奴隷は、あなたたちの財産じやありませんか。私たちの生命が、あなたたちにとって、まるで、どうでもいものになったのは、私たちが奴隷から、資本家、すなわち賃銀奴隷になったからです。それは、とつかえるほど新しい、いい商品が、無限にあるからです。

それに、私たちは、いつまでも、どんな奴隷でもありたくはなくなりました。どんな機会にでも私たちは、私たちを縛る鉄の鎖を打ち切る用意をしているのです。

私たちは、人間として、生きようとして居るのです。そこへ持って来て、どうです！

私たちは蚤と南京虫の資本家！ 难道でしょう、私たちは、その要求が通ればよし、通らなければ、私たちの力がどのくらいあるかを、お目にかけるまでです」

ストキは最後の言葉に、力をこめて言い切った。

「フン、それもよからう。だが何かね。波田、おまえは自分から進んで、この要求書に捺^な印^{ついでん}したんじゃないだろうな。だれかが、お前を煽^{せんとう}動^{どう}したんだらうな」船長は、方向を転換した。

「私は、どの船でもストライクの種を、見つける役目をするつもりで、船のりになったんです。私は、この船に乗った最初の日から、風呂場^{ふろば}のないことでも、ストライクがやれると考えていたのです」便所掃除^{そうじにん}人波田は、風呂場のないことに、だれよりも、苦痛を感じていたのだ。それに、彼は、若くて新しい社会の空気を吸っていたのだ。船長はこの無邪気な、彼の便所を彼の居室よりも、金具などきれいにみがき上げるこのきれいな好きで、忠実な青年が「過激派」であろうとは思わなかった。それに「こいつはストライクを見つけて歩くなどと、抜かしやがる！ まるで、こいつらはパルチザンだ！」

船長は、意外に、水夫らが結束を固めているのを見た。それは、発作でもなかったし、衝動でもなく、計画されたものであったのを知った。

この時、火夫室ではまた、喊^{かんせい}声^{せい}が上がった。それがサロンへ響いて来た。

出帆時刻は、どんどんとおそくなる！ 正月はどんどん近くなる！

船長は、いら立って来た。

「西沢、貴様はどうだ。宇野（捺印した舵手）、小倉、貴様らも同意した、捺印したんだな。よし、チーフメーツ！ ボーレンへ至急行って、水夫四人、コーターマスター二人、ボースン一人、——とうとうボースンにも崇りは来た——すぐ、万寿丸へ、チャンスだといつてくれたまえ、そして、こいつらに乗船停止を命じて、それを雇い入れてくれたまえ、出帆が、あまりおそくならないように、今からすぐかかってくれたまえ！」彼はチーフメーツに命じた。

その結果は、水夫らは、昨日（きのう）からもう知っていたのだ！ 室蘭じゅうのボーレン（それは半素人）の（はんしろうと）も入れてたつた三軒切りなのだ——に、昔船のりだった、そのボーレンの主人が二人と、一人の沖売ろうとがいるだけなのだ！ 彼らは、陸上に一軒を経営しているのだ！ 彼らは、どんなことがあつたつて、十三円や十八円で、一家の生活を保とうとして船に乗る気づかいはなかった。ストライクブレイカーはおあいにくであつた。「そのくらいのことは、おれたちだつて気をつけてるよ」と藤原は言つてやりたかつた。波田はもうムズムズしていた。

ボースンは驚いた。その職業と、月二割の利子——もつともうち、一割はチーフメーツ（実は船長かもしれない）が、上前をはねるんだが——とが、ファイになるのである。しか

も、彼は、何をしたんだ！　ただ、忠実な番犬だったのみではなかったか。彼は、功労こそあれ何の過失があつたか、すでに、彼は、いったんの危急をチーフメーツのために、救助さえしたではないか。

「しかし、これは船長に何かの深い考えがあることだろう。一度、皆の前でそう言つて、ボースンは代わりがない——と言つようなことにするつもりなんだろう。でなきや、船長だつておれの首を切れた義理じやなからう、おれがいなけや、あの妾だつてあんな具合に、お安く手に入らなかつたに違ひないんだから」

哀れなボースン、彼は憶病犬みたいに、半信半疑で、主人の心を探つていた。だが、ボースン、君が、君自身のことを考えるようには、他の人は決して君のことを考えてはいないんだ。君自身が食えなくて餓死する刹那せつなにだつて、他の人は妾めかけのことや、芸妓げいぎのことなどを考えてるのだ！　他の人は、全く、他の人の身の上のことなど、てんきり考えはしないんだ。他の人とはお前を使うところの人だ、わかつたか、ボースン！

だが代わりは、ボースンに限つてないわけではなかった。それは、室蘭じゆうに一人のボーイ長の代わりだつてなかつた。

チーフメーツはややこの点に、その考えを向けるだけの余裕を持つていた。

「船長」と彼は、船長の回転椅子の背後から、低い声で船長を呼んだ。

「チヨツと」と彼はあとしざりした。

「何だね？ うん、ああそうか、じゃあ室へ」チーフメーツへ言った。チーフは船長室のドアの中へ消えた。

「お前らは、ここへ待つてろ！」水夫たちにこういうと、船長は、チーフメーツのあとを追つて自分の室へはいった。

船長も、その辞書の中から、不可能という字を、削る冒険はするくらいな男であった。従つて、チーフは、船長に室蘭でそれだけの労働者を、即時に得るといふことは「不可能」だと、いいたかつたのであつた。が、船長は、全く、始末にいかぬタイラントであつた。それは、コセコセしたちしやの葉のような感じのするタイラントだ。

「船長、室蘭にはボーレンが一軒切りありませんが、ね、……」彼は、どうだろうといつたふうに、

「正月前だから、休んでいるものがないだろうと思うんですがね」チーフメーツは切り出した。

「もし、室蘭になかつたら小樽おたるか、函館はこだてから呼ぶんだ。えーつと、しかし、そうすると

横浜帰航が大変おそくなるね。だが、室蘭に五人や十人の船員がないってことはないだろう。君は調べて見たかね」船長はきいた。

「実は、入港するとすぐ見て見たのですがね。二、三日前までは、三、四人休んでいたが、便をかりて横浜へ行つたとか言つてたんです。だから、それから一週間にもならないんだから、とてもだめだろうと思うのですよ。で、なけれや私もストキは、早く処分しなけりやならないとは思つていたので、代わりさえあれば、ここで下船させるつもりだつたんです。あれさえいなけりや、何なに他の連中は尻馬しりうまに、乗つてると言うだけのもんですからね。どうでしょうあいつだけを、下船させることにして、あとはチビチビやつたら……でないと横浜正月がフイになりますよ」

チーフメーツもボーレンを探つていたので！

「そうだなあ！ 僕も、浜で正月をしたいと思つてるんだが、それさえなけりや、十日や二十日いかり錨いかりを入れたつてかまやしないんだけどなあ、じゃあ、応急手当として、ストキだけ下船さすか」船長も賛成した。

「それがいいと、思うんですがね。ただ、その方法です。どういうふうにしたらいいか、皆の前でやるか、それとも一人だけ呼んでやるかですがね。で、もし、水夫ら全体があい

つについて行くというような時には、二十か三十やって追っばらうよりほかに、仕方がないと思うんですよ」チーフは何でもいいから、彼が、この船から「消えてなくなれ」ばいいと思うのであった。

「そう！ 何にしても、この際時間を争うんだからね。どんないい方法も遅れちやいけな
いんだから。じゃ、ストキのやつに下船を命じよう」船長は言った。「だが、一体、やつらは何という不都合なやつらだろうな。これが横浜だったらなあ」

船長は、横浜でないことを、返すがえすもくやしがつた。やつらを「殺しても、あき足らないほどのなのに、場合によっては、下船どころか金まで出すとは！」全く、彼のくやしがるのは理由わけがあつた。

「何にしても時が、悪いもんですからなあ。ところで、ストキが、海事局にボーイ長の雇入れ未済のことに、負傷のことを申告しやしないかと思うんですがね。そいつをやられると、どうもおもしろくないから、なるべくうまく、ごまかす必要があると思いますね」チーフメーツは、外に出ようとしながら言った。

「だが、全く、癩しかくにさわるじやないか、停止も食わせないなんて、監獄にでもほうり込んで、やりたいくらいだ。治警に立派に、引つかかっているんだからね。畜生め？」

それは、船長が憤るおこのは、いうまでもない「ごもつとも」な話だ。

二人は、まだ何かこそと話した。一々そんな話を書くのは、面倒臭くて堪たえられない話だ。先へ進もう。急げ、急げ。

四五

船長と、チーフメーツとはサロンへと出て行った。

ところが、これはどうだ。サロンの入り口へ火夫たちがまっ黒に集まって、中をのぞき込んでいるのだ。口笛を鳴らす者があった。足踏みをするものがあった。

船長とチーフメーツとがサロンへはいると、彼らは、水夫たちへの激励から、船長、チーフメーツへの示威運動へと移った。

口笛が盛んに鳴った。足踏みが拍ひょうし子をとって、踏み鳴らされた。

「何だ！ そんなところから、のぞき込みやがって、あっちへ行け？」船長は怒鳴りつけた。「何言つてやがるんだい（以下六字不明）！」だれかが後ろから叫んだ。

これは早く、片をつける必要があると考えた。船長は、入り口の方へ、その「物すごい」

目を一閃放^{せん}つておいて、椅子^{いす}へ腰をおろした。

「どうだろう。これは即答もできないから、横浜へつくまで保留したら」彼は切り出した。「船長、それはいけません。私たちは、これが室蘭だから、要求として成立することを知ってるのです。横浜まで行けば、産業予備軍が捨てるほどおります。私たちは、ここで要求が容^いれられなければ、労働をしません。それから、これはどうお考えになってもご随意ですが、私一人を餓^{かくしゅ}首にしたにしても片はつきません、と言うことを申し上げときます。

私たちは、何の相談もしないのに、機関部の方でもあんなに、動揺してるじゃありませんか。この要求は恥ずかしいほど、妥協的なおずおずした時代遅れの、要求ですよ。これが容れられないということになれば、『お前たち奴隷は、おれたちの（もの）だ』ということになりますよ。

あなたたちが、一か月の俸給だけで四百円——彼はこれを聞くのに苦心したのだ——取って、戦時利益特別賞与が年四十五か月分ある。この現在、私たちが、月給十三円から十八円で、命をかけて労働するということは、私たちは、あまりいいこととは考えられませんが。あなた方は、自分の懐中の裕福なので、夢中になっていられる間に、私たちは俸給の三倍もの率で、物価が上がってるので、非常な減給を受けた形になっているのです。おま

けに、労働時間は、船が忙しいと同じ比例で、私たちをかり立てています。一日に十四時間、まるで、懲役囚よりも長時間です。その上公休日なしです。けがはしつ放し、死に放題、しけだろうが、夜中だろうが、おれは宅へ帰るからサンパンを押し、お前たちは夜明け前に帰れ！　これが私たちなんです。どうですか、聞いていて恥ずかしくなるような労働条件ではありませんか、実際、監獄だつてこれよりは、はるかにいい待遇が与えられていますよ。その監獄よりひどいのが、万寿丸で、その船長が吉長武よしながたけしといわれては、あなたの名誉でもなかりうと考えます」

藤原は、また思い切つてやったものだ！

船長及び士官らの、憤慨ぶりは頂点に達していた。彼らは、椅子のクッションのように赤くなつたり、海のように青くなつたりした。彼らの憤慨と同じ比例で、水夫らは喜んだ。「全くだ！」とうとう波田が怒鳴つてしまった。

「そうだ！」波田の気合のかかった言葉につり込まれた、扉とびらの外の火夫たちは、一斉に喊か声んせいをあげた。

「第一、私たちは、肉体を売る資本家かもしれない！　だが、要するに、私たちは生きているんです。おまけにまだこの上も、生きて行きたいと思つているんだ。生きて行きたく

なげや、こんな船になんぞだれが乗るもんか、畜生！」波田は、まだまだ言わなければならぬことが、山のようにあつた。あまり言うことが多くて、彼の言葉がスラスラと出なかつたために、畜生！で爆発してしまつた。

「だれが畜生だ！ 失敬な」船長は、夢中になつて立ち上がった。

扉口とぐちの外からは、罵声ばせいと足踏みとが聞こえた。「燃やしちやうぞ！」と聞こえた。

私はこの「燃やしちやうぞ」と言う言葉の来歴を話したいが、ごらんの通り今はとても忙せわしくて。

「そうではないか！」波田は立ち上がった。

「尊い人間の生命を等閑にしたのは、どいつだ！ ボーイ長でも、父と母とから生まれて、人間としての一切の条件を、貴様らとすこしも異なるところなく、具備しているんだ！

それなのに、どうだ！ ボーイ長が負傷してから、一度でも、貴様は、彼のことを考えたことがあつたか、貴様に、人間の生命を軽蔑けいべつすることをだれが許したんだ！」

彼は夢中になつてしまつた。

「もし、貴様が、この上も、ボーイ長に対して、畜生の態度をとるなら、おれにも、覚悟がある！ 貴様がボーイ長を見殺しにするなら、おれは……」とうとう波田は、その腰に

さしていたシーナイフを引き抜いた。

「あぶないっ！」と皆が叫ぶ前に、彼は、それをテーブルの上に、背も通れと突きさした。「おれは、畜生に対して、人間として振る舞われたいんだ！」

一座は、死んだように静かになった。扉の外の連中は、目ばかりになって、息を殺して成り行きを見張っていた。

「貴様は、権利を持っている。この地上には、むやみに多くの権利が、他の権利を蹂躪じゆうりすることによって存在してる。だが、船長、いいか」彼はテーブルを、今度は拳骨げんこつで食わせた。「人間を、軽蔑する権利は、だれもが許されていないんだ。また、他人の生命を否定するものは、その生命も、否定されるんだ！ わかったか」彼は、そこにそのまま、すわることを忘れたようにつつ立っていた。彼はにらみ殺してもしそうな目つきで船長を見据えていた。それは、まるで、燃える火の魂のように見えた。

ストキは、波田の突き刺したナイフを静かにテーブルから抜き取った。そして、自分の席の前に置いた。

船長は、ピストルを持って来なければならなかったが、そこを立つわけに行かなかった。彼は、初めて、彼が、ほとんど、歯牙しがにもかけなかった、低級な人間の中に、高級な彼を

も威圧して射すくめてしまうだけの威厳を見た。それは、全く、何も持っていない、一人の労働者だ。地位も、金も、系累も、家も、それこそ何にもない、便所掃除の労働者の青二才じゃないか、だのに船長は椅子から立ち上がれなかった。

彼は一度立ち上がって、途中で、グズグズとすわったことを悔いた。その、彼の前に立っている労働者が彼からその「煮える」ような眼光を放さなければ、彼は立てなかったのだ。

それは、彼の職業的な、因襲的な、尊厳を傷つけるものであった。そして、一度負けたが最後頭の上がない鶏のように、その後は、彼を永久におき圧えつける一種の不快な、重しになるであろう。それは脅迫観念にとらわれた病者が、何もないとところに、恐るべき幻影を見て、狂い続けるのと同様であろう。それは見かけ倒しの立派な、芝居しばいの建て付けに、全身の信頼をもつてもたれかかって、一緒に倒れるのと同じ人々の運命であらねばならぬ。彼は、芝居の建具によっかかっていたのだ！

「貴様は、大きな錯覚に陥っていることを、自分で知らないんだ！ 貴様だって、被搾取材料だ！ でなきやほうかん幫間だ！ 自分自身が何だかってことを、内部からハッキリ見詰める！ もしボーイ長を、この要求どおり、この要求は、あまり遠慮がしすぎてあるんだぞ、

いいか、もし、これを許さなかったら、おれには覚悟があるんだ。おれが、覚悟を持つて
 ることは、もう言わなくてもわかつてゐるだろう。サア！ くだらない筋だの、金ピカだの
 を除^とつて、人間として、人間の要求に応ずるがいい」

波田はその椅子の上へ、ドカツと腰をおろした。そしてシーナイフを藤原の前から取つ
 て彼の尻^{しり}つぺたにブラ下がっている、その帆布製の鞞^{さや}に収めた。

人々は初めてホツとした。彼がライオンのように、あばれ回らなくて幕になったことが、
 だれもを安心させた。実際、それはまあよかつたとだれもを感じさせた。

船長は、まるで、ばかにしたような態度を、要求書へ向けていたのだが、今では、それ
 が非常に尊いものでもあるように、チーフメーツの前から、自分の前へ引き寄せて、な
 がめ初めたのであつた。この紙つきれに、あの情熱と憤^{ふん}懣^{まん}とが織り込まれてあつたのだ
 ！ 彼は、それを引き裂かなかつたことを今になつて喜んだ。

それを引き裂きでもしていようものなら！

「それで、その要求書にある条項を、一々説明しましょうか、もし、お求めになるならば」
 藤原は言つた。

「いいや、説明には及ばないだろう。大抵わかつてゐるだろうから。しかし、一応メーツた

ちと相談しなければならぬから、お前たちは、ここでちよつと待たせてもらいたいね。ちよつと相談をして来るから」と藤原へ言つて、「どうぞ私の室まで」とメーツらに目くばせをして、彼は船長室へ又またぞろ候はいつて行つた。メーツらは続いた。

「波田つてやつあ、どえらいやつじゃねえか」とサロンの外では、波田の行動に対して、賞賛の辞を惜しまなかつた。「あれに限るよ。あれで行きや、こちとらだつて、いつでもこんな苦勞しなくても済むんだが」

「そうさ、力の強いのが勝つんだ。おれたちやのまれてるんだ」などと火夫たちは、その場から去ろうとはしなかつた。

水夫たちは、相手がいなくなつたので、極度の緊張から解放されて、煙草たばこに火をつけて、休憩した。

「どうだい、ボースン、お前の代わりまでいいつけられたじゃないか」波田は、ボースンの方を向いて言つた。ボースンは、まるで、ひどく頭でも打たれた者のように、ボンやりしてゐた。出し抜けに船長を斬きつたりするやつは、彼も見たことがあつたが、口も手も、これほど達者なやつは見たことがなかつた。「それにやつはまだ子供じゃないか」ボースンは、びっくりしてしまつてゐた。「いや、どうも知らなんだ」そのはずであつた。

波田は、酒も飲まず、女郎買いもせず、おとなしくして、よく仕事をする評判な青年だったのだ。「全く、人は見かけによらないものだ！」

「え、どうだいボースン？」今度は藤原がぼんやりしてるボースンにきいた。

「え、ああ、おれあぼんやりしてたよ」彼はほんとにぼんやりしていた。

「冗談じゃないぜ、しつかりしてくれよ。皆大汗で働いてるんじゃないか」

西沢と小倉と宇野と波田と、この四人は交渉条件のことについて、何かしきりに話し合っていた。

そこへテーブルの上へ、機関部のボーイ長が、紙つきれを持って来て載せた。そして「これを機関部から」といつてそのまま、逃げるようにして飛んで行った。

西沢は、その紙つきれを開いて見た。

フントウ ヲ シヤス、セイコー ヲ イノル、キカンブカフ 一ドー セーラー
シヨクン

と電報文みたいに片仮名で書いてあった。

彼らはそれを見て、戸口の方を向いて、手をあげて合図をした。

「徹底的にやれ、ひぎょう罷業になれば、火は焚たかんから」戸口の外からだれかが怒鳴った。

四人はそれを藤原に見せた。彼は「ありがとう」と叫ぶのを忘れなかった。

やがて、船長室に密議を凝らしに行つたメーツらはサロンへ引つかえして来た。

要求条件には念入りにも、船長と、チーフメーツとの判が並べておしてあつた。

「皆と相談の結果、要求を容れることにしたから、今からすぐに働いてもらいたい、ボーイ長は、横浜着港と共にすぐ入院させるし、その他の条件も、即時実行することにしたから」船長は、低い声で言つた。彼は自ら進んでこの条件を、認容したのだといったふうに見せかけたかつたが、あまりにも狼狽ろうばいした彼にはその方法もできなかつた。

「バンザイ」ごま「態ごまを見る！」ごま「労働者フレーフレー」などといいながら扉の外の火夫たちは、ドヤドヤと立ち去つた。

「それじゃ、今からすぐに仕事にかかつてくれ」チーフメーツは言つた。

「へー、かしこまりました」ボースンは答えた。

「どうもありがとう存じました」藤原は、判のおされた要求書を、ポケットに収めながら言つた。

彼らはおもてへ帰つて行つた。

水夫らは勝利を得た。だが、何だか物足りない感がだれもの、心のすみにわだかまつて

いた。彼らは、何かの予感を感じていたのであった。

火夫室の前では、彼らは、万歳を三唱してセーラーを迎えた。

その日の出帆は、それでも、水夫らにとつては、「凱旋^{がいせん}將軍の故国への船出」の感があつた。

四六

その航海は異様な航海だつた。水夫たちは人間として、取り扱われ初めたように見えた。命令を発するところのメーツらは、彼らが単に、作業の分担的任務から、行動するように命令した。そして、その内容も整頓^{せいとん}され、そのために同一の効果に対して、水夫たちは以前の三分の二の労働と時間とで済むくらいになつた。

船長にしろ、ほかのどのメーツにしろ、今では「ゴロツキ」の下級船員たちが、ただもう「みじめに働いている」と言うことだけに、その興味を持たなくなつたように見えた。下級船員たちが、「人間」らしくあるということが、今では、彼らの権威を傷つけるといふ、その妄想^{もうそう}から彼らは、解放されたように見えた。

どことなしに、いや、それどころではない、はつきりと彼らは、あまりに現金すぎるほどに、水夫たちはおろか火夫たちにまでも遠慮していた。

それは、内実を知らない人々から見ると、平和であった。そして万事が控え目であった。「謙讓なるメーツらよ！」と知らない人は、それが労働者であっても、ほめたであろうほど、静かであった。従つて、船員たちも「ゴロツキ」ではなかつた。

彼らも、彼らが人間らしく振る舞い得、また、そうすることを、禁じられさえしなければ、彼らは立派に——人間らしく振る舞つた。

水夫らは、自分らに酬むくいられる、労銀は何であるか？ ある者は知り、多くは知らなかつた。ただ彼らは、彼らの生活がはなはだしく脅かされる時だけ、仲ちゆうげん間のちゆうげんのような彼らの忠実さから、彼らは、自身に立ちかえるのであつた。そして、彼らは、それに成功することもあつたが、多く失敗した。ことに決定的な立場から言えば、彼らは、まだ、要求してもいないのに、たたきつぶされたのであつた。彼らは、三上のように、あるいは、波田のように、あるいは小倉のように、西沢のように、自分をだんだん強く羽がいじめにする、労働条件から免れようとして、個人的に行動した。

彼らの行動はまるで相反するようにも見えた。そのことについて彼ら同志の間にけんか

さえも起こった。だがそうしたのには、彼らの上に重く苦しうおおいかぶさった「苦役」と、「困窮」とであった。それをあやつっている資本制の糸であった。彼らは、自分たちのやっていたことと、藤原のやっていたことがまるつ切り違ったことであつて、そのくせ一つものを目あてにしていたのだと言うことをさとつた。彼らはものにはやり方があると云うことを教わつた。

これまでは彼らは「一つ釜かまの飯を食う」仲間の関係であつた。だが今では、それ以外に「労働者としての階級」に属する同志だという感情がつけ加えられた。それは彼らの間を妙に強く繋くりつけ、親密にしたようだつた。

「女郎買ぢやうがいい」の友だちから「牢獄らうごくまで」もの同志の關係に押し進められた。

それは、藤原が説すき奨すめたためであつただろうか、あるいは彼が「煽動せんどう」したものであつただろうか。だれか一人ひとりの力がそれほど多くの人を動かしただろうか、それは、もしそうであるとしたら、その多くの人は自分自身の意志に反してまでもそうなつたのであるか。それは暑い空気の中で人々があえぎ、寒い空気の中で人々がふるえるのと同じく、資本制経済の下もとに労働者が一様に抱いだいてるところの、反抗の小爆発ではなかつたか。

私たちは、多くの労働争議が、唯物史観に基づいて行なわれ、唯物史観に基づいて罰せ

られることを知っている。

この小さな物語も、その一つの定められたる軌道を出で得ないことは、私の筆を、洩らせ、進み難くする。だが、それは、（以下八字不明）、***な勝利は得られるものでないという事実の前に忍従して、私は筆を進める！

この航海は、暴化しけの前の静けさであり、暴化のあとの寂しさであった。

それは、そんなことのあとには普通のことであった。そしてその普通のこととは、労働者階級にとつては悲しいことであり、つらいことであつた。憤慨すべきことであつた。が、資本家にとつては、まだ食い足りないことであり、手ぬるいことであり、齒がゆいことであつたが、やや「愉快」なことでもあつた。だが、それは何だ？ 私はまたあまり先走りすぎた。それは横浜についてからのことだ！

今度の航海——横浜入港は、どの船員の心にも大きな期待を持たれていた。そして出帆も四日ごろまでは早くてもかかるのだつた。正月の一日はだれでも休むのだ。そして、彼らは一様に、——ちようど炎天の下を強行軍する軍隊の兵士が一樣に水を欲しているように、——陸上における、陸上であれば木賃宿でもいい、生活に飢えていたのだった。それに、そこは正月ではないか。そのために彼らの足は地についていかなかった！

本船は、立派に化粧して入港するのだ！ 船は二、三日碇泊するんだ。いくらかの月給のほかに、手当があるはずだ！ あそこに行こう、ここに行こう、おれは東京まで行って来よう！ 種々に彼らは考えていた。

高い鉄の窓、あるいは高い赤い煉瓦の塀を越えて、囚人が社会の空を望む時に、彼らはそこに実際以上の自由があり幸福があるように考えると、ドストエーフスキーは言ったが、それは全くうまいことをいったものだ、それと同じく船のりたちも、陸には実際以上の憧憬を持った。彼らは、それが陸上でさえあればどんな幸福でもありうると、彼らが陸にいて苦しきのあまりかつては、海へ逃げ出したことさえも忘れて思うのであった。あの時分と今とは変わつてゐるだろうと、またあの時分はおれがまずかつたんだと。彼らは、夜の入港のように、陸の醜悪な事実を一切闇のおおうにまかせて、その明るい、港の魅惑的な燈火にあこがれてしまふのであった。そのくせ彼らは、どの上陸の際でも陸上の生活が、彼らと非常に縁遠いものだということを感じさせられた。それはちやうど、陸上のすべての事物や人が、彼を突つ放すのだと感ぜずにはいられないのだった。

それは左ねじの電球が、右ねじのソケットにはまらないのと同じく、彼らを専門的にし、不具的にしたのだ。

万寿丸は一晚港外に仮泊しないでも済むように順序よく、進んだ。尻屋しりやの燈台、金華きんかざ山の燈台、釜かまいし石沖、犬吠沖いぬぼう、勝浦沖かつうら、観音崎かんのんざき、浦賀うらが、と通つて来た。そして今本牧沖ほんもくを静かに左舷さげんにながめて進んだ。

水夫たちはフオックスルにスタンバイしていた。雪もよいの風は鋭く頬ほほを削つた。その針はどんな防寒具でも通すのだから、水夫らの仕事着などは、蚊帳かやのようであった。彼らは、雨も雪も降らないのに、合羽かっぱを着ていた、それは寒さをも防ぐし、軽くもあるのだ。そして飛沫ひまつをも除よけることができるのだ。

十二月三十一日、午前九時——全く、うまく行つたものだ——万寿丸は横浜港内深くはいつて、ほとんど神奈川沖かながわ近くへ投とうびよう錨いした。

本船が港内にはいるや、すぐに会社からのランチが、本船のまわりを水ぐものようにグルグル回りながらついて来た。

それは十二月三十一日であった。大晦日おおみそかであった。それは、いかなる労働も休んでいゝるはずであった。けれども、その当時は戦争が、ヨーロッパにおいて行なわれていた。そのため、狂的な経済的好況が、日本のブルジョア階級を、踊り菌たけでも、食つた人のように、夢中に止め度もなく踊り狂わせた。そして、その有頂天な踊りと、そのための労働者

へ対しての節欲とが、その大晦日に、仲仕をして石炭荷揚げをなさしめた。すなわち、万寿丸には、仲仕が、ランチにひかれた舢はしけの中に満載されて送りつけられた。仲仕——権三といわれていた——は、特別の賃銀を支払われると言う約束で、明日あすのお屠蘇とその余分の一杯をあてにしてやって来たのだ。

人足はしけの舢はしけは本船へつけられた。ロープを伝たづなつて猿さるのように駆け上がる。彼らは、ただ競争するのだ。そのために得るところは彼らを駆かつて過度労働に追い込み、資本家をしてより一層その財布を重くせしめるだけのことだ。だが、彼らはわれ先にと飛び上がる！

万寿丸は荷役を初めそうに見えた。ウイッチは仲仕らにかかつてはむやみに手荒く取り扱われる。バルブ明けつ放しで、ハンドル一つのゴーヘーゴースターンだ。

私はこんなふうに書いていたら、切りがないだろうということに気がついた。私はまだ船長と三上とが、室蘭で同じ女郎を買当てて兄弟になったということも、書くつもりでいた。が、そんなことは別に不思議なことでも珍しいことでもない。やめてしまおう。

ランチから、会社員が船長室へはいつて行った。そこで、彼らはコーヒを飲みながら、なにか話した。

船長は、水夫らの「不都合なる行為」について厳罰を与えようと、室蘭においてすでに

決心していた。で、彼は会社から来た社員に対して、簡単に「水夫たちがいかに不当な要求を、横着な態度でした」かを話した。だから、彼ら、水夫ら全部を下船させると同時に、引つ縛つてやる必要がある。「ついでに三上の伝馬事件も告発するつもりである」ことを、彼は告げた。だから、「会社へ帰つたら、秘書課長へその由を伝えて置いてもらいたい」と言うのであった。

一方チーフメーツは投とうびよう 錨いかりと共に、通い船に乗つて水上署へおもむいた。そして、ここで室蘭であつた一部始終を話した。——彼はボーイ長のことは話すのを忘れた——それはきつと藤原の煽せんどう 動だ。ことに波田はメスを抜いてわれわれを脅迫した。彼らはきつと暴行に訴えてもその実行を迫るだろうから、本船へ出張の上保護を加えてもらいたいと願ひ出た。

水上署のランチは、チーフメーツと共に、屈強なる巡查五、六名を載せて、威勢よく出動した。

ランチは万寿丸のタラップについた。チーフメーツは警官たちをサロンに案内した。そこで、巡查諸君は、りんごと、菓子と、コーヒーとの「前で」しばらく待たなければならなかつた。

水夫たちは、ウインチに油をさしたり、種々な道具類を片づけたりしていた。そして彼らは、「その夜は、明日の朝まで、あすつまり正月の朝まで帰らないでいい上陸ができる」と考えて、愉快な気持ちになつて働いていた。確かに、彼らは、当然、船に帰らないでもいい上陸によつて、待ち受けられていたのだ。

船長は、今は、前航海の、夜中におけるサンパンの中の船長でも、出船前の室蘭における彼でもなかつた。彼は今は暴力的であり得た。最も露骨なタイラントだつた。

船長の命を受けたものボーイは、おもてへ来た。そして、ボースンに言った。

「ボースン、荷物を片づけて、下船の用意をして、ボースンと、藤原と、波田と、西沢と、小倉と、宇野と、サロンまで来いと、船長がいったよ。それからね、オイ」彼は今度は彼自身の部分の話に移つた。「水上署の巡査が十五、六人サロンへ来て待つてゐるぜ、きつと波田があげられると思つて連れて来たんだぜ。すこしあげられた方がいいんだ全く。皆にそういつてくれよ、いいかい」彼は、ともへと歸つて行つた。

そのことは、もう皆に特に通知するまでもなかつた。ともものボーイが来れば、何かの命令だということはわかるので、水夫たちはボースンの室の前で立つて聞いていた。

「まずかつた！」藤原は感じた。「しかし、これほど徹底的だとは思わなかつた。これじ

やまるで船はカラツポだ！ だが！」彼はじつと我慢した。彼にはもう彼が歩いて行く道筋がハツキリわかっていた。それは白くかわいた埃ほこりっぽい道である。沙漠さばくのように、人類を飢餓と渴とに追いやるどころの道であった。

波田もさどつた。おれたちは「それでは行くんだな」と思った。「おれたちの行く道は、右は餓死だ、左は牢獄ろうごくだ」彼は吐き出すようにいった。

四七

彼らは各自おのの運命を知つた。そしてその行李こくりへありつただけの彼らの持ち物を詰めた。

彼らは、その持つている者は、布団ふとんまでも行李に詰めた。彼らの行李はなお余裕を持つていた。彼らは、全く簡単に、その世界一周旅行にでも上りうるのであった。船乗りの生活は乗客として見た場合には、全く異なつた観を呈する。それは、水火夫に至つては、乗客から見たのではまるでわからぬのだ。ことに貨物船においては、乗客がないのだ。乗客がないということは世間態ていがないということになるのだ。風呂ふろさえないのだ。搾しぼりたいだけ搾るのだ。

彼らは、食つて着るだけでお不足であつたので、従つて、その最初船に乗る時に買った行李、その中へ詰まっていた種々の物が、だんだん減つては行つてもふえて行くなどと言ふことはほとんどなかつた。

その空隙すきまの多い、中実の少ない行李を引つかついだ彼らは、あたかも移住民の列のように続いて彼らの疍ねぐらからサロンへとおもむいた。

彼らの去ることを知つたボーイ長の悲嘆ははなはだしかつた。彼は、藤原と、波田との手にすがつて、何か言いたそうにしていたが、ようやく出た言葉は、はげしい嗚咽おえつのために聞きとることができなかつた。だが、彼は嗚咽を語つたのだ！ 彼は一切を奪われた。その最初であると同時に最後のものである。彼の売ることのできる唯一の労働力さえも、彼が労働力を売つたことが原因となつて、奪い去られてしまつたのだ。

そして、彼を保護し、愛してくれた人々は、今警官のいるところへ、船長に下船の用意をして来いといわれて、出かけて行くのだ。その船長は何だ！ 自分の生命にさえ一顧を与えない勇猛果斷な男だ。ボーイ長は、自由を奪われて以来病的に発達した神経によつて、そこには何かよからぬことが待ち受けてるに違ひない、ことを直感したのであつた。藤原さんや、波田さんたちはもう下船させられるんだ。そして、おれは動けもしないこの足で、

あの冷酷なメーツたちの下にどうなるんだろう。忘れっ放されるんだ！ 彼は泣いた。

泣くということは、それは船では今までなかったことだ。血気な青年が壮年の労働者たちの間に泣くということは見られないことであつた。

ボーイ長は齒を食いしばつて、嗚咽わえつを止めようとした。そして厚い礼も言いたい。彼らの今後の行動の予定も知りたい。どうすればどこで会えるか、その方法も知りたい。また取りあえずの所書きももらつて置きたい。自分の所書きも渡したい。ああも、こうもしたかつた。それだけなおさら、彼の涙は、あふれ落ちた。彼の泣き声は食いしばつた齒の間から、鋭くもれた。

藤原のほとんど冷酷な、動いたことのない意志そのもののような目の中にも、重く、鋭く、悲しみがひらめいた。

波田も齒を食いしばつた。そして力をこめてボーイ長の手を握つた。そして、「からだを大切に、早くなおりましたまえね」と言つた。が、彼は、自分たちが去つたあとではボーイ長はどうなるだろう、その傷やまいや病はだれが氣をつけるのだろう、と思つては、「なおりましたまえ」という言葉さえも惨酷な言葉であつたと思ふのだつた。打つちやらかちといつて、どうしてけがや病がなおりうるか、だれがこの責任を負うのだ！ と思つて、彼

は思わず涙のにじみ出るのを覚えた。そして彼の心は、ますますのろいの焰ほのおを強く燃え立たせた。

「またどこかで、会うこともあるだろう。それまで、お互いに丈夫でいようよ、じゃ大切にしまえ、さようなら」藤原は一握して立ち去った。

「からだを大切にしてください。さようなら」とボーイ長はいつて、その枕まくらに頭を埋めた。
「さびしいなあ」彼は、止め度もなくあふれる涙の中へ顔をいつまでも埋めていた。

「資本主義制度は、くもの巣みたいに、おれたちを引くくるんでいるんだ。どうあがいてもそれは気味悪くからみついて来るばかりだ、畜生！ 今に見ている土ぐもめ！」藤原は考えながらデツキを大またに歩いた。

サロンには、船長以下メーツらは、その装飾した上陸姿を並べていた。

警察の巡査は後ろの方に立っていた。

「フン、無意識的にブルジョアやその（以下十四字不明）、（以下十字不明）！」藤原はその情景を外からながめて感じた。

波田は、全身の血が頭に逆流した。彼は、心臓でもえぐるように、船長の顔に燃えるような目を注いだ。

船長は、しかし、今は充分に「因襲的尊嚴」の鎧を着て、旗、差し物沢山で控えていた。一同は、その各おのおのの、行李をサロンの出入り口へ投げ出して、一様に不愉快な気持ちを抱いだいてそこへ行つた。

「皆そろつたね」と船長はチーフメーツに言つた。

「ええ、これで全部です」チーフメーツは答えた。

「それじゃ、いい渡してください」

「ボースン、小倉、宇野、西沢、とこの四人は、下船命令、藤原、波田も同様皆、僕と一緒に海事局まで行つてくれ、それから、藤原と波田とは海事局には行かないでよろしい。手帳はあとで渡すから。二人は警察の方で用事があるそうだから」それが宣告であつた。そして彼は、つけ加えを忘れなかつた。「だから、おれが室蘭で、よした方がいいと言つたんだ。お前らが、いくら威張つてもあかん。それよりおとなしくした方が得だ。おとなしくしとれば、人の憐あわれみもかかるが、強いことをいうと、こういう際にだれも相手になり手がないからな」

「自分によくいつて聞かせとくがいいや、おれらのことならお世話にやならないや。道が異ちがつてるんだからなあ。そのうちどんなお礼をするか覚えてろ！」波田は怒鳴りつけた。

「あれが波田つてやつです。あんな乱暴なやつです！」船長が言った。

「何を！ べら棒め！ 死にかけた人間を打つちやらかしくようなやつが、人のことがいえるかい。手前てまえより乱暴なやつはねえんだぞ、圧搾器め！」波田は船長をも怒鳴りつけた。

「マ、せいぜいあばれて、警察で油をしぼられるがいいさ」船長は言った。

「おれの出で来るまで、手前は丈夫で生きているように、おれは祈つてらあ。途中で燃やされちやわねえように気をつけな」

だが、船長は、早速さっそく引つ込んでしまった。

チーフメーツは、ボースン、小倉、宇野、西沢を連れて、二人の警官と共に海事局に行つた。

彼らはそこで物の見事に首を鹹きられた。

これが十二月三十一日だ。

藤原と波田とはランチで水上署へ行つた。

正月の四日までは警察も休みだった。従つて、藤原と波田は、留置所の中で正月を休むことができた。

彼らは正月の仕事初めから、司法で調べを受けた。そして治安警察法で検事局へ送られた。

検事は彼らを取り調べるために、彼らを監獄の未決監に拘禁した。

彼らには面会人も差し入れもなかった。あたかも彼らは禁錮刑囚のように、監房の板壁をながめた。

食事窓や、のぞき窓や、その他のすき間からは、剃刀かみそりの刃のような冷たい風がシュツシュツと吹き込んだ。

彼らは、そこで刑の決定されるのを待った。

——終——

青空文庫情報

底本：「海に生くる人々」岩波文庫、岩波書店

1950（昭和25）年8月10日第1刷発行

1971（昭和46）年11月16日第12刷改版発行

1986（昭和61）年7月16日第20刷発行

底本の親本：「葉山嘉樹全集」改造社

1933（昭和8）年発行

※1950（昭和25）年発行の、底本旧版の解説によれば、親本は「作者が眼を通して」と思われ、また初版本の誤字や仮名遣いのあやまりが修正されている」。また、底本では、若干の字句上（主として句読点）の修正及び若干のルビの復原を、初版本（1926年）と改造文庫本（1929年）を参照して行なつたとされている。伏せ字を起す作業には、戦後の小学館版「葉山嘉樹全集」も参照したとも書かれている。「海に生くる人々」初版本は、1926（大正15）年10月18日付けで、改造社より発行された。同書は「精選名著複製全集近代文学館」の一冊として、1974（昭和49）年10月1日付けで、財団法人日本近代文学館よ

り復刻刊行されている。

※底本（岩波文庫、1971年改版）の誤記と思われるものに関して、「筑摩現代文学大系36 葉山嘉樹集」筑摩書房、1979）などと照合した。

※底本の旧版（岩波文庫、1950年）に掲載された蔵原惟人氏による解説には、5字以下のものは*で表し、それ以上のものは、その字数を注記した、とある。

入力：大野裕

校正：かとうかおり

2000年3月7日公開

2006年3月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海に生きる人々

葉山嘉樹

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>